SILVER BLITZ

笹塚諒兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＩＬＶＥＲ　ＢＬＩＴＺ

【Ｎコード】
Ｎ１３７３Ｗ

【作者名】
笹塚諒兵

【あらすじ】
「生き残りたければ、戦いなさい」少女、月波綾乃は言った。いきなりことで混乱する中、奴等魔術師――――――――シルバーブリッツは襲い掛かって来る。いきなり非現実的世界へ招かれた少年、緋之聖は綾乃に「クズ」と呼ばれながらも仲間達と戦うことを強いられた。己もまたシルバーブリッツとして、高校の偏差値を守るために渋々と立ち上がったのだ。　高校の偏差値は学力を指すものではない。裏で戦うシルバーブリッツの魔術戦力を表すもので、それで生徒や高校の生活が決まるのだから……！

月が似合う少女　？（前書き）

「クズ」と少女は罵倒する。「戦いなさい」と少女は無理強いをする。なぜなのか何の理由があってのことなのか。一切が謎に包まれたまま少年はそこに立つ。

暗闇の中で襲い掛かる魔法。少年は命というカードを抱えて闇を走る。

月が似合う少女　？

こうなった理由。それは言葉では決して表し切れないような、例え言葉で表せてもそこまで簡潔に説明できるものではない。
平常な生活を送って来た自分にとって、この事態は理解し難いものとなっていた。
なぜ人々は僕を襲うのだろう。何度も自問するも自答する術がない。

「はぁ、はぁ……くっ！」

全速力で疾走する途中で振り返る。追手はない。
薄暗い密林を走るのは辛い。時間的にも夕方を過ぎてしまったため、日光が山で隠れてしまって光源を失ってしまった。
唯一の光源である月の光も、あの薄暗い分厚い雲に覆われてしまっては七割も役に立たない。仕方なく闇に紛れ、姿を眩ませようとしたが、相手の術の前では天候による闇も意味を持たない。
戦況ははっきりと言うと、最悪だった。仲間による救援はあまり望めない。この事態を自分で解決せよと戦場に無理矢理おくりこんだのだ。
すると、背後に気配がした。すぐにその場で横に飛ぶ。次の瞬間、今まで自分がいた場所を何かが物凄い速度で通り過ぎる。
熱い塊だった。火の玉だ。本当に燃えているのだ。それが襲い掛かって来る。大きさはサッカーボールくらいだが、威力は計り知れないものだった。何しろ燃えているのだ。
その燃えるサッカーボールが掠った木の葉に火が移り、その場をボォと照らす。

「くっそう」

素早く脚を振るう。濡れた土を少しだけ巻き上げる。クリーンヒット。他の葉に燃え移る前に火を消した。

「最悪だよまったく。――――――――月波さんめ。話が違うよ」

文句を呟くが、すぐに黙る。

すぐそばでガサガサと草の揺れる音がしたからだ。相手が近づいてきたのだ。

先程の燃える球もこの相手が撃って来たのだ。なので警戒しなければならない。横に跳んだついでに太い木の裏に跳び込んで隠れた。少し顔を出して探ると、相手の姿が見えた。灰色のローブを被った長身の男だった。

そう。この男は魔法使いなのだ。

現実世界を生きる僕にとって、魔法という非現実的な存在は、まったくもっての幻想でしかない。

語れば馬鹿にされ、信じられない顔をされる。

そんなものだと割り切っていた。

だが今僕の目の前にある現実では、まるで金銭の交換のように魔法が使用され、応酬のように飛び交っている。いきなりそんな場所にポイと放りだされたのだ。

最初は混乱した。違う。今もだった。なぜこんな場所に放りだされなくてはならないのだろうかと。そして隣に立つ少女は言った。

「生き残りたければ、戦いなさい」

少女は小柄で、華奢で、綺麗だった。見知った少女だった。同じ高校、同じクラスの月波綾乃。あまりクラスの同級生と交流をしたがらない不思議な少女だったが、不思議と孤立はしなかった。
黒い髪はセミロングに。緑色のカチューシャをして、前髪を固定している。前髪は左側だけ長めに固定していて、目を薄く隠していた。
勿論自分とも交流はない。話した事無い。なのになぜかその少女、綾乃にこの世界に連れて来られ「戦いなさい」と命令された。
唖然として綾乃を見ていると、綾乃は上着のポケットから何かを取り出した。一つは腕輪。その他は五枚のカードだった。腕輪は西洋の装飾を思わせる文様が刻まれていた。銀色の腕輪を迷いなく左手に填めると、綾乃を五枚のカードを一枚ずつ手に取り、これも迷いなく一枚ずつ引き裂いた。
驚いてその光景を見詰めていると、作業が終わってやっと思い出したかのように目の前で唖然とする少年を、まるで汚いものを見つけたかのような表情で見つめ、別のポケットから同じ腕輪を取り出して投げて寄越した。

「それを填めなさい。……あとこれ。今見た通り、一枚を縦と横に一回ずつ破いて、四枚を重ねて腕輪の穴に翳して。それが貴方の武器になるから」
「は？　武器ってなんのことなの」
「一々説明しないと解らないの？　面倒くさい。なんで小泉は今日に限って休みなのかしら。不愉快極まりないわね。――――――あ、カードね。……ああ、貴方に最悪な通告があるわ。持ち合わせのカードがこれしかないの。でも初めから魔法は辛いでしょうね」
「魔法だって？」
再び唖然としている自分に、綾乃は一枚のカードを投げようと手を上げ――――――しかし渡せないと判断したのか、歩いて頭上

からカードを落とした。
座っているので、綾乃の顔が頭上にある。膝に落ちたカードを拾い上げた。それはまるでカードゲームにあるような絵の、カードだった。文字を読み取る。

「アーツ？」
「そう。私達は普段使わないから、残っちゃうのよね。接近戦だなんて、そんなことしないもの。私達魔法使いにはね」
「魔法使い？」
「シルバーブリッツ。私達の総称よ。魔法使いは古いから私達はそう呼んでる。で、そのアーツも魔法だけど接近戦用の魔法よ。使ってみれば解るから。――――――とりあえず一時間生き残って。そうすれば私がどうにかするから」
「え、ちょ……」

慌てて引きとめようと手を伸ばした時。その表情が激しく豹変した。
そして一言、こう言ったのだ。

「生き残りたければ戦いなさいって言ってんのよ。このクズ」

そう言い残すと、綾乃はその場を去ってしまった。最後まで不思議な少女だった。いや、不思議というよりも暴言を吐いた方が気になるが。

そして事は起こる。
唖然としてから二分が経過した頃だろう。まだアーツと呼ばれたカードを見つめていると、一人の人間の気配がした。これは殺気だと解った。強い殺気だったので、誰でも解る。

「あの人に事情を話せば、解ってもらえるかな……？」

殺気立っている人間にどこまで話が通じるかと思った。多分無理だろうな。と思う。あれだけ殺気をむき出しにしている人はまともに話をする感情を忘れている可能性が高い。

「あのー……僕の話を聞いてもらえますか？」

「フー、フー！」

「日本語、通じますか？」

「フー、ゴー」

「駄目だこりゃ――――――――は？」

声を上げた。当然だった。殺気立っている相手の左手が光ったと思ったら、次の瞬間に背後で爆発が起きたのだ。

訳が解らなかった。それだけの動作で、これだけの爆発がおこるのだろうか。

もしかしらドッキリで、これも仕組まれた爆薬の爆発にるもので、相手の腕が服のどこかに取り付けてあったライトを光らせただけなのではないか。

さらに混乱する頭をかかえる。ドッキリにしてはまだ背後で燃え盛る炎は消えない。『ドッキリだよ～ん』と誰かがプラカードを持って来てネタばらしをしないのか。

もしかしたら、これがさっき彼女が言っていた魔法なのか。

だとしたら自分の身が危ない。戦えと命じたのだ。つまり戦場に放り込まれたのだ。理由もなく。

こうして僕、新城聖の戦いが幕を開けたのだ。

大体の仕組みは理解した。
あれから必死の回避と逃避で灰色ローブの男性から距離を開き、観察と綾乃が残した言葉をワードに整理を進める。

「これが――――――こうなって」

綾乃に渡された腕輪を左腕に填める。意外としっかりとフィットした。次にカードを破く。まずは横に一回破き、重ねて縦に破く。

「うわっ」

背後で激しい振動を感じる。頬に熱を感じた。灰色ローブが迫っている。
その場でローリングをして少し距離を取り、身を低くして滑るように動く。時間帯は夜に近い。闇が訪れようとしていた。
音をなるべく消して次の木の陰に隠れる。
腕輪を見た。穴が五つある。その右に破いたカードを添えた。
不思議な感触だった。今まで紙だった物体が硬く膨らむ。一センチほどの珠になる。灰色だった。その灰色の珠がしっかりと穴に填った。

「これが、アーツ……？」

だがそれだけだ。何も起こらない。灰色ローブの男がどうやって

炎の球を撃ちだしてくる仕組みも解らないまま、必死に攻撃を避け続けるのだ。

そして今にあたる。逃げ続けてすでに三十分以上は経っているだろう。それでも攻撃を避け続けた。

辺りはもう暗い。日が殆ど落ちて森林に闇が訪れる。そんな闇の中で闇雲に転げ回った。唯一の光源はまだ沈んでいない夕陽と相手の炎攻撃によるものだけだった。

そろそろ体力的にも限界が近い。それでも灰色ローブの男は攻撃を緩めることはなく、音のした方へ炎を放って来る。回避するのが精一杯だった。だがそろそろ夕日が落ちる。そこで決着をつけたいと思っていた。チャンスは一度。相手がまだ信じられないが魔法の類いを使って攻撃してくるのだ。千載一遇のチャンスだろう。奇跡は自分の手で捻りだすまでだ。

「いい加減にしとけよ。あまり僕を舐めないほうがいい」

聞かれない程度の音量で呟き、背後の木の枝を掴んで地面を蹴った。

SILVER BLITZ

「フー！　ゴー！　どこだ……」

初めて灰色ローブの人語を聞いた。今まで荒い鼻息しか聞こえなかったから、喋れないのだろうと思った。そして驚く事にそれは明

らかに日本語だった。
足元でガサガサと音がする。焼けて焦げた草や木の根を踏み荒らす音だ。あまりの音量の大きさに、この男がとても強い殺気を秘めていることが解る。失敗すれば確実に死ぬだろう。
だがここで死ぬ気は無い。一体どういうことなのか綾乃に問うためだ。そのためにも灰色ローブの男を倒さなければならない。殺すとは言わないが、最低でも腕の骨を折って、その後気絶してもらうしかない。困難だと解っている。だがこれ以外に方法はないのだ。
そして灰色ローブの男の背後で、ガサッと音がした。灰色ローブの男が音源ではない。別の、ターゲットの足音でしかなく――――――

「そこかあっ！！」

灰色ローブの音が持っていたステッキが背後へと向けられ、次の瞬間ステッキの先から炎が出現し、形を成す間もなく射出された。ゴオッと空気を燃やすそれは、灰色ローブの男の背後一面を燃やした。
そして灰色ローブの男が勝利を確信し、唇の端を獰猛に釣り上げた瞬間――――――――

「そこまでにしてもらおうか」

ボキッと折れる音がする。灰色ローブの男の右腕、そしてその先にあるステッキだ。
一瞬のことで何が起きたのか未だに理解できていない灰色ローブの男は、本来ならそこまで曲がらないはずの腕を見て茫然とし、やがて遅れてやってきた激痛に汚く表情を歪めながら膝を突き、肺の中の空気を砲弾のように撃ちだすかのごとく、絶叫を上げた。

「ぎゃあああああああああああ！　お、俺の……俺の、う、腕が！　痛い、痛ぇよおっ」

左腕で右腕を抑え、堪えられなくなった涙腺から涙がダムの決壊のように溢れ出た。

一方奇襲に成功した少年は、男の手からステッキを奪い取り、完全に真っ二つにして遠くへ放り投げた。そして男が無力化したことを確認し、拾い上げた先の尖っている木の枝を拾い上げて突き付ける。

「答えてくれませんか？　何で僕が襲われなくちゃならないんです？」

「あ、あっ、ああっぐ……いでぇ、いでぇよお！」

灰色ローブの男は少年の質問に答えず、只管悲鳴を上げ続けていた。

このままでは埒が明かない。しかし腕を折ってしまったのも事実だ。罪悪感はあったが、殺されそうになったのだ。正当防衛は通じるだろう。

なので、

「答えてください！」

ズンと灰色ローブの男の目の前に、ついさっきその腕を折った右膝を振り降ろした。

奇襲は成功した。一瞬のことだった。

木の上に登り、なるべく気配を消して灰色ローブの男が接近してくるのを待つ。そして通りかかった時に予め拾っておいた小石を男の背後に落とす。すると男は弾かれたように炎を射出するので、その仕組みを理解して木の上から飛び降りた。男の右腕を掴み、一気

に右膝を肘に打ち落とした。関節をきめていたので重力と落下速度と体重を乗せれば腕は簡単に折れる。そして左足を伸ばしてステッキを勢い良く踏み付ける。腕と地面が接触したので、重圧に耐えられなくなったステッキは簡単に折れる。木製だった。

灰色ローブの男は目の前に迫る少年の膝を見て、悲鳴を押し殺した。

「何であなたは僕を殺そうとしたんですか？　答えてもらわないと、次は左です」

木の枝で灰色ローブの男の左腕を叩く。大抵はそれだけで怯える。その後は残った左腕を折られたくないがために従順に質問に応える。そう思っていた。

だが間違っていた。この少年は選択は間違っていたのだ。

「お前が俺の腕を折ったのか？」

突然、灰色ローブの男の口調が静かになった。痛みなど忘れているかのような無表情。まるで波一つない海のような、闇で支配された海の底のような。

「俺の腕を折りやがったのか……」

最後だけ絞るかのような小さな声になった。そこでやっと少年は間違いに気付いた。

「やっぱお前、殺すわ」

腕を折っただけでは、この魔法使いは止められないということだ。今まで右腕を押さえていた左手が、左腕を叩いていた木の枝に触

れる。
そして木の枝は一瞬で炎上したのだ。
「何っ！？」
炎を出現させていたのはあのステッキではなかったのだ。見れば男の左腕にも少年と同じ腕輪が填められており、五つの穴の中心の、赤い珠が光っていた。
魔法を出現させる源は、この左腕に填められた腕輪だったのだ。
いきなり燃えた木の枝を手放し、急いでステップを踏んで後退する。
「もう逃がさねぇよ」
灰色ローブの男は左腕を上げ、左手でバンと地面を叩く。すると左手から炎が出現し、枯れ葉や炭となった木の根を伝って炎が走り、少年を追いかけた。
まさかこういう方法で追跡を行うとは思っていなかったので、ステップを大幅にして倍の速度で退避する。それでも間に合わない。確か少年の背後には太い樹があったはずだ。ステップを中断して振り向かずに走る。ギリギリで炎の手から逃れ、樹の裏に跳び込むことに成功した。
だが安堵するのはまだ早かった。その太い樹も数秒で火が回り、崩れてしまったのだ。なんという火力だと恐れ驚愕したものの、逃げる脚は止めない。さらに走る速度を上げたのだが、地面から噴き上がる炎はまだ追いかけてくる。このままではやがて捕まり、今まで踊るように回避し続けて盾にした木のように、炭になってしまうだろう。
「くっそう！」

毒づいて後を振り返る。灰色ローブの男が追ってきた。このままでは追いつかれる。
そして炭になって死ぬのだ。短い人生だったかな。と人生が走馬灯のように脳裏に浮かび上がる。流れる映像に気を取られ手続けていたので、足元で大きく盛り上がったような太い木の根に気付かず、思い切り蹴飛ばして大きく蹴躓いてしまう。

「うぐ……痛ぇ」

いきなりのことだったので情報整理がうまくいかない。湿った土に思い切りヘッドスライディングしてしまったので、顔面は薄汚れていた。口腔にも土の生臭く苦い味が広がっていた。顎と頬がひりひりと痛む。どうやら今ので擦り剥いてしまったようだ。
早く逃げないと。やっと終えた情報整理の後にそれを思い出して、後ろを振り向く。
全身に鳥肌が立った。

「やっと捕まえたぜぇ」

まるで危険な薬物をきめたかのような危ない表情。口元は涎で汚れ、双の瞳が血走っている。
そして灰色ローブは男の左腕にまで広がった炎で焼けて剥がれるように落ちる。それでも構わず男は、目の前にいる獲物を見下ろした。

これは死ぬな。それが素直な感想。間違ってはいないだろう。まさか魔法使いを相手にするとは思っていなかった。でもこの生涯で一度ならず何度でも魔法を見れたのだ。貴重な体験をしたかな。と思いつつ、目を瞑る。体と心はすでに諦めていたようで、もう力が入

らない。魔法使い相手によくやった方だと思う。何しろ右腕を圧し折ってやったのだ。一矢報いてやったのだから誇らしいと思う。入った部活の部長がこれを見たらどう思うだろう。絶対に褒めてくれるだろう。

ただ一つ気がかりなのは、この戦い。その元凶である月波綾乃。

「戦いなさい」と言われた理由。

でももうその理由も聞けないだろう。死ぬのだから。

何もかも諦めた緋之聖は、やがて来るだろう炎に身を委ねるために静かに意識を手放した。

SILVER　BLITZ

それからのことはあまり覚えていない。あれからあの戦いはどうなったのか。なぜ自分はどういう経緯で自分の高校の保健室のベッドに寝かされているのか。

そして何より、なぜ今生きているのか。

それが一番気がかりなことだ。あの状況からどうやって生き延びたのか。助けが来た記憶はない。だが相手を倒した記憶も無ければ、あの後戦った記憶も無かった。

ベッドから身を起こして体を見る。驚くことに傷が無かった。数か所の火傷も、顎と頬の擦り傷も。

もしかしてあの戦いは夢だったのか。実は聖は授業中に貧血か何

かで倒れ、無意識の中保健室のベッドに運ばれてあんな夢を見ていたのだ。炎の熱の原因は、この肉を焼けるくらい熱くなった気温の時期。七月真っ盛りだったからに違いない。

ああ夢だったんだ。と安心を覚えてベッドに再び横になる。そして体を解す為に両腕で足をマッサージしようと、征服のズボンの腿に触れた時。聖を唖然とさせるような事実を体感させる物体を目にした。ズボンの左ポケットに、何か硬質な物が入っていた。大きさは手首の大きさと同じくらいの丸い物。触り覚えがあった。恐る恐る取り出すと、絶望を覚えた。

あの戦いで綾乃から託された腕輪だった。「戦いなさい」と言う声が耳に蘇る。

だが聖の絶望はこれで終わらない。保健室の扉が開き、何も言わないまま保健室に侵入した者がいた。何も反応がないところから保健室の先生はいないらしい。侵入者は保健室の先生ではないと解った。何というか、この侵入者は苛立っている。面倒くさそうと言うか、時折ため息が聞こえた。そして侵入者は保健室の先生が不在なことを好都合に思ったのか、侵入者はずかずかと歩いて聖のベッドの前で立ち止まり、何の迷いもなくカーテンを一気に引いた。そして言う。

「なんだ。起きてるじゃない」

女子生徒の声。侵入者は女子だった。見覚えがる顔。冷たく突き放すかのような口調。

「何よその顔。蹴り殺したくなるほど不快な表情ね」

一体自分は何をしたのだろう。この少女をここまで怒らせて暴言を吐かせるようなことをしたのだろうか。それに関しての記憶は一

切なかったものの、それ以外の記憶は朧げに覚えていた。
あの暗闇に聖を放りだし、「クズ」と罵倒した事。「戦いなさい」と言って戦場に丸腰で立ち向かわせたこと。思いだしてきた。

「まぁ命があっただけよくやったとだけ言っておくわ……けど、それだけよ。どうせ弱腰で鼻水垂らしながらピィピィ泣きじゃくって逃げ回ったんでしょ。情けないったらありゃしないわね。無様ね」

酷い言われようだった。そこまで酷くは無かったとは思うが、逃げ回ったことは本当だ。
と、あの暗闇の戦場のことを質問しようと口を開いた時。

「あんたが無事だったってことは見届けたわ。もう日が暮れるから帰るのね。――――――――ったく、なんで私がこんな面倒なことをしなくちゃならないの。こんなクズは二度と見たくなかったのに」

後半は酷い事をブツブツと呟きながら、綾乃は保健室を出てしまった。質問をする時間もなく、聖はポツンと保健室に残される羽目になる。
沈黙が冷えた空気とマッチして聖の肌に触れる。今まで聖を追い詰めた暗闇ほどではないが、この沈黙というのが聖は嫌いだった。静寂は嫌いではない。どこかピリピリとした雰囲気を纏う沈黙が気に入らないのだ。

「僕が何したって言うんだよ……」

どうも理解はできないが、とりあえずこの場は帰る事にした。これ以上この場に留まっても利点はない。
ベッドから降りて足を捻る。筋肉が張る感覚と、硬い床のひんやりとした感触が伝わる。上履きを履いて起き上がる。腰、肩、首、

腕と順番に動かして痛みがないか確かめる。
すると聖は今まで何も無かった場所に、何かあることに気が付いた。

「何だこれ」

保健室に一枚しかない大鏡の前に立って、それを確かめる。頬にあったそれは、小さな絆創膏だった。
それも猫の顔がプリントされた絆創膏だった。

「まさか、ね……」

まさか綾乃がこんな可愛い物を持っていて、善意で張ってくれたなど思い付かなかった。だがそれ以外誰も思い付かず、結局疑問に思ったまま保健室を出た。

月が似合う少女　？（後書き）

ツンツンツンが続く態度は決してツンデレではない。デレがないのだ。当たり前だろう。ましてや好意が無ければ尚更だ。「ゲスゲスゲスゲス」耳に残る蔑みの言葉。貶す言葉で聖を落ち込ませる。そんな中、聖にも二人の友人ができる。こうして平和な生活を取り戻そうと思った次の瞬間には、あの少女が隣にいたのだ。聖は酷く悶絶した。

月が似合う少女　？（前書き）

異性、特に美少女からされる舌打ちはどれだけ心を痛めるのだろう。別に好意があるわけじゃない。けれども辛い事は辛いのだ。そこにもう一本線を引ければ幸になるのだが、その日はまだ遠い。

月が似合う少女　？

聖は朝が好きだった。小鳥が囀り、暖かい木漏れ日がカーテンの隙間から頬に当たる。例え曇りの日でも雨の日でも、香ばしく焼いたパンを食べれば一日を頑張ろうと思える。活力が出る。

それが何より気持ちが良かった。

その日は晴れだった。雲一つない朝。季節は春。カレンダーは変えたばかりのものだ。つまり四月。星院高校に入学してから二週間が経過した。

クラスにもそこそこ馴染み、友達を作る。そして部活に入る。星院高校にはいくつも部活があったのだが、そこの中の奇妙な名前が目立つ部活に入部をした。その名も無敵武道部。名だけでネタだと解る故、皆はからかいの種にして入部をしなかった。実質部員は数人しかいなかった。聖は気になったので見に行ったのだ。男子が五人。女子が三人。合計八人の二、三年生が狭い部室で武道を嗜んでいた。

聖は心躍った。純粋に心が躍動した。これだ。と直感的に思った。

無敵武道部は自由格闘を主に体を鍛えようと言う部活だった。そこにはルールなんていう無粋なものはない。つまり空手対テコンドーで組手を行っているようなものだ。それぞれルールや禁じ手もあるだろう。それの一切を排除した格闘技。それが無敵武道部。

しかしそこにも禁じ手はあった。急所への攻撃。殺意を込めた攻撃。これらを破る事は許さない。と、毎回部活を行う際に叫ぶ。言葉にして出すことによって、体に覚えさせているのだ。一種の暗示と言っても過言ではないだろう。だがそれは良い事だと思う。殺す事を目的として設立した部活動ではないのだ。

聖はその日に入部希望を出し、無敵武道部の一員となったのだ。

純粋な学生生活を望んで、健全に体を動かそうと決めた。毎朝六時半に家を出る。朝練に出る為だ。無敵武道部は朝練も欠かさない。その日に入部した聖を無敵武道部は大歓迎し、聖の希望で容赦はしないと決めた。元々聖は体を鍛えていたし、体力もそこそこ自信がある。しかし着痩せするタイプのようで上着を着ていては筋肉が目立たないのだ。顔も女顔とからかわれたりもした。少し苦労はしたが、舐められないように鍛えてからかう同級生達を片っ端からのした結果、からかわれない体質になった。体質というのは変かもしれないが、本当のことなのだ。あれから聖をからかう輩はいなくなり、逆に友人が増えた。

それから聖は地道に筋トレをして筋力を増加させ、この女顔と低い身長からおさらばしたいと考えていたのだが――――――これだ。筋肉は着痩せするせいで目立たず、女顔は治らず、身長も高校一年生で１６５センチで止まってしまった。まだまだ伸びると信じたいところだ。

「いってきます」

リビングに飾っていた数枚の写真立てに笑顔で挨拶する。そこには大人の写真があった。

それが聖の両親、そして三ヶ月前まで面倒を見てくれていた祖母の遺影だった。すでに聖の保護者は他界していた。両親は聖が小学

三年生に事故で亡くなり、祖母は寿命で亡くなった。
聖はその家に一人となってしまった。学校は奨学金でなんとかしているし、生活費は祖母の遺産と両親な何やら世界で大切な研究をしていたと言って、莫大な金を残してくれている。相続権が聖しかいないため、聖が生活費として使っているのだ。因みに聖の祖父は聖の生誕前に他界している。
不幸の連続で精神が参ってしまうと思ったが、祖母の教えが良かったために何とか立ち直った。何より祖母の死に目に立ちあい、『聖と生活できて、幸せだった』とこれ以上とないような至福そうな顔で息を引き取った。親の死に目には立ちあえなかったし、遺体そのものがなかったため虚しかったのだが、祖母の死に目に立ちあえて良かったと思う。祖母の表情に救われた気がする。「これから私がいなくても立派な大人になってね」と将来的な心配で最後の言葉を聞くのもいいだろう。了解して安心して旅立たせてやれるが、プレッシャーがかかる。そんな余計な言葉はいらず、「幸せだったよ」と一言言ってもらえれば、自分は今まで大切な人に幸福を与えていたと思える。後悔が無く、プレッシャーもなにもない。
聖は一人でも逞しく生きて行こうと決心を決めたのだ。
そして今日も元気に朝練に向かうため、通学路を全速力で走った。

SILVER BLITZ

それなのに、これだ。
まさかの非現実的世界に飛ばされるというアクシデントに巻き込

まれた。
　その元凶は同級生で同じクラスの女子、月波綾乃によるものだった。突如話しかけられたと思ったら、廊下から闇の森林にいた。綾乃はぶつくさと文句を次々と呟きながら、聖に腕輪とカードをよこした。そして罵倒した。「クズ」と呼ばれた。
　無敵武道部の朝練が終わり、ＨＲに出る為に教室に向かう。汗は一通り拭いたし、女性用だがパウダーシートで匂いを根こそぎ奪って上書きする。香水の類いには興味がなかったため、香水を付ける気にはならない。クラスの男子の一人が女子にもてようと無理にパンツを魅せる腰パン。いくつもの香水を重ねて着用し、逆に途轍もない匂いをさせていることに気付かない愚か者にはなりたくなかった。
　ドアを開ける。そして僅かに表情を顰める。視線の先には全ての元凶である月波綾乃がいて、沢山の女子とわずかな男子に囲まれていた。

「ねぇねぇ月波さん。次はここも教えて？」
「あ、そこは私も聞きたかったの」
「そうだよな。文章が回りくどいんだよ。面倒くさいよな」

　綾乃は見ての通り、クラスの人気者だ。というのも、綾乃はこのクラスの中で一番の学力を誇り、試験の結果発表でも常に一位を保持している目立つ女子だった。あの無表情のような態度からは信じられない様な光景だった。
　というのも綾乃が集まる同級生達に勉強を教えているのだ。特に女子に囲まれているのだが、暴言一つ言葉にすることなく説明を続けている。そしてその女子の他にも数人の男子がいたのだが、それも気にした様子はなかった。「クズ」の一言も発することなく、男子からの質問にも答えていた。
　もしかすると昨日のことは夢だったのではなか。と思い始めた聖

は、数秒考えて足を進めた。

「おはよう」

綾乃を中心に十人の同級生に朝の挨拶をする。

クラスに馴染んでいた聖が挨拶をすると、必ず挨拶が返って来る。

それこそ綾乃を囲んでいた十人の同級生は全て笑顔で手を上げて、声に出した。

「あ、おはよー緋之くん」

「おいっす」

「おはよー。今日も朝練？」

「緋之はあんなネタ部活よく続けるなあ」

「おはよ緋之くん」

「チョウリィィィッス！」

若干一名変な挨拶だったが、十人全てが反応した。

そして、

「……おはよう」

不機嫌な綾乃が僅かに眉間に皺を寄せ、睨みながら聖に挨拶を返す。

あれ？　と聖が心の中で首を傾げる。

ん？　お？　え？　と十人の同級生が反応した。

そして、

「――――――チッ」

舌打ちした。聖にも聞こえる程の大音量で。

その瞬間にクラスが凍りつく。ピシッと音を立てるほどの威力。そして恐怖。

緋之よ、一体月波になにをした。とクラスの視線が聖に集中する。まさかのこの一瞬で信頼を崩壊させるところだった。

「ア、アハハ」

その場は笑って逃げるしかなかった。それ以外何もできなかった。すでに綾乃はそっぽを向き、同級生は視線を聖から外さなかった。綾乃から三つ離れた席が聖の席だ。鞄をかけて椅子に深く腰掛けると、ぐでーと力無く机に突っ伏した。いつもなら無い朝練の疲れが、今日に限って出てしまったのか。この場に味方がいないのはやり辛い。どうしたものかと考えていると、

「おいおいどうしたよ。珍しいじゃねぇか、緋之ともあろう奴が、クラスで空気になりかけたからって落ち込むなんてよ」

背後から声がした。遠慮がない言いように、聖はこれを利用しようと考える。実際、有難い救い船だった。この状況を打破するには打って付けの人材がネギを背負ってやってきた。

「いや、あそこまで嫌われてるとは思わなくてさ」

苦笑いを浮かべる。予想もしていなかった事態だったのでそれしかないし、苦笑いは正直な答え方だった。

「何だよお前。何か嫌われる事でもしたのか？」

後ろを振り向く。そこには最近友達になった男子、鳴本隼人が笑って聖の肩に手を置いた。

いつでもポジティブで明るく、爽やかでめげないことが有名なクラスの人気者だ。ただ少し勉学が苦手な事も有名であり、別名『爽やか馬鹿』と呼ばれている。

「嫌われることね。例えば？」

つい先日の信じられない体験を除けば、覚えが無い。そこまで関わったことがないのだ。

聖の質問に対して、隼人はペラペラと例えを上げた。その速度は聖には真似できないものだった。

「そうだな……着替え覗いたり、実はあの無表情しかしない顔が思いっ切り歪んで猫撫でてたり、スタイルいい女子を威嚇してたところ見たり、セクハラしてくる先輩に顔を赤らめてやめてくださいって叫んでるとこ見たり」

「どうやったらそんな妄想出来るんだ。別に知りたくもないし真似したくもないけど」

「おいおい、そこはコツを聞いておくべきところ……だ、ぜ……」

ペラペラと快調に滑る口調が最後で狂った。まず音程が低くなり、速度が落ちる。最後には表情が変化していた。この世で一番恐ろしいものを見た様な顔で、聖の頭上を見いた。

あんぐりと開いた口はパクパクとまるで鯉の食事のように忙しく開閉し、頬が激しく痙攣を繰り返す。

まさか。と思った時にはもう遅い。聖の背筋に冷たい氷のような気配を感じた。

「鳴本。まさか……」

「み、見るな緋之。お前はこれ以上見るな。こ、呪い殺されるぞ」

想像通りの反応。瞬時に理解。
やはり聖の背後にいるのはまるで般若のような表情で二人を見下ろしている綾乃だった。通りでクラスの雰囲気が再び凍りついているわけだ。

「クズと馬鹿が揃うと、やっぱりろくなことにならないのね」

生気を感じさせない冷たい言葉。その手の変態にはたまらないご褒美なのだろうが、二人はその変態ではないので、この場合はご褒美ではなくジェノサイドに近いだろう。
やばい。これはやばい。ネギを背負ってきたはずの鴨が災厄をも持って来た。最悪だ。
このままでは本当に視線だけでデストロイされそうなので言い訳を考えていたのだが一向に見つからない。鳴本が役に立たないのではどうしようもない。
しかし救世主は遅れて到着した。

「ほーい、皆速やかに着席してくれなー」

き、来たあ！　聖は心から感謝した。教室に入って来たのは聖達の担任である大河大胡である。現在二十六歳で二枚目。担当教科は現代文。教え方は綾乃よりも優しく理解しやすい。と、生徒からも大人気な教師なのである。
現に今、

「きゃー大胡くん！」
「こっち向いて大胡くん」
「おはよー大胡くん」
「イケメーン」

と、女子達に大人気なのである。上記した通り大胡教師は二枚目だ。性格も優しい。教師という立場であるから収入もある。そして独身彼女の有無は不明ときた。このクラスの女子の九割以上が大胡教師にメロメロなのである。これだけの条件を満たす男性は中々いない。

こんな男性が担任では受け持っている男子が大胡教師に嫉妬の嵐――――――かと思いきやそうではない。

大胡教師は男子にも人気があるのだ。というのも憧れの兄貴として慕われている。体育もたまに受け持っていて、サッカーなども自身がチームに入って教えている。昼休みの時間なら体育館に遅れて入り、バスケットボールに加わっている。さらにユニークは発言と頼り甲斐がある行動と人望を持つ。たまに男子のどうしようもない卑猥な会話に加わったり、恋愛の悩みなどを聞いていたりする。頼れる兄貴なのだ。

そんな大胡教師が担任になってくれて聖も嬉しく思う。

大胡教師は聖にとってたった一人しかいない従兄であり、あの無敵武道部の顧問なのだ。

SILVER　BLITZ

「聖ぃ。ちょっといいか？」

HRが終わり、一限目が始まろう準備が始まった時だった。背後

からだい大胡教師に呼ばれて振り返る。そこには大量の女子を従えて――――――本人は本当は付き纏ってほしくはないのだが――――――大胡教師が聖を見下ろしていた。

「なんですか大兄ぃ――――――――大胡先生」

一応高校では教師と生徒の立場を弁えようと大胡教師から言われていたのだが、どうしてもこの呼び方が抜けない。言いかえて聞き返した。

しかし大胡教師もそこまで気にしていないのか、咎めはしなかった。その代わりに一枚の紙を渡された。

「出してないの、お前だけだぞ。とっとと書いて俺にくれよ。ちょっと上から急かされてるんだよな」

見るとすぐに解った。委員会の所属希望書だ。これに書いて希望した委員会に所属するのかを決める。

確か三日前に配られたのを思い出す。確かに出していなかった。これは参ったな。と思い、自分はどの委員会に入りたかったのかを思い出しながら記入欄を見る。

するとある疑問を覚えた。

「大胡先生。なんで記入欄がすでに埋まっているんですか？」

なぜか聖が希望する委員会を記入するはずの記入欄が、すでに一つの委員会が描かれていたのだ。

「ああ、言い忘れてたけど……もうそれしか入れるところ無いから。ほら、さっさと名前書いてくれって。何、ちょっとした親切さ。気にするなって」

あ、あれ？　とそれだけでは説明が不十分だぞ。と名前を書いている内に言おうとしたのだが、大胡教師が名前を書いた所属希望書を持って行ってしまったために、何も言えなかった。
急いで追いかけようとしたのだが、大胡教師を取り巻く女子共に妨害されて届かない。結局聖の声は届くことなく、大胡教師は教室を出て行ってしまった。
唖然とする聖。そしてどこに所属するのかを思い出し――――――

「よ、緋之。一年間よろしくな」

再び登場した爽やか馬鹿――――――隼人がバシッと聖の背中を叩いた。

「へ？　どういうことだ」

隼人の言葉の意味が解らず、振り返る。

「俺達図書委員だろ。大河先生がそう言ってた」

つまり隼人も図書委員会に入っているのだ。
同じ委員会にここまで仲が良くなった友人がいるのは嬉しい。大胡教師の計らいなのだろうか。と感謝はしている。だがどこか嫌な予感がした。
聖は世の中を少しだけ知っている。こういう良い事があれば、逆に悪い事が必ず降りかかって来るのだ。それは理のようなもので摂理にも言いかえられる。良い事だけが続くわけはないのだ。

「でも今回は特別でさ」
「え？」

ゾクリ。来たかな。と嫌な悪寒を微かに感じた。

「隣の二組の図書委員が一人。俺達一組が三人。合計一年生は四人で図書委員会の委員になることになっちまってよ。まあ特殊みたいな感じだ。俺はそこまで特殊なんざ思ってもなかったけどよ。……まさかあいつがその三人目になるとはな」

ゾゾゾ。虫が背中に這い上がって来たような嫌な感じ。
これは、もしや。と心が警鐘を鳴らしている。
もしそうだとしたら、実にやめてほしいと思う。今から大胡教師を殴りに行ってもいい。

「で、その最後の一人って……まさか？」
「あ、ああ……そのまさかだ」

隼人が視線を百八十度回転させる。聖もその視線を追った。

「あそこの席の――――――――月波だ」

来たあああああああああああああああああ！！
悪い予感がハイ的中。これが世の中の理。良い事ばかりは決して続かない。解ってはいたがここまで絶望を与えるとは思ってもなかった。衝撃が大きすぎて、まるで零距離でホルンの低音を最大音量で吹かれたような痛みが脳の奥をがんがんと叩いていた。

「なぁ鳴本」
「うぃ？」
「今から大兄ぃを今から殴りに行こうと、思うんだ」

死んだ魚の様な眼をした聖がポツリと呟いた。サァと隼人の顔から血の気が引いた。

「ちょ、待て。待てって。情報はそれだけじゃないんだよ。隣の二組の図書委員なんだがな、それがまた可愛い女子なんだって。なによりスタイルが良くって優しそうでさ」

「へぇ。でも僕には関係ないや」

「だ、だから頼むからそんな顔しないでくれよお」

少しだけダークになってしまった聖に、どう反応していいのか解らなくて困ってしまう隼人の悶絶。

これを密かに横目で見ていた綾乃は、今度は誰にも聞こえない程度に舌打ちをした。

SILVER　BLITZ

最悪な気分になってしまった。

解ってはいたがここまで辛くなるとは思ってもいなかった。昨日の件が一番大きい。というよりも命を失うような体験をしてから次の日に平気な顔で登校するほうが精神がおかしいのかもしれない。

はやくも放課後になってしまった。勿論授業なんて少しも耳に入らない。集中力など元からない。

そして気付いた事がある。昨日綾乃から預かった腕輪が変化していた。ズボンのポケットに入れていたので、まるで野球で使うボー

ルを入れているように膨らんでいたのだが、朝のＨＲを終えると変化を終えていた。赤いリストバンドになっていた。しかしカードは無かった。あのアーツというカードだ。

まぁ聖にとってはどうでもよかったことなのだ。なぜならこれからもっと乗り気ではないことをするからだ。大胡教師に委員会の所属希望書を渡したその日が最初の集まる日だというのだ。なので校舎には放課後だというのにも帰宅をせずに委員会へ向かう生徒で溢れ返っていた。

そんな中聖は空いている道を選ぼうと思い、一度外に出た。というのも校舎の外にも通路があり、上履きでそこを踏めば咎められないのだ。流石にグラウンドにまで入ると怒られるが、通路はコンクリートなのであまり汚れない。たまに土が落ちているが避ければ済む話だ。

空いている道は図書委員が活動する図書室とは逆方向の道で、それ以外の委員会に向かう道ではないので人通りはない。そこをゆっくりと進む。なるべく遅れたい。綾乃を見たくない。その一心で。

すると一人だけ生徒を見つけた。皆が慌しく委員会に向かう中、その生徒――――――女子だった。ベンチに座って本を読んでいる。少し近づいて襟を遠くから覗くと一年生のバッジをつけていた。同級生だと解る。

その女子は大人しそうな顔つきで本を読んでいた。時折吹く風が彼女の長くウェーブのかかった髪を揺らし、聖に甘い香りを届けた。なんという綾乃とは真逆の好印象的な少女なのだろう。やっとまともな女子を見れた気がする。と聖は小さな幸せを味わっていると、その視線に気付いたのか少女が顔を上げた。

「あ、あれ……済みません。今何時か解りますか？」

彼女は気付いていない。その腕にしている小さな腕時計があることと、背後に大きな時計があることを。あえて突っ込まないのは聖

の優しさと、この出会いに感謝しているからだ。口調も優しく、声が透き通っている。
聖はブレザーの胸ポケットから携帯電話を取り出すと、現時刻を教えた。
「今は五時だね。もう委員会の集まりは始まっているけど」
「え？　あ、そうだったんですか？」
彼女は慌しく立ち上がり、本を閉じた。布のカバーがしてあったので、それだけ本を大事にしているのだろう。聖に会釈をしてその場を移動しようと一歩を踏み――――――――――――立ち止まった。そして振り向く。
「あ、あの。度々済みません。――――――――――――図書室は、どこにあるかご存知ないですか？」
最後の方は小さな声だったので聞こえ辛かったが何とか聞きとれた。
そしてもう一つ解った事がある。本が好きでこの時間に慌てて図書室に向かおうとしている。そしてその場所が解らない一年生。
「もしかして、図書委員になった人？　つまり二組の人だ」
「あ、はい。そうです。けれどなんでそれをご存知なんですか？」
「僕も図書委員にさせられたんだ。ちなみに一年の一組。君の隣のクラス」
「そうなんですか」
やはり同年代の異性と話すと新鮮な気分になれる。それが清楚な女の子であれば尚更の事だ。もし相手があの罵倒しかしない綾乃であれば、こんな気分にはなれやしないだろう。

「じゃ、途中まで一緒に行こうか」
「はい。お願いしますね」
「敬語はよしてよ。同級生なんだから。――――――――僕は緋之聖。君は？」
「はい、あ、うん。私は都竹ちさ。ここで本を読むのは初めてだから、迷っちゃって。緋之くんが来てくれて助かったな。本当に有難う」

そう。これが普通の高校生活。
出会いがあり、健全な生活をし、青春を謳歌する。思春期を迎えたのに内面でイジイジするのは嫌だったから、こういう可愛い女の子と知り合いになれるのは素直に喜べた。

なのに。

なんでこう言う時に無粋な異物が現れるのだろう。

「クズ」

呼ばれた。名前ではない。あの災厄の元凶にとっては固定した名なのだろうが。
こんな名で聖を呼ぶのは一人しかいない。そう、あの少女。

「……月波さん」

月波綾乃が、行く先に立っていた。仁王立ちだった。なぜあの華奢で小さな体であれだけの覇気を纏えるのかは不明だったが、とにかく物凄い剣幕で聖の前に立っていた。

「本当にクズね。どこまで私の手を煩わせるの？　まさか図書室の場所を忘れたとか言わないでしょうね。もしそうだとしたらどうしようもないクズね。蹴り殺すわよ？」

相変わらずの言い様だった。言われ放題だった。

と、そこでなんとちさが聖と綾乃の間に入った。

「あ、あの――――――一年生バッジをつけてるってことは私と同じ一年生なんですよね。月波さんでいいですよね。あの、緋之くんは迷っている私を助けようとしてくれて遅れたんだと思います。なので悪いのは私なんです。ごめんなさい」

静かに頭を下げるちさに逆に驚いたのか、綾乃は少し黙り、そっぽを向いた。

「ふ、ふん。そんなの聞いてないのよ。……まぁいいけど。私が気に入らないのはこのクズのせいで私がこのクズを呼びに行かないとならなくなったってことだけよ。あんたなんて知った事じゃないわ」

「……ごめんなさい」

強気を纏っていた綾乃の表情がゆっくりと崩れる。

どうやらちさは綾乃にとって苦手なタイプのようだ。

「そんなに軽々しく謝らないで。それに同級生なんでしょ。敬語を使わないでよ」

なんと罵倒がなくなった。提案に近い命令が出たのだ。これは意外だった。

聖がほうほうと頷いていると、居心地が悪く思ったのか綾乃はそ

の場で踵を返した。

「行くわよ。とっとと行かないと委員長に何を言われるか解ったもんじゃないわ」

「そうだったな。行こうか」

「うん。行こう」

綾乃を先頭に歩き出す。向かうは図書委員会が行われている図書室だ。

だがこの集まりが何を示しているものなのか。

聖はまだ知る由も無かった。

月が似合う少女　？（後書き）

最高の出会いには感謝したい。爽やか馬鹿と、清楚で大人しい少女。仲良くなってよかったと思える。けれどもあの少女はこう言った。「クズと馬鹿」だった。また変なレッテルを張られた。

図書委員会が始まる。数人の先輩と委員会としてこなす行事。主な仕事を聞かされる。しかしそれは表の仕事だった。

裏の仕事はその後で説明される。少年は激しく驚き、再び絶望した。平和が音を立てて瓦解した。

月が似合う少女　？（前書き）

トラウマに向き合うには、それなりの覚悟が必要だ。なのにこの男達は覚悟すらさせてくれずに、聖をトラウマに向き合わせようとしたのだ。

月が似合う少女　？

言い訳を考えていた。図書委員会に遅れた訳を話さなければ後で煩い。あの綾乃を動かす上級生なのだ。絶対に後が怖い。

前を歩く綾乃の髪を見ていた。黒いセミロングの髪緑色のカチューシャ。そんな髪が似合う少女なのだが、聖は昨日のことを思い出していた。闇が辺りを覆い始め、分厚い雲の切れ間から光る月が顔を覗かせた。その一瞬。

あの月を背景に立つ綾乃を、聖は綺麗だと思ったのだ。

しかし次に会ったら罵倒を繰り返された。あの綺麗な少女にもう一度会いたいと思ったが無理だろう。　なによりあの非現実的な世界に再び戻りたくない。

「着いたわよ。入りなさい」

目の前でした綾乃の声に驚いた。どうやら図書室に到着しらたしい。

まさか眼前にまで迫られているとは思っていなかった。拳一つ分しか入らない距離まで二人は近づいていた。身長も五センチくらいしか差が無いので顔が近い。

驚いて目を剥いていると、

「何その顔。蹴り殺したくなる」

普通の女子なら驚くか羞恥で顔を赤らめて離れるか、少し酷くてビンタを頬に見舞うのだろう。

だが綾乃は違った。顔を赤らめることなく眉間に皺を寄せて噛み

ついて来た。まさかの反撃に聖が黙ってしまう。どうやら考え事をしすぎていたようで、聖の方から距離を詰めていたらしい。なのにこの反応はこちらが傷ついてしまいそうになる。

「ほら。ちさも早く入りなさいって」

「あ。う、うん」

綾乃が開けたドアからちさが図書室に入る。

続いて綾乃が図書室に入る。その時に舞った髪が聖の鼻に触れる。少し甘い香りがした。擦れ違いに綾乃は舌打ちを忘れない。

落ち込んで図書室に入ろうとする聖。が、ドアを閉める時に「あれ？」と思って一瞬行動が止まる。

しかしそれで終わった。それを聞こうとした時、もう一つの大きな疑問を覚えた。図書室にはすでに図書委員会の委員達が集合しており、担当の教師もそこにいた。

「大兄ぃ……？」

数人の先輩の他、机に座っていたのは聖の従兄であり担任である大河大胡だった。

「まぁたお前は。先生って言えって何回言ったよ、俺。――――――まぁいいんだけどな。俺が図書委員会の担当したんだよ。つーか上に志願した」

「な、なんで？」

「お前がいるから」

ビシッと大胡は指を向ける。向かう先は勿論聖。聖は驚いて言葉が出なかった。

数秒の沈黙が図書室に訪れた。これでは駄目かなと判断したのか、

一際体が大きい先輩が柏手を打って皆に指示を出す。

「このままじゃ埒が明かないから……とりあえず皆、この丸テーブルに座ってくれ」

聖達一年生の他に先輩は二人だけしかいなかった。男女一人ずつ。その二人が動いてテーブルに座ったので、四人もそれに従った。

「それじゃ、この図書委員会の仕事を説明するから……」

SILVER BLITZ

仕事は簡単なものだった。それこそ一人一つの仕事を受け持っても十分すぎるほどの楽な仕事だった。

数枚のプリントが回されて聖達一年生の仕事を説明されるが、殆どの大切な仕事は二年生が担当していた。それはありがたいことだった。

二年生は二人いる。まず図書委員会委員長の小泉勝。巨躯な身体とがっちりとした四肢。短めな黒髪と常に微笑を浮かべていた。イメージ的には野球部かなと思って聞いてみた所、野球部のキャッチャーをしているのだという。意外と似合いそうだった。

二人目の先輩は女性で、大人の女性のような、綾乃やちさとは違う綺麗が目立つ。図書委員会副委員長の里宮百合子。光の当て具合によってはこげ茶に見える黒髪を長めに伸ばしている。右目の下に

泣き黒子がある。そして長身である。おそらく聖よりも五センチ高い。つまり百七十を越している。
この六人と大胡教師を合わせた七人で図書委員会をやっていくのだ。そこに三年生の先輩がいないということが疑問だったのだが、大胡教師は「この図書委員会にはそこまで人員はいらない。それに三年生は受験だから」と言っていた。妥当な理由だと思った。

「それじゃ、今の説明でどこか解らない所があったら質問してくれ」
勝が皆を見渡して言う。しかし誰も手を上げない。質問がないのだ。意外と勝の説明は丁寧で解りやすい。委員長には適役だった。

「小泉くん。相変わらず説明うまいわね。その情報整理能力を分けてほしいわ」
「無茶言うなよ百合。これでも一時間で即席にまとめただけなもんだ。大胡先生ならもっとうまくまとめられるだろうに」
「え？　俺？　まぁね」

この三人はいつもこうなのだろう。大胡教師もまるで二人の先輩のように接している。信頼され、信頼している証拠だ。
そんな三人を見ている一年生四人は、その様子をじっと見ているだけだった。それを察したのか大胡教師が勝へ助け舟を出した。

「小泉。仕事の説明は終わったが、お前達の自己紹介はまだなんじゃないか？」
「そうでしたね。それを忘れていた」
やっと本来の仕事を思い出した勝が一年生に向き直る。しかし本来と言うのならば自己紹介は一番最初にやっておくべきだとは思うが。

「俺は二年生の小泉勝。部活は野球部でキャッチャーだ。大胡先生に誘われて去年に図書委員会に入った。そして今年、いつの間にか委員長になっていたのは驚いたが」

勝も大胡教師によって図書委員会に入らされたのだ。そして図書委員長に任命された。これも大胡教師のせい――――――推薦によって。

しかし本人はそこまで嫌そうな顔をしてはいないので、文句の一つも出さなかった。

「次はあたしね。里宮子百合よ。皆は百合先輩って呼んでね。部活には入っていないわ。ここにいるのが楽しくてね。あ、趣味はコミュニケーションよ。特に女の子と、それも美少女で可愛くて小さい娘がいいわね。――――――だから今年は楽しい委員会になりそうね」

ギラリと百合子の双眸が妖しく光る。それにロックオンされているのは綾乃とちさだ。ギクリ、ゾクリと綾乃とちさの背筋に悪寒が走る。

すでに一年生側の紹介は終わっているので、紹介をする必要はない。

そして仕事の説明も終わっているので、今日の委員会はここで終わるのかと思っていた。が、それを見透かしたように大胡教師が言った。

「待て聖。まだ説明は終わっていない」

すでに鞄を手に取ろうとした聖の動きが止まる。原因は二つある。それは勿論大胡教師の制止であるのだが、もう一つの大きな変化に

ようものだった。金縛りに近い。

この図書室の雰囲気が一変した。

何と表せばいいのだろう。今まで白一色で塗り潰された光りの世界にいたのに、一瞬で黒一色で塗り潰された闇の世界に来てしまった。そんな感じ。雰囲気そのものも変化し、息さえ詰まりそうな空気。

ゆっくりと視線を動かしてこの場にいる全員を見る。その空気を作り出した原因が解った。

聖以外の六人が、聖を見ていたのだ。しかしそれだけではこれだけの雰囲気を作り出されない。

だが聖は覚えていた。六人の目を。昨日、闇の森林で聖に襲い掛かって来た灰色ローブの男と近い目だった。普通とは遠くかけ離れている。ただの高校生にこれだけの雰囲気を作り出せるはずはない。

つまりこの六人は普通ではないのだ。

「――――――――っ！」

ガタッと椅子を鳴らして立ち上がる。金縛りは力任せに振りほどいた。

「まさか、昨日と同じ……月波さんも、大兄ぃも僕の命を狙って」

もしあの灰色ローブレベルのいかれた人間に囲まれているならば、脱出は不可能だろう。ならば戦うしかない。どこまでやれるかは解らないが、一人くらいなら倒せると思った。狙うは爽やか馬鹿こと隼人だった。一気に距離を詰めて張り倒す。

「なるほど。さっきのは嘘だったんだんね」

「……何がよクズ」

その場で構え、少しだけ笑みを浮かべる聖に綾乃が答える。

「月波さんさ、さっき図書室に都竹さんを入れる時。ほら、ちさも早く入りなさいよ。って言ってたろ。そこから疑問に思ってたんだけどね。名で都竹さんを呼ぶってことは、それだけ親しいってことだ。今朝、月波さんはクラスの同級生に勉強を教えていたけど、皆を名字で呼んでいた。けれどなんて都竹さんは名で呼ぶのかな。隣のクラスであまりまだ交流がないのにね」

昨日の件がトラウマになりつつある。握って前に突き出す拳が震えている。

何とか息とペースを整えようと深呼吸を繰り返す。まさかこのような展開になるとは思わなかった。いや、本当なら少しだけ予想できたはずだ。この図書委員会の中に月波綾乃がいる限り、聖を危険に脅かそうとする存在を危惧することはできたはずなのだ。

なのに出来なかった。原因は聖の油断にある。まさか友人として近づいてきた隼人が、変な場所で読書をしていると見せかけて待ち伏せていたちさが、そして何より聖の従兄であり信頼をおいている大胡が、殺気を秘めた目で聖を追い詰めようとするなど思っていなかった。

「昨日の――――灰色ローブの男、見た事が無い攻撃術を使って来た。あれが多分魔法なんだろ。月波さんがあの世界に連れて行ってくれた世界。それがこの図書委員会がやっていることなんだろ」

問いかけても誰も答えない。聖はさらに問い詰めた。

「確かに僕は油断していた。まさか大兄ぃが敵だったとは思ってい

なかったし、昨日の件のことについても全員がグルだったなんてね。――――けど、僕を舐めない方がいい。昨日の魔法を使われても、一人くらいは屠れる自信はあるよ。それに……」

聖はポケットの中に入れてあったリストバンドを取り出し、左腕に填めた。再び構える。

「これで多分戦えるんだろう。少しでも魔法が使えるなら、屠れる人数は二人に増える」

部活のトレーニングやスパーリングで培った身体能力をフルに使って戦うつもりだった。

そして今にも跳びかかろうとしたその時。大胡教師が立ちあがった。

「聖。残念だけどその腕輪だけじゃ魔法は使えないよ」

「大兄ぃ、悪いんだけどこの状況でそんなこと言われても信じられない」

真面目な顔の裏には何かある。聖は本能的に悟っていた。それが例え本当であったとしても、魔法が使えなかったとしても戦うしかない。

その時だった。

「あんた、それ本気で言ってるの？」

「ああ。月波さんが都竹さんとグルだってことだろ。今更取り繕っても無駄だからね」

「それじゃない！」

綾乃が聖の前に立つ。聖は臆する事も無く綾乃を睨む。皆が一瞬

動こうとした。このままでは聖が綾乃に襲い掛かり、その細い首を締め上げて骨を折りかねない。
しかし聖は動かなかった。いや、動けなかった。

「それじゃ、ない……」

目の前にいる綾乃は、この数週間で見た凛とした綾乃の顔とは思えない程歪んでいた。この表情は悲しい時、今にも涙がこぼれそうな寂しい時のものだ。
図書室にあったピリピリと張り詰めた雰囲気が一瞬和らぐ。驚くべき物を見てしまった。綾乃の意外な表情に唖然としてしまったのだ。
聖は構える力を一瞬緩めてしまった。それを大胡教師は見逃さなかった。

「取り敢えず、落ち付けよ聖。大丈夫だ。俺達はお前の命を奪おうとなんざ考えてはいないよ？　これはテストだったんだ。お前の度胸を計った。許してくれ」

大胡教師はこれ以上とない優しい声で聖に近づき、聖の両手を己の両手で握った。

「大丈夫。この図書室――――――この高校の中でお前を故意に傷付ける奴なんていないから。いたとしても、俺達が守ってやる」

赤ん坊を安心させるような暖かみがある。実際に聖は今、さっきまで己の中で燃えていた戦意を喪失していた。大胡教師の説得もある。それに加えて今まで聖に向けられていた殺気がなくなっていた。そして最大の影響は綾乃のあの寂しそうな表情である。

「ごめんな緋之。こうするしかお前をメンバーに加える手立てが無かったんだ」

勝が巨体を揺らして聖に歩み寄り、腰を落として聖の頭に手を置いた。ゴツゴツとして硬い手だったが大胡教師とはまた違う頼もしさを感じた。

しかし疑問に思う点がある。

「メン、バー……？」

図書委員としてではないだろう。今の殺気と、昨日の闇の森林と深く関係したものだと予想した。そしてそれは正解だった。勝は一瞬考え、ゆっくりと口にした。

「もう月波に聞いているとは思うが、昨日の戦いにおいてお前を襲ったのは魔術師だ。この現実で魔法は非現実的で信じられてないし、存在自体も証明されてないからな。その点は錬金術や黒魔術、まじないや呪いと同じようなものだな。けど魔法は存在する。昨日、お前は見て来たはずだ。確か炎使いだったっけな」

勝に加えて百合子、ちさ、隼人が歩み寄る。

「俺達も魔法が使える。そしてその魔術師の総称をシルバーブリッツという。――――――シルバーブリッツは高校の図書委員会がそれにあたる。図書委員会の委員の殆どは魔術師と考えて良い。そのシルバーブリッツは高校の放課後、月に何度か戦わなくてはならない。あるものを守るために」

「あるものを、守る？」

「各高校の偏差値だ」

意外な答えが返って来た。聖の予想では生徒の命だとか、教職員の寿命だとかを考えていたのだが、そこまで大きな物ではなかった。予想外の答えで、かえって聖は脱力してしまった。

「確かに私も最初聞かされた時は、こんな感じでスベったわね。なんだそりゃ。ってね。緋之くん、今の君の気持ちは解るわぁ」

百合子は面白そうにケタケタ笑って聖の肩を叩いた。聖にとっては何が面白いのか理解出来かねなかったが、勝の表情によってそれが真剣な答えなのだと解った。

高校の偏差値と言えば聖も何度も意識したことがある。中学生の時に聖に一番適している高校の偏差値を探し、もしくはそれ以上を志して受験に臨むのだ。そして今ここにいる。

聖の場合、自分の学力で入れる高校を探した結果がこれだった。しかし当時の聖の学力では無理と言われていた高校なのだ。それを大胡教師の協力、塾講師の代わりとなって無料で勉強を教えてくれたため、この高校に入れた。

「昨日の戦いも偏差値に関係しているんですか？」

聖は勝に質問する。答えはすぐに返ってきた。勝は首を縦に振り、肯定としたのだ。

「ああ。昨日の戦いは……どこの高校だっけ？」

「北海道の、詳しいことは忘れたけど、北高校だったような気がしたわね」

勝は助けを求めようと隣にいた綾乃に聞く。綾乃は渋々答えていた。

名前を覚えられていない高校は可哀想だったが、今は申し訳ない

が無視した。

「そうだ。何とか北高校だった。そこに昨日は月波とお前が戦ったんだ。――――昨日は助かったな。あちらもまだ委員会が決まっていなかったから、三人しか出せなかったようだな。お陰で勝てたが」

「そうね。とりあえずこのクズを囮にして一人を離れさせて、あとの二人は私が始末したけどね。あちらの二人は三年生だったようだけど、話しにならなかったわ」

「おいおい。囮とは酷ぇ話しじゃねぇかよ月波」

綾乃の容赦ない言いように、流石に聖が可哀想だと思ったのか、隼人が突っ込みを入れた。だが失敗に終わった。

「あんたは黙りなさい馬鹿。二週間で第二にしか上がれない戦力外は邪魔なのよ」

「じ……っ」

綾乃の暴言の矛先は隼人に向かい、隼人はあまりの言いようにキーッと唸りを上げて猿の様に暴れ回ろうとしたが、大胡教師に羽交い締めにされてその場に固定された。

「――――月波。いくらなんでも今のは言い過ぎだ。俺は三カ月でようやく第二だぞ。二週間で第二に上り詰めたのは、確かにまだ戦力とは遠いが、成長が早い。お前ほどではないが、先が楽しみな一年生であることには違いない。だからそう酷く言ってやるな　な？」

「……ふん」

勝は流石委員長であるだけあって、説得力がある。あの綾乃をここまで大人しくさせてしまい、暴言の一つも出させない。

「まぁ囮と言っても、まさかお前があそこまで出来るとは思っていなかったがな」

勝は綾乃の態度に苦笑いを浮かべながら、聖に向き直った。

昨日のことを言っているのだろう。思い出したくはないが、少しだけ思い出して確認した。あの灰色ローブの男の腕を圧し折った後、反撃されて逃げ回った。確かに視力を振り絞って反撃に出たがカウンターを喰らってしまった。聖が魔法を使えないが、それなのに反撃に出たことを言っているのだろうか。

「い、いえ。……僕は逃げ回ることしかできなくて。最後には、だらしなく倒されてしまったし。勝ったって言いましたよね。多分僕の考えではサバイバル戦のようなルールで、僕を倒した男を、あの後月波さんが倒したんでしょう。……僕は結局、何もできませんでしたよ」

だから僕を平和に戻してほしい。そう言おうとした。魔法具をもらっておきながら魔法を使えなかった聖は戦力にならない。なのでここにいても邪魔なだけなのだ。戦力にならないなら、最悪綾乃のやったように囮にするしかない。

僕を巻き込まないでください。考えたことを口にしようとしたその時。

聖が一番驚くことを、勝は不思議そうな表情をして言い放った。

「何を言っているんだ。あの灰色ローブの炎使いの男は、緋之が倒したんだぞ？」

時間が、止まった。

聖の中で思考が強制中断された。全身の力が抜ける感覚。軽く膝

が震えている。頬が痙攣し、やっと動き再開し始めた思考が「嘘だ！」と勝の言ったことを全力で否定した。
まさか、冗談だろ。と不安そうな顔で大胡教師を見た。大胡教師も勝同様、不思議そうな顔で聖を見下ろしていた。隼人、ちさ、百合子も同じ表情だった。唯一違うのは綾乃で、何を今更といった感じで溜息を吐いた。

「嘘、でしょう？」

やっと口から出た言葉。真実を確かめる為のワード。
だが返ってきたのは同じ答え。何度問いただした所で、結果は変わらないだろう。聖を漆黒の疑問の世界へ誘う言葉。

「あの男はお前が倒したんだ。覚えていないのか？」

覚えていない。灰色ローブの男のカウンターで死を覚悟した途端に意識を失ったのだ。

「現場にはあの炎の男が魔術を乱発した痕跡があったわ。炎を使うのだから焼け焦げた跡がほとんど。けれど不可思議な痕跡があった。あの炎の男が炎以外の魔術を使用するなら解るけれど、違うでしょうね。――――――あの森林で焼け焦げた木以外に、強い打撃や衝撃で圧し折れた木の幹が何本もあったのよ」

それ多分あんたでしょ。と綾乃は聖を指さして言った。
正直に答えを申し出るなら「解らない」だ。意識を失ったのだ。意識を失う前の記憶もあるが、探ってもそこまで木を圧し折った記憶はない。枝に登って反撃に出たが、幹を折ってはいない。そこまで力は出せない。闇の森林には太い木々があるが、あれをどうやって生身の人間が圧し折るのだろう。魔法を使わなければ無理だろう。

「いや、違うよ。僕は君からあの腕輪と、……アーツだっけ、あのカードを受け取ったけど、あれを使った覚えなんてないよ」

本気でパニックになりかけた聖を見て、綾乃がその左腕をグッと掴んだ。

「月波さん？」

「証拠があるわ。これを見なさい。」

綾乃は聖の左腕ある腕輪を突きだした。そこには五つの穴がある。これらを指をさし、綾乃は問う。

「あんた、この穴にアーツのカードを入れた？」

「い、入れた。中心の穴」

「そう。じゃ、今手元にそれはある？」

言われた通りにアーツのカードを探すべく、征服のポケットに手を入れた。綾乃は掴んでいた左腕を離してやり、捜索を楽にさせた。三十秒経った頃だろうか。聖は青い顔をして言う。

「……無い」

もしかして高価なものだったのだろうか。だとしたら弁償で償いきれるものなのだろうかと聖の不安が倍増する。

それを綾乃は理解していた。

「安心しなさいクズ。あのカードは腕輪にはめたら、戦いが終わってから自動消滅することになってるの。補充も簡単だから、そんなに不安がることは無いわ」

「そ、そうなのか……」

おいおいそれを早く言ってくれ。と言いたかったが、言うともっと暴言を言われそうなのでやめておいた。

聖を安心させてくれたのだろう。確かに「クズ」とは呼ばれたが、その言葉には追い詰める様な意味は一切含まれていなかった。不安がることはない。綾乃なりに元気づけてくれたのだろう。と思った。本当は綾乃は優しく、いい少女なのではないかと思って、それを口にしようとして――――絶望の谷に突き落とされた。

「ただし自然消滅はカードを一度でも使用したら。の話だけど」

聖の中で綾乃は優しいという意識が瓦解して消え失せた。

まさか安心という油断を覚えさせ、そこから絶望に叩き落とされるとは思ってもいなかった。

そこまでしなくてもいいじゃないか。本当は綾乃はドが付くほどのSなのかもしれない。

「あんたは今、アーツのカードを持っていない。つまり腕輪にはめて魔術を使ったってことが証明されたわ。これが証拠。まぁあの炎の男はあっちのメンバーでも一番弱いようだけど、火力だけは強かったわね。それをアーツで倒すなんて普通馬鹿みたいな話だけど。一応褒めておいてあげるわよ。クズ」

最後の言葉はわずかにデレた。図書室の雰囲気が一瞬「萌え」に昇華したが、聖はそんなことは意識に入っていなかった。

「僕が、あいつを倒したのか？」

「そうよ。最後に骨は拾ってやろうと見に行ったけど、焼け野原で倒れる炎の男と、銃だか剣だか解らないアーツを手にして、あんた

はその場に立ってた。体中に火傷を負ってたけどね。ああ因みに、あの世界で傷を負っても、この世界に戻れば回復するからそこは安心すれば？」

「僕の意識はあったのかい？　けどまだ信じられないよ、あいつを僕が倒したなんて」

「意識はあったんじゃない？　目は開けてたし。けれど何度も呼びかけても反応しなかったわね。まっすぐと月を見てたわ。けど一分もしない内に倒れるし。回収するの大変だったんだからね。感謝しなさい」

綾乃の情報を紡ぎ合わせても記憶は戻らない。実は思い出したくないだけで、自己暗示をかけているだけなのではないのだろうか。と自分を疑い始めた。

「けどたまにいるんだよな。緋之みたいに、窮地に追いつめられると無意識の内に戦う奴ってのがな。一番厄介な奴だ」

勝が唸るように渋る。無意識の内という可能性もあった。思い出したくないという自己暗示と少し似ている。だがそれよりも疑問に思うことがあった。

「厄介……ですか？」

「ああ。無意識ってのは意識をしていないってことだろ。つまり何も思ってないし、何も感じない。それらはとても怖いものさ。何も感じてないから痛みがないんだ。身体的な意味でも、心や意思の意味も。思いがないから何よりも残酷だ。身体の痛みがないから傷の痛みに怯まない。どこを損傷しようとも恐れがないから動きを止めない。意思がないから弱点とか関係ないところまで滅多打ちにしようとする。……つまり、魂の暴走」

聞いていて怖くなってしまった。
つい昨日の自分が無意識の内に戦ったのだ。そして相手を倒してしまった。綾乃がそこまで心配しなくてもいいと言ったのでそこまで酷くないはないのだろうが、それとこれとでは話が違う。
もし昨日、綾乃の言うとおり無意識の内に戦って、相手を殺してしまったら。
聖は殺人者として、その罪を一生背負わなければならないのだ。

「……月波さん。それで、相手はどうなったの？　ちゃんと生きてたのか？」

恐る恐る聞いてみる。意識のあった内は正当防衛として腕を折る程だったのだ。無意識の内に戦っていたら、八割の確率で相手を殺しているだろう。

「生きてたわよ。ちゃんと回収されてたわね」

ふぅ。と溜息を吐いて綾乃は答えた。その顔はどこか不満そうだったが、聖にとっては心底嬉しいことだった。

「でもこれで我が校の偏差値が僅かに上がった。まだ公に発表はされてないけど、勝ちは勝ちだ。けどこの調子で勝ち続けるという保証はないし、こんな奇跡と偶然はもう二度と訪れないだろうな。次からは小泉と里宮が出せるし。鳴本はせめて次くらいには第三の手前くらいになっとこうな。都竹はそのままの調子でいい。月波はもうちょっと手加減を覚えろ。このままじゃ見方まで巻き込みかねないからな」

大胡教師の指示が発せられる。一人一人を丁寧に指示する姿は司令官のようだった。

大胡教師の指示にはほとんどが返事を返して、あるいは出された課題をこなそうと思っていたのだが、綾乃だけは相変わらずフンと鼻を鳴らしてそっぽを向いていた。
そして最後に聖を見た。

「聖はこれから俺と個人レッスンな。色々とありすぎて混乱してるんだろ。夕飯でも食べながら教えてやるよ。戦いと偏差値のことと、戦い方についてな」
「あ、は、はい」

真剣な大胡教師の指令がいきなり聖に向いてきたので、少し戸惑い気味で返事を返した。
その日はこれで委員会が終了となった。もうとっくに他の委員会の集まりは終了しており、時計の針も午後十八時を過ぎていた。

SILVER BLITZ

「ぷっは。やっぱ仕事の終わりはこれに限るよなぁ」

大胡教師は盛大に歓声を上げて、口の周りをビールの泡で包みながらつまみを食べた。
そんな大胡教師も見慣れたものだ。大胡教師が聖の家庭教師のようなものになる前から二十歳を超えていたので、よく夕飯を一緒に食べたものだ。その時は祖母もいたので、一緒に騒ぎながらビール

や日本酒を飲んでいた記憶がある。
そう言えば大胡教師は、祖母に鍛えられて酒に強くなったんだっけなぁ。と昔の記憶を思い出した。聖の祖母も大変酒が好きな人で、手製のつまみを聖と一緒に突きながら自身は酒を片手に昔の武勇伝を聞かせてもらったものだ。勿論その時は、今もだが聖は未成年であるから飲んでいたのはジュースや炭酸飲料だった。
聖は祖母の武勇伝が好きだった。
祖母は聖の歳の時はそれはもうやんちゃで、改造されたエアガンなどを振り回してブイブイ言わせていたらしい。たまに家から見えるパトカーを見て「ポリ公が、またあたしを捕まえにきたのかね」と呟いていたことがある。意味は最近になって理解した。
そして今目の前でビールの美味さに感激している大胡教師に、祖母から教わったつまみを出してやった。椎茸のバター醤油ソテーだ。祖母は味が濃い目のほうが好きだったので、これをやる時は大抵醤油を焦がす。これが中々の美味であった。しかしその度に母に洗い物のことで叱られていた。

「はい、大兄ぃ……大胡先生」
「今は大兄ぃでいいって。学校じゃないんだから。――――おっ、おばあちゃんの椎茸のバター醤油ソテーじゃん。いいねぇ大好きだよこれ」
「うん。僕も好きだよ」
「だよなあ――――――ん、うめぇ。ちゃんと醤油焦がしてんじゃん。解ってんなぁ。いい嫁になるぞお」
「後で洗うの面倒だけどね。今水に浸してるけど」

台所には焦がし醤油の香ばしい香りが残っている。それも好きだった。
因みに飲んだ後のシメは、椎茸のバター醤油ソテーの醤油を温めなおし、温かいご飯の上にかけて食べるのだ。

「それじゃ大兄ぃ。昨日のことなんだけど」
「ああ、なんでも聞いてみろよ。この神つまみに免じて答えてしんぜよう？」

酔った勢いで軽はずみな発言を繰り返す大胡教師。もうそれに慣れてしまっているので、聖は冷蔵庫の中にある下校中に買ったコーラの缶を出した。

「高校の偏差値を守って戦うシルバーブリッツの存在を、大兄ぃ以外の先生でその存在をそれくらい知っているの？」

その質問に大胡教師の進む箸がぴたっと止まった。そして動き出す。

「そりゃお前。決まってるだろ」
「どれくらいなの？」
「全員」

一瞬コーラを持つ手から力が抜けてしまった。まさかここまで簡単に答えられ、それが当然のような顔をされて答えられると逆にこっちが困る。

「因みにな。シルバーブリッツの存在を知るのは、平均が大学生って答えが出されているな。お前みたいに高校から選ばれてシルバーブリッツになれば話は違うが、それ以外の同級生は皆知らない。だってそうだろ。高校生生活の裏側では非現実的な戦いが行われてるって誰が信じる？　でも大学生になると話は違う。大学生の――――特に教職免許を取ろうって奴は必ずシルバーブリッツの存在を知ることになる。それが今の日本の裏の法律になっているからだ。教

職員になるなら、必ずそれを知らなきゃならねぇ。特に高校生の教員になりたいって奴がたら、必修よりも恐ろしいことになるな。まぁ要するに俺のことなんだが」

そう言えば昔、大胡教師が大学一年生になった頃だった。勉強を教えてもらおうと部屋に大胡教師を招いたことがある。そこで余談として話されたのだ。いや、あれは呟きに近い。「俺は高校生の教員にだけはなりたくねぇなぁ」と言っていた。それは今でもはっきりと覚えている。

それに対して「なぜだ」と問うたが、答えは結局返ってこなかった。代わりに大胡教師に頭を撫でられ「俺がお前の担任になったら、必ず守ってやるからな」と言われた気がした。ここはそこまで覚えていない。

「まぁ偏差値に関わることだ。教員側が把握してないでどうするよ。って話だな」

笑いながらビールを最後まで飲み干し、次のビールの缶に手を伸ばした。

「んーじゃ、次。鳴本に第二とか第三とか言ってたよね。あれって何を指してるの？」

「ゲームで言うレベルだよ。今使える魔術レベルな。一から始まって数が増えるごとに強さが増していく。今現在見つかっているのは第二十な。解りやすいようにレベル二十って言っておくよ。因みにお前のレベルはゼロな。第零。魔術使ってないからな」

「ふーん」

「俺達はこれを階級（スペック）と呼んでいる。第一階級、第二階級って感じな。解停って言ってもいいだろう。設定っていう意味も合っている。上がるごとに魔術も強くなる」

「つまり一レベル上がるごとに使える魔術も多くなるってことなの？」
「そうだ。使える魔法も色々あるからな。第、つまり魔術レベルが上がることによって使い方のバリエーションとか、範囲とかが広がるとかの特典があるから。使える魔法の種類、つまりお前が昨日見た炎を使う男、どんなのを使って攻撃してきた？」

大胡教師の質問に、トラウマになりかけた記憶を恐る恐る開封する。そして戦闘中に解析していた相手のデータを思いだして伝えた。

「まず炎の球を飛ばすとか。サイズはサッカーボールくらい。あと最後に炎の柱も出してた。太い木を一瞬で炭にしちまうほどの火力だった」
「ふん。一つの属性を連発で大小同時に放つか――――第六階級って所だな。そんくらいなら都竹なら軽く倒せるか」
「へ？」
「あ、いや。何でもない」

都竹ちさとは図書委員会に行く途中で聖が出会った少女で、綾乃とはまったく正反対の性格の、おっとりとしていて、大人しくて優しそうだった。その上スタイルが良く、隣のクラスだというので男子共の視線を集めてしまうのだろう。なのであのような人通りの少ない場所で本を読んでいたのだ。と図書委員会の集まりが始まる前まではそう思っていたのだが、都竹ちさはなんとこの高校のシルバーブリッツの一員であり、聖を待ち伏せていたのだ。

「都竹さんってさ」
「ん？」
「魔法使うの？」
「そりゃシルブリだからな」

「どんな魔法なの……シルブリ？」
「シルバーブリッツの略。俺が考えた。長くて言いにくいんだよな。皆は真面目にシルバーブリッツって言ってるけどさ」

つまみの一つである鯵の開きを平らげ、開封して二分も経っていないのにも関わらず三分の二も減っていたビールを最後まで飲みきる。大胡教師の顔が少し赤くなっていた。

「聖、シメちょーだい」
「ん。ちょっと待ってて」

上記にある通り、シメとは椎茸のバター醤油ソテーのタレを温め、少し薄めて炊いた米にかけて出すのだ。聖も祖母と何度もこれを食べていた。純粋に旨いと思う。少し下品だが祖母はそんなのお構いなしに醤油ご飯を啜っていた。

「おっほう。これこれ」

顔を赤くした大胡教師が恐るべきスピードで醤油ご飯を吸い込む。その間に空いている食器を下げて水に浸した。
三分も経たない内に大胡教師は醤油ご飯を平らげ、丁寧に聖が立っている台所までそれを持ってきた。

「ごっそさん。お婆ちゃんの味を受け継いでんなぁ。将来良い嫁さんになるよ。お前は」
「大兄ぃ、僕は男だよ。まぁそんなこと関係なく台所に立つけどさ」

大胡教師から食器を受け取り、水に浸す。もう片方の手にはスポンジが握られていた。
一方大胡教師は聖の皿洗いを見ながら換気扇を回し、Ｙシャツの

中から煙草を出して、棚の上から灰皿と備え付けのライターを摘まんで煙草に着火し、紫煙を燻らせた。
台所は決して広い訳ではない。三人並ぶと動けなくなってしまう程のスペースだ。なので見ないつもりでも視界が狭いので、聖の皿洗いが見えるのだ。手慣れた手つきで皿の洗浄を終わらせる聖は、平和そのものだった。
大胡教師はどこか悔しくなり、少しだけ奥歯を噛み締めた。

「――――なぁ聖。ごめんな、お婆ちゃんが亡くなって、落ち着きたいだろうに。シルバーブリッツなんぞに関わらせちまって」
「……」
「守ってやりたかった。お前をな。お婆ちゃんが亡くなった後、そうお婆ちゃんから頼まれた気がしたんだ。お前は見た目に以上に腕っ節が強いしから一々守らなくてもいいんだろうけど、困った時に助けてやってほしい。そんな感じ。けど中学生の時にお前の適正を知ったからな。その時、俺の目が届くあの高校を受験させようと思った。だから俺もあんなに必死になって勉強教えたんだぜ？　なのに昨日は本当にごめんな。俺が先回りして色々説明してやれれば良かったんだけど、昨日はあの煩い校長を説得するのに時間がかかっちゃってな。月波がフォローしてくれたから何とかなったが、無ければお前はやられてた。だから本当に今、お前がいてくれて俺は嬉しいよ」

確かに昨日は死んだと思っていた。けど生きていた。綾乃のフォローなんてあったもんじゃない。
昨日の窮地を脱出したのは、聖の実力だというのか。

「だから今日は魔法について説明してやるから。これで不安とはおさらばしようぜ」

すでにフィルターギリギリまで灰に変えた煙草を灰皿に押し付け、換気扇を止めた。すでに聖の皿の洗浄は終わっている。二人は聖の部屋へ向かった。

「これが基本のカード。第一解放で使えるカード達だ」

聖の部屋で二人は床に座っていた。季節は春なので薄いカーペットを敷いてある。その上には数枚のカードが広げられてあった。全て第五教師の懐から出されたものである。

「ファイア、アクア、リーフ、サンダー、ライト、ダーク、ストーン、エアーってな感じ。まだ色々あるんだけどそれはまた今度小泉あたりに聞いてくれ。あいつなら色々教えてくれるから。解放状態ってのは――――――リストバンド出してみろ」

大胡教師の指示通り、右ポケットからリストバンドを取り出す。大胡教師はそれを手に取り聖の左腕に付けた。

「腕輪の発動の仕方な。リストバンドを左腕に付けたら右手で覆うようにリストバンド全体を掴み、左に回す。これで腕輪が出現する。やってみろ」

大胡教師が左手を右手で回したので、それを真似してリストバンドを左に回した。すると左腕のリストバンドが一瞬で変化した。淡く光ったと思えば、鈍い銀色の光沢を放っていた。昨日の腕輪とは違う。変化したのだ。物質の変化を素肌で感じた。外側は金属の感触だが、内側は綿のように柔らかい。しかし質量はあるようなので、ずしりとした重みを感じた。三キロ程の重量だった。

「カードのことは聞いているな？」
「月波さんから聞いたけど、よく解らなかった。破いて珠にしたけど、魔法なんて出なかったし」

綾乃の名前が出た途端に大胡教師の顔が引き攣った。大胡教師も綾乃には手を焼いているらしい。

「あー月波は説明なんてするより実戦で教えるからなぁ。月波は才能があってな。シルブリに入ってすぐに強くなりやがった。一年生は実戦に入る前に何度か二年生と三年生に教えてもらうもんだが、月波の場合はセンスですぐに身に付けやがった。俺が見てきた中で、二週間という短期間であれだけ階級を強くした一年生はいない。月波は腕輪を付けた時点で第四階級だった。まずそんなのありえないんだ。それから一回だけ小泉のレクチャーを受けただけで実戦に出て、第四階級のまま第五階級の一人を三十分かけて倒しやがった。それで次の実戦に出たら第八階級に成長していた。それで今は第十階級。普通二週間って言ったら一年生なんてろくに使い物にならないんだ。二週間で第一階級に上がれるか上がれないかだ。隼人は今第二階級なんだけど、まだ実戦には出せない。通常が通用しない奴らなんだよな――――――けど一人だけ異質な奴がいる。月波よりも解せない奴だ」

大胡教師の視線は明らかに聖に向けられている。固唾を呑んで、震える声で答えた。

「ぼ……僕、なの？」

聖の手が震えていた。綾乃の話がどれだけ通常平均値を超越しているのかは大胡教師の説明で十分理解出来たし、あの強気な態度と

昨日の闇の森林での落ち着きはそれから来る自信だったのだ。しかしそれを超える事態が起こった。
図書委員会で綾乃に説明された通りなら、それは――――――――
「そうだよ聖。お前の異常とも言える戦闘力。月波は第四階級の時、第五階級を倒した。けれどもお前は、お前は――――――第零階級で、誰の援護も必要とせずに第六階級を倒してしまった。これはシルブリでも未だに起こった事が無い大逆転だ。――――――確か戦闘が始まる前に月波にカードを渡されたよな？　月波の階級で使えるカードをお前が使える筈が無いのだが、それ以外考えられない。一体どんなカードを渡されたんだ？　カードの名前を覚えているか？」
切羽詰まった表情で大胡教師が迫った。その顔に酔いはない。純粋な疑問を解決するために聖を問うたのだ。
聖もカードの名前を覚えている。名前が簡単だったこともあるが、使えなかったという点が大きなインパクトになったのだろう。鮮明に覚えていた。
そしてそのカードの名前を大胡教師に告げると、大胡教師は天地が引っ繰り返ったかのような、しかし納得した表情で呟いた。
「アーツ――――――灰色のカードだった」
「やっぱりか！　いや、アーツはシルブリの数少ない物理攻撃が可能な魔術なんだ。成程、それなら第零階級の聖でも扱える。考えたな月波め」
「アーツってそんなに強い魔術なの？」
「いや、とても弱い」
なるほど。これがスベるというリアクションなのか。と聖は盛大に額を立てていた右膝に叩きつけた。
ここまで素直に答えられると、僅かに抱いていた期待が一気に崩

壊するというものだ。

「魔術師が使ったら弱いな」

「え？」

「要は使い様だ。魔術に頼り切った魔術師――――シルブリが、いきなり物理的な打撃系武器を使って攻撃しても、使いこなせるものか。例えるなら英語しか学んでなくて検定で一級まで上り詰めた奴に、いきなり中国語を話してみろ。なんて言うのと同じさ。けどな、普段から物理的な打撃系武器しか使ってこなかった聖が使えば、シルブリよりまともに――――いや、互角かそれ以下な戦況に持ち込めるはずなんだ。勝率が零パーセントだったのがいきなり五十パーセント以下にまで膨れ上がる。これは大きい」

「けど、僕がそう簡単に第六階級を倒せる訳が無い。奇跡でも起きない限り」

「そう、そこだ」

大胡教師が懐から出したのは名刺入れだった。そこからカードを出したのだ。

そして名刺入れの一番下にあったカードを出し、聖の前に置いた。指で突いて聖を少し睨む。

「どうして勝率五割以下の聖が、第六階級なんていう奴を倒せたか。今聖が言った通り奇跡でも起こらない限り無理だ。けど奇跡なんてそうそう起こるもんでもないし、ポンポン起こられても困るだけだからな。だから推測するに、奇跡なんて起こらなかったんだよ」

大胡教師は聖を睨みながら続けた。いつしか聖の額には汗が浮かび、頬にいくつかの筋を作っていた。

顎から伝わり落ちる汗がアーツのカードの端あたりに落ち、弾けた。小さな水の塊なのに、やけにはっきり見えた。弾けた瞬間のさ

らに小さな粒となって飛散する時の一粒一粒の全てが肉眼で見る事が出来た。極度の緊張感からくる感覚なのだろう。

「全てはお前の実力なんだよ聖。――――――やっぱりお前、意識(C)熔暗(FO)ができたんだな。もし本当にＣＦＯが使えたならば、勝率は九割以上に膨れ上がる。……この仮説が事実なら、事態は納得が出来るな」

「ＣＦＯ……？」

「Ｃｏｏｎｓｉｃｉｏｕｓｎｅｓｓ　Ｆａｄｅ－Ｏｕｔ　の略だ。図書室で話したろ。無意識の内の戦闘について」

聖が恐れた事だった。意識を無意識に移行して戦闘を行うことだった。と言っても昏倒する程意識を失うのではない。感覚や意思を忘れてしまうのだ。排除と言ってもいい。自身の身によほどの危機が訪れれば発動が可能になるが、意思がないため無差別で攻撃してしまうのだ。それが一種の暴走とも言える。

無意識は恐ろしい。意思がないため感情がない。情もなければ喜怒哀楽もない。恐れも無い。そしてなにより感覚がない。痛覚がないためダメージによる怯みがない。身体の限界から来る筋肉などの悲鳴も気にせずに戦える。体力が空になったとしても苦痛がないので無制限に戦える。情が無いので相手が動けなくなるまで、動かなくなっても拳を振るえる。

「実はお前は一度だけＣＦＯになったことがあってな。小学三年生の時なんだけど、覚えてるか？」

「い、いや……覚えてない」

「だろうな。いや、そこまで酷い話しじゃないんだけどな。お前が小学三年生だった頃だから九歳だったな。俺が二十歳、大学二年生の時だったな。季節は秋だったんだが、本当に覚えてないのか？」

「うん」

本当に覚えていないのだ。いや、そのことに関しては無理もないだろう。無意識なのだから記憶そのものがないのだ。覚えているはずがない。

「このＣＦＯを取り入れたアーツで灰色ローブの男を倒したのか。――――苦しいだろうけど、戦力として取り入れられたのなら、シルブリ五人くらいの戦力を得られるな」

ぶつぶつ呟く大胡教師をじっと見つめていた聖だが、汗を拭って肝心なことを聞いた。

「ねぇ大兄ぃ」

「ん――――あ、ああ。何だ？」

「僕はまた、あの戦場に出なければならないのかな？」

それが一番聞きたかった。答えはある程度予想できている。それを理解した上の質問だった。

「――――怖い、か？　聖」

大胡教師がゆっくり問う。

「……うん」

聖にとっては命を落としかねなかった。トラウマだ。

「――――戦いたく、ないよな」

「……うん」

数秒の沈黙が訪れる。痛々しい顔で大胡教師は俯いた。
そしてゆっくりと頭を下げた。

「ごめんな、聖。あんな怖い思いしたんだもんな。それにお婆ちゃんがいなくなってそんなに経ってないのに……俺が悪いんだ。守ってやるってお婆ちゃんにも、墓前でも誓ったのに。昨日は守れなかった。なのにお前は頑張って足掻いて戦って、結果を残してくれた」

痛々しい表情がさらに苦悶に震えるように歪む。

「今回の件で謝ることは沢山ある。けれど解ってくれ。戦わなくては守れないものもあるんだ。身勝手なのは解ってる。でも皆守りたいものがあって戦ってるんだ。それを理解してくれなんて言わないけど、どうか無駄にしないでほしい。シルブリとして戦いに参加してくれと強制はしないよ。戦いに参加しないんだったら、卒業まで他の教師や、校長からだって俺が守ってやる。――――――だから考えてほしい。シルバーブリッツを。シルバーブリッツとして戦って、何を守るのかを考えてほしい」

頼む。と大胡教師は頭を下げて頼んだ。
聖はただ、無言で大胡教師の頭を見下ろしていた。

月が似合う少女　？（後書き）

いつもなら爽やかな朝として気持ちよく起きれるはずだった。なのにあの一件があっただけで朝がくるのが鬱になるほど嫌になってしまった。一日中ネガティブになりそうな聖に、綾乃はこう言った。

「何その顔。蹴り殺すわよ」

月が似合う少女　？（前書き）

守る理由があれば何にだって戦える。そう思っていた。だがいきなり血みどろの戦場に放りだされて「考えてくれ」と言われてもこちらが困るだけだ。
しかし教師はさらに行動に出た。言葉で駄目なら、行動で示そう。
と――――

月が似合う少女　？

朝は好きだった。窓を開けて爽やかな風と朝日を感じるのだ。部屋の空気の入れ替えで温まっている部屋の空気を追い出し、新鮮な空気に入れ替える。

そして軽めな朝食を食べて走りながら高校へ行き、部活の朝練に参加するのだ。

聖の身体能力は高い。レベルで言えばそこそこ鍛えた高校三年生くらいだろう。それでもまだ技術が足りないため、鍛えた高校三年生には少しだけ及ばないのだ。特に部長の冬峰雪歩という少女には勝てないでいる。彼女は武器の扱いに長け、さらにそれらを失った際の対処法も知っている。なので素手で聖とスパーリングを行っても片手で制してしまうほどの実力者なのだ。

聖は雪歩を目標とし、また超えるべき壁として彼女を尊敬し、憧れた。無敵武道部の部長として凛とした戦いを行う彼女は美しかった。容姿も整っていて文武両道な彼女は同学年から後輩まで人気があり、教師達からの信頼もある。無敵武道部がネタ部として廃れないのも彼女が仕切っていることが理由として妥当なところに入るだろう。

聖は今日も、昨日の自分よりも少しでも強くなろうと努力するために朝早く家を出る。朝食を食べた腹は落ち着いていて、多少動いても吐き気を催すこともないだろう。

昨日、大胡教師に言われたことがやはり気になった。今それを引きずっていないと言えば嘘になる。気持ちに少しの乱れを感じた。このままではいけないという自覚はある。だがどうしようもない。聖がそれを引き摺り、情のままに大胡教師に従ってシルバーブリッツとして戦いに参加していいのだろうか。

それでは駄目なのだ。自分の意思で動かなければならない。もうすでに聖には血の繋がった家族がないのだ。叔父も叔母もいない。

親戚は祖母を嫌っていて、祖母に気にいられていた聖をよく思っていなかった。なので祖母が亡くなっても表では言葉だけで慰めても、何もしてくれなかった。

生活面はどうにかなる。大胡教師がいるので他のことも助けてもらっている。だが聖は一人なのだ。暗い家で一人で寝る。誰にも挨拶することもない。高校の成績で褒められたりしない。夜遅く帰ってきても怒られたりしない。偏った食生活をしても何も言われない。誰も掃除をしてくれない。一人では広すぎる家に、人の温もりがない。大胡教師や同級生や友人がいる時には決して顔には出さないが、夜に一人で泣いていたこともある。孤独に一人で戦っていたのだ。

しかし今はそれも少なくなってきた。無敵武道部でとある再会をした。それこそ冬峰雪歩なのだ。彼女も幼い頃、聖の祖母に武道を習った事がある。祖母は実戦的な格闘を好んだ。一般的にはそれを喧嘩ともいうが、決して人は殺さずの信念の元、一応スポーツマンシップに則ってはいたが、型破りな戦術で相手を翻弄するやりかたに雪歩は惚れていた。彼女は幼い頃、それはそれは非力で、それを嘆いていた。基礎から武術を学んでも基礎通り動いてしまう。それが別に悪い事ではない。むしろ基礎が働くのは最良なのだが、それ故に負けてしまう。相手も決して基礎通りに動いてくれるとは限らない。ルールを守らない場合もある。

雪歩が小学四年生の時からだったか。雪歩は男子から虐められていた友人を庇う度に拳を振るうが、結局は囲まれてしまう。結果は解りきっている。

そしてある日、雪歩は聖の祖母と出会った。雪が降っている冬の日。クリスマスが近くなって来た頃だろうか。また男子から友人を庇い、囲まれている時だった。聖の祖母は雪歩を見て、にっこりと笑ったのだ。そして雪歩の視線に気付いて他の男子が祖母に気付いた時には、祖母は男子の一人の背後に立っていた。そして叫ぶ。「カアーッ」と怒鳴った。するとあまりの剣幕と迫力に驚いて男子達は逃げた。

その光景を見て驚いている雪歩と、慌てて逃げる男子達の背中を面白そうに声を上げて笑う老婆。祖母は一通り男子達を笑った後、雪歩にこう言った。「ルールなんて、糞喰らえさ。あんたは基礎とルールを大事にしてるんだろうけど、実戦じゃ通じないよ。もし本当に強くなりたいんだったら、いつでもいいからあたしのところにおいで」

明るい笑み。乱暴だが暖かい言葉。雪歩はこの言葉に打たれた。次の日から教えられた家に行く。祖母に会うと、空き地で武道を習った。その時に聖と会ったのだ。

そして数年後、聖と雪歩は再会した。雪歩は中学二年生まで祖母のところで武道を習った。中学三年生になる頃には雪歩の高校受験があるので、祖母もそれを理解していた。ほとんどを教えたと言って「合格」と言い渡した。

あれから無敵武道部で雪歩は頑張っていたのだ。そして聖もそれに入る。再会した時はどれだけ嬉しかったことか。血の繋がった兄も姉もいなかった聖にとって、雪歩は姉のような存在で、雪歩も聖を弟の様に可愛がった。組手の時は容赦はしなかったが、それでも大事だった。

聖が無敵武道部に入った時、大胡教師とで一緒に面倒をみてくれると言ってくれた。

寂しさが薄れ、暖かい夜を迎えられた時はどれだけ嬉しかったか。

なので今日も聖は無敵武道部の朝練習に向かう。雪歩に会う事も楽しみだったし、体を動かす事に喜びを感じたいからだ。

SILVER　BLITZ

「お早うございます」

いつも通りに走って朝練習に参加する。部室の他、道場の貸出も得ているので遠慮なく練習出来るのだ。

朝早いと外界よりも少し暖まった空気を吸う羽目になるが、良いこともある。特に一番乗りだと気持ちがいい。埃が舞っていないのだ。誰一人として数時間触れなかった道場に裸足で踏み入る。そして道着に着替え、シンと静まった道場で軽めの体操をする。

そして拳を握った瞬間に空気が変わる。暖かい空気がキンと冷えたような、緊張の糸が張り詰めたかのような。そんな中で拳と脚を振るう。それが気持ちいい。

だが今日は違った。いつもなら先に先輩が二人くらいはいるのだが、今日は一人しかいなかった。二人の中には必ず雪歩がいる。が、そこにはのは雪歩ではない。聖は少し驚いて、呟くように名を呼んだ。

「大兄ぃ……？」

そこにいたのは、いつものように遅れてやってきて、珍しくジャージではなくて道着を着ていた大胡教師だった。

「待っていたぞ。聖」

大胡教師は静かに口を開く。その眼は畳みを見ていたが、顔が持ち上げられると共に聖をしっかりと見据えた。

おかしい。何かが違う。聖は直感で違和感に気付いた。まず空気が違う。いつもように柔らかい物腰は消え失せ、氷の様に冷たい視線で聖を見ている。何よりいつもなら「学校では先生だろ」と注意

をしてくるはずだ。なのにそれがない。

「道着に気がえろ聖。準備は一分で済ませ」

いつもとは違う大胡教師に少し焦りながら、聖はゆっくりと鞄を降ろして中から道着を手に取る。

「大兄ぃ。何を怒っているんだよ。――――もしかして、昨日のことなの？」

だとしたら少し厄介だ。少し不安に思いながらシャツを脱ぐ。返事を待つと同時に着替えているのだが、大胡教師の返事はない。聖を見て黙っていた。

気味が悪い。口にしようとしたが、怒られると思って黙っていた。

「……大兄ぃ」

「早くしろ」

一蹴。何かを言おうとしたが、ぴしゃりと遮断された。

渋々と道着に着替え、鞄と制服をいつも置いている場所に置いて畳の上にあがった。帯を少しきつくして大胡教師の前まで歩き、対峙した。

「どういうつもりなの？　いつもならあまり来ないのに、今日に限って早いね。しかも道着って……僕と組手するつもりなの？」

聖が問う。しかし大胡教師は答えない。その代わりに拳を握って構えた。

「え……大兄ぃ？」

「構えろ聖。五秒経ったら始めるからな」
「は――――――ちょっ」

五秒後、宣言通りに大胡教師が攻撃を開始した。鋭い蹴り。裸足とは思えない攻撃力。ヒュンと空気を斬って迫りくる蹴りを、聖は上半身を捻って回避する。が、爪先が微かに鼻先に当たっていた。

それだけなのに、まるで刃物で切り付けられたかのような痛みが鼻の奥でした。掠っただけでこの威力なのだ。

「大兄ぃ――――――本気なのか……？」

回避したことによる急な体重移動に対応するため、二歩下がりながら体を回転させる。そして素早く振り返って構えた。大胡教師は本気だ。本気で拳を振るって来る。祖母の訓練に大胡教師も参加して教わっていた。それこそ雪歩よりも早くから、そして長く続けていた。なので組手もしたことはあるし、大胡教師の実力も知っているつもりだ。

だから油断出来ない。大胡教師もまた、聖が勝てない内の一人なのだ。

昨日、真剣に考えてくれと言われた。そしてその答えを拳にしろ。ということなのだろう。いつの時代だよ。と突っ込みたかったが、今はそれどころではない。兎に角迫りくる大胡教師をどうにかしなければならないのだ。

「しっ」

大胡教師の連続蹴り。下段から上段まで一瞬で蹴って来る。どう蹴って来るのかは軌道を読めば解るので、下段は右足で、上段は右腕で防ぐ。衝撃による振動を逃がし、聖は反撃に出る。

大胡教師が連続蹴りを終えて足を引っこめる瞬間、それに合わせ

て聖の一歩前に出る。右腕を曲げて肘を突き出した。だがそれは同じように突き出された大胡教師の左腕の肘で突き合いになり、次撃の曲げていた腕を拳を握って振るうことも同じ、突き合いになった。
ならばとばかりに聖は左手の指を揃えて伸ばす。腕を後ろにやり、振り子の様に威力をつけて突きだした。聖の得意技は蹴りと手刀だ。

「甘いんだよ聖」

何と、避けられた。大胡教師は左腕で聖と鍔迫り合いをしているというのに、体制としての重心を崩さずに右足を引き、聖の左手の手刀の軌道を読んで回避したのだ。反射神経からくるもので、どんな素早い攻撃にも対処できるようになっている。

「ちぃっ」

舌打ち。突き出し切った左腕を回収すると今の聖のように逆に接近されて反撃を貰ってしまう。なので鍔迫り合いをしている右腕の肘で大胡教師の左腕の肘を弾き、こちら側に大胡教師の重心を崩して誘導させる。たった今重心を移動させたばかりなので、まさかその直後に強制的に再び移動させられるとは思っていなかったのだろう。あっさりと大胡教師は聖の正面に倒れて来た。だがそれだけでは反撃されやすい場所に移動させてしまっただけだ。聖は考えもなしにそんな行動はしない。

「もう昔の僕とは思わないでほしいね」

同時に左腕を回収したのだ。そして自身も大胡教師と同時に回転して背を向ける。互いが背を向け合ったという立ち位置になる。そこで今回収した左腕を使う。遠心力と筋力をフルで使い、大きく弧を描いて薙いだ。これなら隙も無く相手の死角を突ける。と思って

いた。
バシンと乾いた音がする。聖が驚いて息を詰まらせた。大胡教師の右腕が後ろに回され、聖の腕を肘で突いたのだ。それも聖の肘を突いた。それによって衝撃が分散されて薙ぎが止まってしまう。

「昔の僕と、何だって？」

眦がビリッと動いた。嫌な予感がする時は決まって動く。次の直後、両足に鋭い衝撃が走った。背後にあった大胡教師の気配が消える。背中越しに姿を確認してみると、視界の下の方に黒い糸が見えた。それが大胡教師の髪だと解った時には、視界が百八十度回転していた。
足を払われた。このままでは頭を思い切り打ってしまうと、先に危機を感じていた聖はもう動いていた。右腕を伸ばして畳みに掌を叩きつける。一瞬だけ体が持ち上がり、今自分がどういう状態で宙に浮いているのか把握すると、一番安全なルートを見出して転がった。受け身をとったのだ。
二回転がると、約二メートル程の距離を取れた。受け身を終えて体制を整える。そして前を見ると、逃がさんとばかりに追撃を始めようと大胡教師が接近を始めようとしていた。
聖もそれに応じる為に両足に力を入れた。
こうなれば全力で応じるしかない。言葉が通じない今、戦闘で大胡教師を黙らせる他はないのだ。

「つぇいあっ！」

右足を踏み出すと同時に体を左に回転させる。先程の左腕の薙ぎと同じ要領で左足を薙ぐ。今度は遠心力と筋力で上段を薙ぐ。鋭い薙ぎだが大胡教師はそれを急ブレーキをかけた上で上半身を後ろに反らして回避する。しかしまだ終わらない。回避された左足はその

まま元の位置に戻ることなく、もう一度一周させて今度は下段を払った。
しかしそれさえも大胡教師には見抜かれていた。軌道が単純な下段払いは、三歩のたたらを踏んで後退しただけで避けられる。そして大胡教師は三歩の距離を一歩で詰めて来た。つまり反撃に移ろうというのだ。
一気に距離を詰められた聖が反撃に対応しようと、まだ宙に残っている左足を無理矢理回収して後退する。このままでは体当りと同時に両の掌からくる掌底を叩き込まれる。これらの掌底は手首を付けて回転させながら叩き込む。聖の祖母の得意技の一つである双弾砲と呼ばれる闘技。
これを危惧しながら両腕を揃えて防御を試みるが、大胡教師は双弾砲を放つとその防御の両腕を容易にこじ開け、聖の胸に掌底を叩き込んだ。

「ご……ふっ」

双弾砲の衝撃は胸板を突き破り、体内を揺さぶり荒らした。肺の空気を無理矢理押し出され、心臓の鼓動さえも止まりそうになる。呼吸をしたかったが肺が潰されて吸いこめない。酸素が不足することにより意識が朦朧とし、足がガクガクと震える。
とどめに大胡教師は自身で体当りを決めた。足腰肩を同時に使った、一番力が入り易い体勢で無防備の聖の胴に体当りをした。大胡教師よりも小柄な聖は当然大胡教師よりも体重が軽い。そのために次の瞬間には大きく吹き飛んだ。三メートルは宙に浮き、次々とバウンド音を響かせて壁に叩きつけられた。
背中から壁に突っ込んだので、足をズルズルと前に出し、床に座る形でやっと止まった。

「聖――――――ここからだろ。お前の力はここからだ」

力無く俯いている聖に話しかける。意識が失われているかは解らない。

「あの時のお前は丁度、こんな感じで意識を失っていた。そして群がる相手を一掃した」

ピク。と聖の指が動く。

「あの時のお前を、もう一度俺に見せてみろ！！」

ゆらり。と聖が立ち上がる。生気を感じられないような立ち上がり方だ。

直後、大胡教師の背筋に悪寒が走る。これは純粋な恐怖からくるものだった。聖という普通の人間から化物を取り出してしまい、その化物が大胡教師に牙を剥いたような。

聖は今、意識熔暗（CFO）を発動してしまったのだ。

月が似合う少女　？（後書き）

意識がないということは厄介極まりない。なのにこの教師はあえてそれに挑む。意識を失って感情を排除した少年は、まるで野獣のように教師に襲い掛かる。

その真価は、いかに――――――！

月が似合う少女　？（前書き）

目の前が紅に染まり、抗えない破壊衝動が心を蝕む。自分の中で静かに眠っていた化物が眠りを覚まさせた愚か者を制裁するために牙を剥く。

駄目だ。その人は大切な――――――！

月が似合う少女　？

冷えた空気が暖まってくる。日差しによるものかと思いきや、道場で拳を振るいて脚で舞う二人の熱気によるものだと気付くのに何秒要したのだろう。いや気付くはずもなかった。気付ける余裕がなかった。　大胡教師は目の前でメリメリと筋肉を鳴らしている化物――――少年は、目の前にいる自分を深い眠りから目覚めさせた愚か者をどうしてくれようかと爪を鳴らし、牙を尖らせた。そんな化物を大胡教師は目覚めさせてしまったのだ。自らの拳で。化物の力量を見定めようとしたが、これでは十分に計れるかどうか解らない。それどころかそんな余裕があるのかも解らないのだ。

「だけど、怯む訳にもいかないよなぁ」

苦笑いを浮かべて聖の様子を伺う。出方次第で何通りの対応が可能だが、それは人に対応する術だ。

相手が化物では人と同じ対応で通じるかどうか、不明なのだ。

「う――――――――あ」

生気が感じられない虚ろな目をしている聖は、その表情とは裏腹に熱い息を吐いていた。それほどゆっくりとしている呼吸は、まるでドラゴンが炎を吐いているかのようだった。

そして大胡教師が様子見故に少し爪先を動かした時だった。

聖の姿がその場から消えた。大胡教師の視界から完全に失せている。違う。肉眼で視認出来る範囲を超えて移動しただけだ。気配はそこまで動いていない。なので横には移動していない。下に移動したならば必ず視認できるから気付く。

だとしたら、

「凄いな。魔法を使っていないのに、人間の筋力でそこまで跳躍を可能にしているとは」

驚いて上を見る。そう、聖は大きくジャンプしていた。大胡教師には見えないほどの筋力を撓らせ、高速の跳躍を見せた。

聖の背後には窓がある。その位置は三メートルほどの場所にあり、普通は開けない。なので淵を掴むのは簡単なのだ。だが三メートルもの距離を跳躍できるはずがない。しかし聖は簡単にやりとげた。三メートルの跳躍の後に淵を掴んで壁に足の裏を付けて再び体制を整える。

直後にダンと空気が鳴った。足の裏で壁を思い切り蹴った音が空気を振動させた。まるで大砲のような音量と空気の圧力。聖は大きく宙を舞う。

「後ろか！」

大胡教師の頭上を通り過ぎる。が、落下角度が異常だった。放物線を描くと思いきや、放物線の半円の頂点を通り過ぎてからカクンと九十度、軌道が変更された。まるで射ち落とされた鳥のように。

何が起きたかと疑問に思ってからそれを理解する時間さえ大胡教師には与えられなかった。考える暇を無理矢理詰めるように聖が攻撃を嗾けたのだ。まだ着地から体制も整えずに攻撃に移った。畳の上には肩から落ちた。首と後頭部の衝突を受け身の様な物で防ぎ、両足の爪先を床に付けると同時に跳びかかって来た。

「くう……」

聖は右腕で手刀を突きだした。その速度は意識がある時の三倍はある。これを左腕で受ける。道着越しでも物凄い衝撃だった。素手

で受けていれば皮膚が破けていただろう。
突き出した手刀は戻さなければ次の行動に支障が出る。大胡教師はそこで再び反撃しようと思っていた。だが聖の行動に目を見開いた。右腕を戻すと同時に左足を踏み出して左手の手刀を突きだしてきた。
つまり攻防一体の戦術。追加効果として一歩前に出て距離を詰めるという、自分の立ち位置を優位にできる。

「お婆ちゃんの戦法、こんなとこで真価を発揮するなんてな……！」

詰められた距離を離す為、大胡教師は今までの二倍の力で畳を踏みつけて五歩後退する。その五歩は細かい足取りでとにかく速い。二メートルほどの距離が開く。しかし聖はすでに左手の手刀を突きだした直後だというのにそれを収納せずに突撃を開始した。大胡教師が五歩で後退した距離を二歩で埋める。その方法は飛び跳ねて回転し、脚を薙ぐ蹴り。移動と共に攻撃する。

「ちぃっ」

回転脚を膝を折って半身になって回避すると、聖が着地した直後に右足を翻す。半身の状態で滑るように聖の懐に潜るともう一回転して両足を蹴り飛ばそうとする。
しかし大胡教師の足払いが当たる事は無かった。手応えが無い。聖は再び宙に舞っていた。三メートルは跳んだだろう。人間の筋力の限界を超えた様な動き。獣のような身体能力。受け身を取らずとしても攻撃に移れる精神。異常だった。
これが聖の能力。意識、いや理性そのものがないのだろう。故に痛覚も気にならない。眠っている時に脚を抓られても、抓られた側は何も覚えていないのと同じ。今の聖は半分眠っているのかもしれない。そしてその半分は人間が獣だった時の原始的な攻撃本能が呼

び起こされているのか。確かにこれは普通の人間が相手を出来るはずがない。理性がない獣、例えば極限な空腹に苛まれているライオンを相手に素手で立ち向かっていくようなものだ。しかし聖は空腹なライオンではない。化物だ。祖母に鍛えられて教わった戦術が体にしみ込んで無意識の内に使っていた。それがなければ今頃噛みついて攻撃していただろう。

ならばこれを鎮める方法は数択に絞られる。その内でも最も最善な方法を選択した。

「お前の能力は見せてもらった。でもこれが限界じゃないんだろうな。ほんの一部。……でもそれが解ったからそれでいいや。悪かった、眠ってくれ」

呟いて聖との距離を一気に詰める。攻撃を出した後だったので、聖は全力で突き伸ばした手足を引く事が出来なかった。

「ぐ……がっ？」

言葉にならない呻き。大胡教師を睨み、もう引いても間に合わない手足を諦めた。首を後ろに撓らせて、額を後ろに引く。頭突きだ。

「もう遅い。諦めてくれないか」

頭突きが放たれることはなかった。

聖が頭突きを放とうと奥歯を食い縛り、肩を前に出し始めた時には大胡教師の右手が聖の鳩尾を穿っていた。

「おぼっ……つぁ？」

ガクガクと震える膝。空気を求めて開いた口腔から涎が垂れる。

震えが体全体に広がった時、とうとう聖は意識を手放した。

「ごめんな聖。痛かったよな」

完全に意識がない聖を優しく抱えて畳の上に寝かせる。他にどこにも怪我がないか確認して、ようやく大胡教師は緊張を解いた。大胡教師は武術に長けているのだが、聖を相手にする時は余裕がなくなってしまう。そこには決して情は無い。つまり聖が日々成長しているということだ。

「俺を超える日は近いかな」

苦笑いを浮かべ聖に手を伸ばした時、遠くから聞こえる複数の足音に気付いた。朝練習をしに来た部員達だろう。

この状態を見られるのはちょっとまずいので、大胡教師は急いで聖を抱き起こすと、その行動とは裏腹に乱暴に肩に担いだ。

直後に道場の扉が開く。

「お早うございます大胡先生。って、聖と何してたんですか？」

そこには無敵武道部の部員全員が揃っていた。皆の目の前には可愛い一年生がボロボロになり、それが顧問の教師に担がれている始末。人数は少ないものの、二三年生は全員聖を気に入っていたので、そんな聖が気を失っていたら心配になる。

「大胡先生。今日は確か道場の点検で三十分朝練習を短縮して、遅れて来いって言ってましたよね。それが何で聖をボッコボコにしてんですか？」

堂々と胸を張って意見するのは冬峰雪歩だ。聖を弟のように想う

雪歩にとってはこの事態の詳細を知りたいところだろう。だが大胡教師は一切の説明をせずに道場を後にしようとすた。

「詳細、後で聞かせてもらいます。大胡さん」

「まぁ、後でな」

道場の暖まった空気が二人の言葉の剣で再び冷却されてしまった。雪歩の睨みと口調は刃の様に大胡教師の背中に突き立てられたのだが、大胡教師は背中越しにその殺気を感じとり、紙一重で回避した。そしてそのまま部員達を割らせて道を作り、道場を出てしまった。

道場にはしばらくの沈黙が続いた。痛い程の。

「部長、あれって……」

二年生の女子が雪歩に話しかける。が、雪歩は首を振って言葉を中断させた。

「多分アレでしょ。一年生の実力を計りたくって、二人きりになったんだけど緋之くんが力み過ぎて何かの拍子に頭ぶつけて気絶しちゃったんでしょ。――――――さ、先生はもう行ったし。私達は私達で朝練習を始めましょ」

雪歩自身も心配と不安で満たされていたが、今は皆を統率しなければならない立場なのだ。私情でいい加減な訓練をしてはいけない。それは理解していた。

なので今は自分の中にある余計な物を押し殺し、皆を纏めて朝練習を始めた。

少し暖かくて、甘い香りがした。これは女性が使うシャンプーの香りだ。あまり派手に香りを振り撒かず、控えめにした香りは近づく程に強く感じるタイプのもの。

つまりこれだけ香ると言う事は、そのシャンプーで洗った髪と顔が聖の顔の近くにあるということになるのだが――――――

「な、何で僕を見下ろしてるのかな」

まぁそう言いたくなるだろう。起きてすぐに見たのが、自分を罵倒して「クズ」呼ばわりする、聖にとってはトラウマに近い少女の顔だったのだから。

月波綾乃が、むっすりとした表情で聖を見下ろしていた。怒っている。表情からして絶対に怒っている。別に何か怒らせるようなことをした覚えは無いのだが、なぜだか綾乃は怒っていて聖を気持ちの悪い羽虫を見るかのような目で見下ろしてきた。

「……クズ」

開口一番がこれだ。解っていたが。

「へ……？」

解っていたのだが、聞き間違いかもしれない。それに賭けてもう一度聞き返して見た。

「このクズが。って言ってんのよクズ。まさか自覚がないとはね」
無駄に終わった。眉一つ動かさない綾乃は、さらに罵倒を続けた。
「何私を動かしてくれてるのよ」
状況が今一の見込めない。
綾乃から視線を外して周りを見る。鼻孔から入った匂いが医薬品のもので、今の聖は横になっていて、暖かいのは布団があったからだ。つまりここは保健室なのだ。
ゆっくりと起き上がり、額に手を当てて覚えている限り思い出すと、聖は確か大胡教師との模擬戦の中で意識を失った。その意識の失い方がまた特殊なもので、大胡教師に聖の八割の力で立ち向かったところまったく歯が立たず、大胡教師の表情もまったく変わらない。どこか馬鹿にされている様な気がして、今度は全力で拳を振るおうとしたら壁に叩きつけられた。ここからだ。ここから意識を失い始めた。
聖が壁に凭れ掛って尻もちをつくと、大胡教師が何かを言っていた。何の事かは解らなかったが、大胡教師の言葉らしき音が耳に入った途端、急に頭が発熱した。まっさらな布地にゆっくりと絵具が浸透していくように、聖の目の前が赤く染まっていく。気持ちが悪くなったが、そんな感覚まで溶けていった。
そして溶けた意識が次に何を思ったのか。記憶に手を入れてさらに奥深くを探ってみる。
意識が水飴の様な粘りを保ちながらゆっくりと聖の下へ流れ出て行く。足元に意識という水溜りが出来たみたいだった。だがそんな考えもやがて水溜りへ落ちて行く。
そして意識の中に残ったのは僅かな思考。だがはっきりと覚えている。強烈なほど、刻みつけられたように――――――

「このクズ。どこまで私を動かしたら気が済むの？　教室からここまで何百メートルあると思ってんのよ。この体力の無駄遣いをどうしてくれる訳――――――――ねぇ、ちょっと。聞いてるの？」

罵倒を続けていた綾乃が、聖の顔色が急変したことに気付く。何かを考えている表情から顔色が真っ青になり、瞳が虚ろになってくる。普通ではない顔で俯き、手を口元に持って行く。

「う――――――っぷ」

両手で口を強く押さえる。今まで虚ろだった表情に生気が戻ったが、それは苦痛によるショックからの影響であるものだ。苦痛、つまり吐き気。思い出した光景があまりにも衝撃的なものだったのだろう。

俯いてから急に体を痙攣させて呻くものだから綾乃も驚いていた。

「ちょ――――――吐くの？」

危機迫る様な表情と強く押さえた口元という仕草から察するに、綾乃も吐き気を催したと察したのだろう。幸いここは保健室だ。保健室には吐瀉物を入れられるようなものもある。保健室の隅には洗面台があった。そこには洗面器がいくつも用意されていることを思い出す。

「二十秒持たせなさい！」

下手に動けない聖が綾乃を見て、瞳で頷いた。綾乃は急いで洗面台に走ると、その上の棚に常備されているビニール袋とトイレットペーパーを力付くで取り出した。その衝撃でいくつか小者が落ちて

音を立てたが後で拾えば良い。洗面器にまずビニール袋を広げて敷いた後、トイレットペーパーを何重にも敷いて固定、聖の前に差し出した。
ギリギリ間に合った。手渡された洗面器に顔を押しつけるようにして口を開いた。

「ったく――――――間に合ってよかった」

最後だけは聖の吐瀉が落ちる音で掻き消された。
朝食の全てを吐きだしてしまった聖は数回咳をして息を整えると、手足が汚れていないか確認して、これ以上匂いが広がらないようにビニール袋の口を縛る。幸い洗面器には匂いが移っていなかった。
さてこれをどうしようかと思っていると、綾乃が片手を差し出してきた。

「ほら。それ捨ててておくから――――――あんたはこれで口濯ぎなさい。匂いの元を断たないと消えないのよ。それくらい知らないの？」

相変わらず言葉に棘があるのだが、この行動には驚いていた。
まさか綾乃が聖の吐瀉物の始末を自分から名乗り出るとは思っていなかった。いくらビニール袋が汚れていないからとは言え、普通好意の欠片も無く罵倒だけする嫌われている存在なら、そんな役は嫌がるはずだ。それが綾乃ならばとても嫌がると思っていた。
なのに綾乃はビニール袋をしっかりと握る。そしてコップに注いだ水まで差し出してきた。気が効いている。「え？　あれ？」と思っていると、綾乃はさらにビニール袋を取り出して二重にしてゴミ箱に入れた。その後はちゃんと洗面台で手を洗っていたし、保健室担当をされている先生が使っている机に今あった要件を書いて手紙にしていた。
一通りのことが済むと、また聖の元に戻って来た。

「濯いだのね。じゃ、コップと洗面台を渡しなさい。――――ったく、なんで私がこんなことをしなくちゃならないのかしらね。このクズ」
「ご、ゴメン……」

確かに綾乃の言う事も一理ある。そんな関係でもないのに、ここまで世話をかけてしまった。まだ出会ってから三週間も経っていなくて、そこまでキャッキャウフフな会話もなく、むしろトラウマを植え付けられたというのに。
いや、もしかしたら綾乃はその件を実は申し訳なく思っているのではないだろうか。

「このクズ。今度やったら蹴り殺すから」

洗面器を洗面台に叩きつけるようにして入れて綾乃はお決まりの暴言を高らかに言った。
またか。と少し落ち込むが、今さっきしてもらった恩を忘れるわけにはいかない。聖は「あはは」と苦笑いを浮かべた。
浮かべられた苦笑いを見下ろしながら「何なのコイツ」と呟き、綾乃は元いた場所に戻る。
今まで綾乃は聖が横になっていたベッドの脇に椅子を出して座っていたのだ。
ということは綾乃は聖が起きるまで待っていたというのか。時計を見る。一時限目はすでに終わっていた。二時限目に突入している。そんな時間になるまで綾乃はここに居続けたというのか。
解らない。月波綾乃という少女がさらに不可解になってきた。

「――――――大河先生と戦ったんでしょ？」

綾乃が口を開く。椅子に座ってからすぐだった。

「え？　あ、ああ」

「どうせ負けたんでしょ？　大河先生、魔術でも使ったんじゃないかしらね」

「いや、大兄ぃ――――大胡先生は僕の兄弟子だから未だに勝てないだけ……って、魔術だって？　魔術ってあれだろ？」

「そう。一昨日あんたが見た世界で、死にかけるまで攻撃された奴よ」

灰色ローブの男――――実は聖と同じ高校生なのだが、その時攻撃法として使われたのは魔術だった。炎を操り、魔術が使えない聖を苦しめた。

再びトラウマが思い出されそうになったが、グッとその場で押し留めた。

「魔術って、この世界っていうか、現実っていうか――――あの空間でしか使えないんじゃないのかい？」

「そこについての説明はされていないのね。――――使えるわよ。ただし制限がつくけどね」

綾乃がシャツのポケットから出したのは一枚のカード。白いカードには銀色の装飾が施されている。

昨日大胡教師が見せてくれたカードの一枚に似ている。だがそれより装飾が豪華で煌びやかだ。文字が読めた。『レイ・バースト』とあった。

「シルバーブリッツでこのカードを使うことが一番の真価を発揮するんだけど、この現実でも使えることは確かよ。制限っていうのは

発動と効果に追加されるわ。この現実の世界で発動するにはこのカードで発動するってこと。腕輪は必要ないし破らなくてもいい――――こんな感じにね」

聖の前に差し出された綾乃の右手の上には『レイ・バースト』がある。と、次の瞬間にカードが光り出し、そしてカードの上に光の珠を作り出した。

光の珠があまりにも美しく、綺麗だったためにトラウマを思い出さなくて済んだが、驚いて言葉が出なかった。

「これほどじゃないけど、カードの効果――――威力がかなり制限されてしまうわね。本来の十分の一ってところかしら。因みに今私が出しているこの珠の出力は百分の一以下ってところかしらね。触っても、暖かいって感じるくらいね」

「でも何のためにこの現実世界で魔術が使える様になったんだろう」

「考えれば解る事よ」

聖の疑問に鼻を鳴らして答える。

その顔はあまり誇らしげではなく、むしろ言いたくない様な表情で絞るようにして言った。

「シルバーブリッツ（あっちの世界）で戦うよりも、現実（こっち）世界で戦った場合、結局人の力だもの。戦力だけで簡単に制圧できるでしょ。だから一人で百人は制圧できるようにしたの。そうすれば簡単に手は出せなくなる。けど条約みたいなものがあってね、ここで魔術を使って攻撃出来るのはシルバーブリッツだけ。一般者は直接攻撃できないわ。けど間接的になら攻撃できるのだけれどね。――――――そうやって汚い手を使う輩がいるから、現実世界でも魔術を使える様にしたんでしょうね」

月が似合う少女　？（後書き）

やはり理由もなしに戦いたくない。普通がいい。だけどなぜこっちに意識が集中してしまうんだ。無意識的に左腕に巻かれた赤いリストバンド。そしていつの間にかシャツのポケットに入っていたカード『アーツ』が鈍く光った。

月が似合う少女　？（前書き）

殺す。殺し、奪う。魔術が敵を襲う。そして得た権利こそ――――！

月が似合う少女　？

考えてみれば当然だった。予想出来る答え。
シルバーブリッツの世界で倒せないのならば現実世界で戦力で制圧してしまえばいい。簡単なことだった。だからその対策として現実世界で魔術が使えるようにした。だがあまり現実世界で魔術は使えない。
暗黙のルールのようなものだった。当たり前だろう。今まで科学で証明できた事実だけを真実と捉えて生活を営んできた一般人に、魔術という非科学的で証明もくそったれもないことを押しつけられても混乱するだけだ。つまり必要のないものなのだ。
だがなぜそんな危険極まりないものを高校生に持たせるのだろうか。魔術が飛び交う戦争を勃発させて殺し合いをさせているのが真実。こんな世界でいいのだろうか。聖はそう思う。命を失うリスクを背負って戦ったことがない聖にとって、トラウマに近い光景となってしまったのだ。

「月波さんは、さ」
「何よ」

俯いたまま聖が問う。

「あのシルバーブリッツで、命をかけて戦って――――怖いって思った事はあるの？」

あまりこういうことは聞くべきではないことは解っていた。だが聞かずにはいられなかった。何より綾乃は聖をシルバーブリッツの世界に放り込んだのだ。ならば最後まで責任を持って質問に答えてもらうべきなのだ。

綾乃は聖の顔を見ながらその質問に数秒について数秒考え、溜息を吐くように答えた。

「無いわね」

多分そうくるだろうと思っていたが、本当にそう答えてきた。それも迷いが無い表情(かお)で。

聖はそんな綾乃に少しの恐怖と驚きを覚えた。

「何で？」

問う。今度はノータイムで綾乃は答えた。

「恐怖とか、感じる暇がなかったから。相手が向かってきて、炎やら水やら氷やら岩やらが飛んできたわ。けどそんなもの私に届く筈が無い。相手の攻撃が終わった直後に相手を消していたから」

「ちょ――――ちょっと待って。それって……」

綾乃への恐怖が増す。まさかとは思っていた。なるべくそうでは無いと思いたかった。そんな非人道的な行いを、彼女がするわけがない。と。

だが事実は聖の思いを残酷に突き放した。

「殺したわ。そこに何も躊躇はないわね」

信じたく、なかった。やはりシルバーブリッツとは殺し合いの世界なのか。

「詳しいことは大河先生に聞くのね。小泉でもいいけど」

落胆する聖に冷たく言う。冷たい態度はシルバーブリッツの世界を生き抜いたからこその経験からくるものだろう。
これ以上何も言う必要はない。言っても今の聖は受け付けない。
そう判断した綾乃は保健室を立ち去ろうと椅子から立ち上がった時だった。

「聖くん、大丈夫？」

保健室に一人の少女が入ってきた。聖にとっては今朝に合う筈だった先輩だ。いや姉と言っても過言ではない。

「雪歩姉ぇ」

俯いていた聖がやっと顔を上げた。そこには雪歩が立っていた。無敵武道部の部長で、聖が小学生の頃から可愛がってもらった姉のような存在。
雪歩は意識が戻って起き上がっていた聖を見て安心し、その脇で今立ち去ろうとしていた綾乃を見て、再び聖の顔を確認してハッと不安そうな顔をして駆け寄った。

「大丈夫？　まだ顔色が悪いわよ。大胡先生にも困ったものね。まさかこんなに聖くんをボコボコにするなんてあたしも思っていなかったから。後であたしが大胡先生に本当の理由を聞いてくるから。もしくだらない理由だったら聖くんの代わりにボッコボコにしてあげるから安心して。だから今は休んで」

まるでマシンガンのような呂律の早さに驚きながら、聖はいつもの顔に戻って雪歩の危機迫った表情に圧されていた。ここまで心配するほどだったのだろう。

「い、いや……雪歩姉ぇ、僕は大丈夫だから。大胡兄ぃを責めないであげてよ」
「え。でも大胡先生が勝手にあたし達の朝練遅めて聖くんをボッコボコにしてたんだよ？　聖くんが良くてもあたしが納得できない。それに部員全員が今朝の事を疑問に思ってるからね」

雪歩は無敵武道部を束ねる部長なのだ。ならば部長として今朝の事の詳細を明らかにして部員に伝えて納得させなければならない。そういう立場なのだ。それは聖も理解していた。
その一方で聖はなぜ今朝大胡教師が組手を申し込んだのか、理由を知っている。だがそれを雪歩に明かしていいのか疑問だった。
一応確認しておこうと思い、隣に立っている綾乃を見上げた。
そして一瞬で悟った。この件、つまりシルバーブリッツを他言してはいけない。雪歩が近くにいるから口には出せないものの、それを目で語る綾乃は睨みを利かせて見下ろした。恐ろしかった。『このことを他の人に少しで他言したら蹴り殺す』と言っているような目。聖は一瞬動けなくなった。

「ほ、本当に大丈夫だから。大胡兄ぃもお婆ちゃんから戦術を教わった一人なんだし。久しぶりに僕の実力を知りたかっただけなんだ。でも勝てなかったけどね」
「当たり前でしょ。大胡先生にはあたしでさえも勝てないんだから」

大胡教師は雪歩とも何度か組手をしたことがあるのだが、全てを大胡教師の圧勝で終わらせている。
そんな大胡教師に立ち向かっても雪歩に勝てない聖は当然勝てないのだ。が、それを覆すようなことが起きた。聖が危惧していたこと。意識熔暗（CFO）が起きたのだ。
意識熔暗（CFO）は主に発動者の意識が朦朧とし始めてから始まる。それと同時に激しい戦意を抱えていないといけないのだが、その影響で

破壊衝動に意識が浸食されるのだ。浸食に負ければ理性が弾け飛び痛覚が消え失せて破壊を繰り返す。大胡教師は聖の新の力を計りたくて意識熔暗（CFO）を発動させたのだが、その圧倒的な力に全力を以てしても危うかった。それほどの潜在能力を秘めているのだ。

「とにかく。僕は大丈夫だから。雪歩姉ぇは心配しないで？」
「そうなの？　本当に大丈夫なの？」
「うん。平気だよ――――――――って雪歩姉ぇ。授業は？」

今になって気付いた事だが、この時間は授業中なのだ。綾乃は自主休校を宣言してここにいるのだが、雪歩の場合は抜け出してきたに違いない。気配を消す技術を学んでいた記憶があった。それによって教師の目を盗んで教室を抜け出したのだろう。

「うん。抜け出してきた。そろそろ戻らないとバレちゃうから戻るけど――――――」

教室に戻る姿勢を見せたところまでは良かったのだが、そこで今まで聖の隣に立っていた綾乃を見て、聖を見る。ほほう。と何やら怪しい表情をすると、

「――――その子一年生だよね？　何、彼女？」
「ぶっ――――――！」
「なっ――――――！」

爆弾発言投下。聖が驚いてたじろぎ、綾乃がとても嫌そうな顔をして聖を見下ろした。のだが、綾乃の顔は少し赤かったような普通だったような――――

「ち、違うわ！　誰がこんな人間のクズみたいなゴミと、一生を共

にしないといけない運命みたいなこと言ってるのよ！　断じて違うわ！　絶対に！」

罵倒、怒号、侮蔑。そこまで言わなくてもいいじゃないかと聖が少し泣きそうになる。聖も少年だ。歳が近い少女にここまで貶されては泣きたくなる。

だが綾乃の目の前にいる雪歩はなぜか嬉しそうな顔をしている。綾乃の態度が可愛い。とかそう思ってはいないだろう。年下をいじって楽しむ趣味はなかったはずだ。

ならなぜ笑っているのだろう。そう思っていると雪歩は「うふふ」と口にして笑いながら聖の隣側に――――――綾乃が右側に立っているので雪歩は左側に移動して――――――立った。

「そう、それは良かった」

その一瞬で雪歩の笑みは不敵と余裕に変わった。そこまで予想していなかったのだろう。聖だけでなく綾乃も異変に反応した。

「な、何よ……」

呑まれまいと空元気に近い威勢を張る。

だがそんなものの強度と耐久性は雪歩にとってはティッシュペーパー程度と言っても過言ではない。簡単に破いて燃やす程の威力を誇る爆弾を投下した。

「だって聖くんは将来あたしと結婚するんだもんね。小さい頃からの約束だんもんね」

「はぁッ！？」

「なぁッ！！」

聖が吹きだし、綾乃が今度こそ顔を赤くした。

「ちょ、ちょっと待って雪歩姉ぇ。雪歩姉ぇとは三年ほど会ってないけど、僕が小学生の時かな。そんな約束したんだっけ？」

「勿論。指きりまでして、おもちゃだったけど指輪を左手の薬指に指輪をはめてくれたじゃない。将来結婚しようね。って語尾にハートまで付けてくれちゃって。あの時の指輪はまだあるからね。いつだって本物をくれたっていいんだよ？」

聖の脳裏に膨大な量の情報が雪崩れ込んだ。混乱してパンク寸前まで追い込まれる。一体いつそんな約束をしたのか解らない。いや忘れてしまった。

雪歩が満足そうに聖の頭を撫でる。聖は情報の整理、また復元に取り組んでいるため雪歩の手に気付かない。

そんな二人を見ている綾乃の手がわなわなと震えた。顔が完全に紅潮し、口の端が引きつっている。今にも聖に殴りかかりそうな顔で睨む。

「へ……へぇ、あんたそんな約束してたんだ」

冷静さを取り戻そうと胸を張って言う。しかし雪歩のペースに持ち込まれ、頭に血が昇っていた。聖を「クズ」と呼べる余裕すらない。

勝ち目が無い綾乃はその場で黙るしかない。なので脚を動かした。

「このクズ。覚えておきなさい」

悪役ではないのだが定番の捨て台詞を吐き捨て、綾乃は聖を主に睨みながら保健室を飛び出した。

その顔こそ今まで見た事が無い。唖然とする表情の一つだった。

「聖くん、もてるんだ」
「え？　もてる？」
「もしかして自覚ないの？」
「やめてくれよ。いつもクズって呼ばれてクラスでは大変なんだから」

ああこれは重傷だな。と雪歩は聖の鈍さに呆れるものの、自分の聖への想いは確かなので微かに喜んでいた。

その後聖は二限目まで休んで三限目に教室に戻った。そしてクラスの雰囲気がおかしいことに気付く。
綾乃がいつもよりもご立腹で、すでに隼人がその犠牲者となったらしい。完全にお通夜ムードで、聖が教室に入った途端に綾乃の怒気が激しくなる。
クラス全体が思った。
緋之よお前一体何をした。そう言えば月波さん二限目までいなかったけど、もしかして何かあったとか。そして怒らせたのか。余計なことを。
クラスが一つとなり、聖が綾乃への謝罪を空気が要求した。だが聖は綾乃の睨みに当てられてろくに動けなかったという悲惨なことになっていた。

SILVER　BLITZ

四限目が終わり、昼食の時間になった時だ。
聖はいつもどおりの朝に作った弁当を開いた。隼人が高確率でおかずを奪いに来るのだが、今日はそれがなかった。理由は三限目にあった。雪歩の問題発言による謎の憤りで、今にも爆発しそうな綾乃に隼人が馬鹿を行ったところ、瞬時に教室の後ろにあるロッカーの上に叩きつけられ、追い打ちに用いられた彫刻刀で衣服を壁に張り付けられた。隼人は衝撃で完全に意識を失っている。教員まで「南無阿弥陀仏。成仏しろよ」と合掌して一礼した。
昼休みになっても意識が戻らないのならそのままにして置いた方がいいだろう。と判断した聖は弁当を広げた。水筒から茶を注ぎ、一口含んで食事をする準備を整えた。塩昆布を炊いた米の中心に置いておいたので湯気で水気を取り戻し、塩気を米に撒き散らしている。この味は好きだった。
そんな米を箸で取り出し、口に放る。何回か咀嚼して飲み込んだ。そしておかずに箸を進めようと手を伸ばして――――――

『図書委員会から呼び出し連絡。あー、図書委員会から緊急で呼び出し連絡。以下の生徒は図書室に来るべし。五分以内だ。以上』

校内放送のスピーカーは教室の黒板の上にある。なのでどこにいても包装が聞こえるようになっていた。当然昼食を楽しんでいる聖の耳にも届いている訳で、今口に放り込もうとしたミートボールが箸からポロリと転げ落ちた。
そのミートボールを見事に箸で掴み、口に放り込んだのはいつの間にか復活した隼人だった。制服には彫刻刀による穴がいくつも開いていた。

「一体全体何やったんだよ緋之。今の小泉さんだろ？　あの人から呼び出し喰らうなんてよっぽどのことなんだぜ」
「え？」
「ま、死んでこいよ。骨は拾ってやるから」

そう言って親指を立てる隼人を殴りたくなった。後ろに張り付けにした綾乃の気持ちが解らなくもない。と、綾乃に共感を持った聖が綾乃を見ると、やはり綾乃は横目で聖を睨んでいた。
やはりここは五分以内で図書室に行くしかない。昼食を諦めて弁当箱に蓋をした。

そんな聖はあまり乗り気ではない両足を引き摺るように向かった先はやはり図書室だった。五分以内というので最短距離で行けるルートを検索してゆっくりと向かう。最短距離なだけにゆっくりとしたペースでも一分の余裕を持って到着することが出来た。
図書室の扉には札が提げられていた。『整理中につき関係者以外立ち入り禁止』というもので、つまり聖は通ってもいいということになる。
話はどういうものなのかは予想できている。あのシルバーブリッツという魔術戦争のことについてだろう。殺人についてなど興味が無い。武道を嗜む側としては殺人に協力したくはないのだ。

「失礼します」

図書室の扉を数回ノックして入る。返事は待たなかった。
相手も返事をするつもりはなかったらしい。特に整理もされていない図書室の中心に設けられている丸テーブルには、現在の図書委員長である小泉勝が座っていた。

「災難だったな。大河先生と組手か。――――――俺は魔術を使わないと勝てないけど。なるべくやり合いたくない相手だな」

勝は苦笑いを浮かべて言った。

そんな勝を前に扉を閉めて図書室の丸テーブルまで歩く。

「小泉先輩は大兄ぃ――――――大胡先生と組手をして……いや、魔術で戦ったことがあるんですか？」

「いや、無いよ。それよりも座ってくれ」

勝は自分と対する位置に聖に座るように指示した。大胡教師のこともある。聖は勝も警戒対象にしていた。何より図書委員会で一番警戒すべき人物こそが小泉勝なのだ。常に一般平均を軽く超越した思考と戦略で委員長になり、シルバーブリッツで戦ったのだと言う。

「今日、月波に会ったんだって？」

「ええ。二限目に見舞いに来てくれました」

「そこで色々聞いたんだろ？　シルバーブリッツのこと。いや、昨日の夜に大河先生に話を聞いているんだっけ。基本は聞いているんだよな」

「一応は」

「シルバーブリッツで何をしているのかも？」

直球な質問。二限目に綾乃から聞いた話。それこそ聖が信じたくない無いようだった。少し黙った末にゆっくりと首を縦に振る。

「殺人を犯している。と聞き及びました」

直球な質問には直球な答えで返す。

すると思いがけないことが起きた。勝がそれを聞くとやるせない

顔で顔を顰めたのだ。昔の事を思い出して後悔しているかのようだった。勝だったらもっと違う反応をして否定をするかと思ったが、意外な一面だった。

「必ずしも、殺してるって訳じゃないんだ」

十秒後、絞りだしたような声から出た答え。

「シルバーブリッツでの勝利条件はいくつかある。相手を戦闘不能にすることが絶対条件なんだけど、そこから枝分かれにいくつものも条件が出る」

「例えば？」

「一番基本的なのは相手の意識を失わせること。そして相手の腕輪を壊す事もそうだ。意識を失えば行動できないし、腕輪を奪えば魔術は使えない。――――けど月波は相手を殺してしまっているようだけどね。これは本当にどうしようもない時とか、それはもう殺してしまうしか他の方法はない」

やはり認めた。苦々しい表情を浮かべても無駄だ。所詮こういう集団なのだろう。人の命を奪う事に何の躊躇いが無い。愉しんでいるような最低な輩が集まっている。狂っているのだ。

「やっぱり殺人なんですね。――――それで、殺された人はどうなるんですか？　死んだら必ず親や関係者が悲しむ。それすら知らされないなら警察に捜索願を出される。でも最近、いや今までそんな頻繁に高校生が死亡するニュースなんて無かった。つまり隠蔽されているってことですよね。何で一般人に伝わらないんですか？」

大胡教師から説明を受け、その時から気になっていたことだ。

いやそれ以前に殺人に加担するわけにはいかない。祖母から毎日

のように言われているのだ。人を殺してはいけないと。その命を奪ってしまうと自分も相手も不幸になってしまう。だから命を取らず、守ってほしい。それだけは必ず守ってほしいと。
聖もその通りだと思った。なので命を奪いあうこの連中を許すわけにはいかないのだ。
そんな聖を前に、勝は苦しそうに言った。

「緋之はあまり知らないようだから言っておく。シルバーブリッツで戦って死んでも、この世界では死んだ事にはならないんだ」

耳を疑った。意味が解らない。
その意味を補うために勝はさらに続けた。

「傷や衣服が元通りに治っているのがそれだ。だから月波がどれだけ他校の生徒を殺そうと、戦闘が終わった後、この現実世界ではその殺された生徒は生きていることになる。ちゃんと命を持って戻ってこれるんだ」
「え……？」
「まぁ確かに殺した時の罪悪感はあるけどな。シルバーブリッツではもう一つの命を与えられたと考えれば解りやすいだろう。戦闘開始と同時に与えられ、戦闘終了と同時に返却。だから元々の命に影響はないんだ。――――だからって開き直るつもりもないけどな。それと、殺された生徒は戻って来た以降、シルバーブリッツを辞めさせられる決まりになっている」

少し驚いていた。
だが説明を受けてみれば「そうかもな」と思えてしまった。何より非現実的な世界を見せつけられたのだ。そういう現実世界では絶対不可能なことが起きてもそこまで不思議ではないのかもしれない。
もしかしたら綾乃は聖のようにシルバーブリッツとして戦うこと

を嫌がる生徒を解放してやっているのかもしれない。ならばそこまで邪険に扱う必要はないのではないだろうか。

「ま、シルバーブリッツでの戦いはこんなところだ。今日呼び出したのは、魔術の属性とか段階(スペック)の説明をするためだ。――――これを見てくれ」

勝はYシャツの胸ポケットから数枚のカードを取り出した。

「俺達シルバーブリッツのカード補充場所はここだ。Yシャツの胸ポケットか、ブレザーの裏ポケットか。常に数枚手に取れるから、その中から五枚選択して腕輪にセット出来る」

勝はその数枚の内一枚を。そして鞄の中からクリアファイルを取り出し、数枚のカードを取り出した。　そのカードには見覚えがある。シルバーブリッツで使うカードだ。クリアファイルから出した数枚のカードはコピーしたカードのようで、色が少しぼやけていた。

「これを見て解ると思うけど、属性は全部で十ある。炎、水、風、地、草、雷、念、光、闇、闘、だ。これらの属性は変化と進化のパターンがあるんだが、例がこれだ」

クリアファイルから一枚の紙を取り出す。そこには『属性の変化と進化』とあり、一つの属性から枝分かれのような線がいくつも引かれていた。

「例えば炎属性。最初から使える技はファイアという小規模な炎なんだが、それを大きくできる。つまり簡単に言えば段階(スペック)を上げる事にあるんだけど、その段階(スペック)を上げた時に属性を変化させることが可能になる。それが変化と進化の二種類。このファイアの場合、変化

になる。大きくした場合の技名はフレイム。またはボム。というように炎の使い分けの変化だ。――――そして進化なんだけど、これは月波が使っているレイ、光属性なんだが……」
「それってもしかして、レイ・バーストとか？」
「そう。それだ」

進化の覧を指差し、そこにレイがあるか確認する。

「進化は技名の後に特徴が刻まれる。月波のレイが進化した形。レイ・バースト。他にもレイ・シールドとかあったな。まぁレイは俺もあまり知らないんだよな。威力は高いんだけど使い辛くてな。この高校で使ったことがあるのは月波と……結構前の図書委員長だったな。六年前くらいかな。二人とも同じレイ・バーストでな。完全に使いこなしてる」
「そんな大変なことを……」
「あと段階（スペック）だけど、これはレベルアップ制だ。段階（スペック）を毎回ある程度に上げるごとに効果が出るんだ。三上げると属性の変化と進化が一つ可能になる。五上げると使える属性が増えるんだ」
「最初だと制限されているんですね」
「そう。だから段階を上げていくうちにその制限が解除されていく。緋之はまだ段階がないから第一段階を目指す事になる。そして第三段階になると、使っている属性魔術が変化か進化をする。第五段階になるともう一つ使える属性が増える。その繰り返しだ」
「へぇ……小泉先輩は今、何段階なんですか？」
「俺は今、第十七段階だ」
「じゅ、十七……」

大胡教師から話は聞いていたが、やはりシルバーブリッツの戦いにはかなり長い歴史があるのだ。
そして聖も話を聞いている内に、シルバーブリッツの戦いという

認識を改めていった。確かに殺し合うが命は失われないのだ。もしかしたら健全ではないものの、スポーツと同じなのかもしれない。
しかしまだ解らないことがある。ルールやルーツ、魔術での戦いよりももっと気になることだ。

「あ、あの……」
「ん？」

今までの説明について何か質問があるか勝が聞くはずだったのだが、聖が先に聞いていた。

「今までの説明とは何の関係もないっていうか、いやそもそもの原因というか本質というか。そういうのを聞きたいんですけど。いいですか？」

今までの態度が一変し、緊張した面持ちとなった聖を見て勝も何かくると思ったのだろう。気持ちを切り替えて臨む。

「ん、いいよ」

許可を得たので発言する。
今まで覚悟がなかった。大胡教師や綾乃に聞くにも覚悟が足らなかった。情報が足りずに自分だけで判断するには怖かったのだ。
命のやり取りをする場なのだ。当たり前だ。
だが今なら聞ける。勝は正直に応えてくれる。今なら解るのだ。

「先輩達、シルバーブリッツは何のために戦っているんですか？」

戦うためには理由が必要となる。必要としないものは狂っているか愉しんでいるかのおかしい者達だけだ。

だが目の前にいるシルバーブリッツ達はそんなおかしい者達ではないと思えてきたのだ。

必ず理由がある。そう信じたい。

「俺達シルバーブリッツが戦う理由？」

勝はそれだけは迷わずに即答した。強い意思を持って。揺るがない強い意思こそ、この高校を動かすべく必要とされている物。

「それはな――――――――――――」

月が似合う少女　？（後書き）

強い意志こそ絶対者の証。高校を勝利へ導く強者。戦う理由は高校を思うからこそだ。
そして少年も強者の一人となるべく、その一歩を踏み出すことになるだろう。それこそ運命。その高校を大きく動かすことになるべく、投じられた小さな石。それは後に大きな波紋となって魔術世界を揺るがすだろう。

月が似合う少女　？（前書き）

足手まとい。そうそう呼ばれたくない屈辱的な呼び名。それを今回授かってしまうことになる。だがどうしようもなかった。本当に足手まといなのだから。

月が似合う少女　？

こうなるはずではなかった。自分ではそう思っても事態は残酷に事実を突き付けた。

目の前に立つ小泉勝は唖然とし、目の前で跪いて自分の才能の無さに絶望する少年を見下ろしていた。

「けどまさか、本当に何もうまくできないんだな」

苦笑いを浮かべても事態は何も進まない。

つまりこういうことだった。その日の放課後に魔術の体験をさせてみようと、勝は聖を図書室に呼び付けたのだ。図書室には再び『整理中のため関係者以外立ち入り禁止』の札をかけておいた。ただ昼休みと違う点は、図書委員会の委員が図書室に入ってきても勝が今どこにいるのかを知らせるために図書室の中心にある丸テーブルに一枚の紙を置いてきた。その紙には大きくSBと書かれている。

SBとはSILVER　BLITZの略である。頭文字で使用中という意味だ。

それを見れば勝が今どこにいるのか委員なら誰でも解る。なんと本の中にいるのだ。

まさかこんなことまで出来るとは思わなかった。勝が取り出したのは書庫にありそうな古い本で、背表紙もボロボロだった。何をするかを見ていると適当にめくったページを開き、左手に装着した赤いリストバンドを近づけた。驚いた。それだけで赤いリストバンドはシルバーブリッツで使用される腕輪に変化したのだ。

そして気付いたらここにいた。一面真っ白な世界。そう言えば勝が適当に開いたページも空白だった気がする。いや、中身が全て空白だった。

訳が解らず唖然としていると勝が現れて笑っていた。

「ここは本の中だ。魔術の練習、訓練はここで皆するんだ。どんな高威力な魔術を放ったとしても、ここでは何も壊れないからな。やりたい放題できる」

便利にも程がある。呆れていると、左手に少しの重量を感じた。それを見ると、胃が痛くなった。

「またこれを付けることになるなんてな」

魔術を発動するために必要な道具、腕輪だ。カードを四つに破ると珠になるので、それを填めて初めて魔術が出る。

だが聖が綾乃からもらったカード『アーツ』を珠にして腕輪にはめても、魔術が発動することはなかった。ただもらったヒントは『シルバーブリッツではあまり使わないマイナーな魔術』だけだったので、中々その意味を理解するのに難があった。

理解できたわけはないのだが、どうやら一昨日のシルバーブリッツで聖が追い詰められた時、意識熔暗（CFO）を発動したというのだ。そして同時に『アーツ』の魔術を使用して、追い詰めた相手を殲滅したらしい。

そんな聖が基本的な魔術を使ったらどうなるのか。という疑問と基礎を教えたかった勝の要望で、二人は本の中に入ったのだ。

結果はすぐに解った。

「な、何で……何も使えないんだ」

そう。何も使えなかった。計十ある属性の中から基本の技を発動できるカードを破って珠にして腕輪を前に翳す。勝は「基本は念じれば出る」と言っていた。

だが出ない。何も出ない。いや出る事は出た。炎属性の基本の『

ファイア』を使う。だが指先から火花しか出ない。水属性の基本の『アクア』を使う。だがまるで如雨露から注がれた水のようにチョロチョロと指先から出ただけだ。
他の属性に至っては酷いものだった。雷属性の『サンダー』は静電気が発生して聖の髪全てが逆立ちになり、地属性の『ストーン』は制服の袖という袖から無数の小石と砂が流れ出た。
そして聖が使いこなしていたという闘属性の『アーツ』だったのだが、無反応に終わった。
これは酷い。勝が今まで見て教えてきた中でも一番酷かった。

「あー……何だ。緋之、そんなに落胆すんなって。たまにはこういうこともあるさ」

ハッハッハと笑う勝の気遣いを余所に、聖は自分の無力さに嘆くだけだった。

「小泉先輩。やはり僕には無理なようです。シルバーブリッツから外してもらえませんか？」

勝が見てきた中でも、不器用でもここまで酷くはなかった。一つだけなんとかまともに使える物を見つけて只管練習する。まともに使えると言っても魔術として成り立っているという意味で、火花を出したり静電気を発生させた程度では魔術として成り立たないのだ。
このままでは足を引っ張りかねない。いや確実に引っ張ると判断した聖は一刻も早い辞退を申し出たのだが、勝は苦い顔をして首を横に振った。

「悪い。それは出来ないんだよなぁ」
「な、何でですか？」

このままでは怒りに狂った綾乃に後ろから殺されかねない。敵よりも味方を恐れてしまう。大胡教師から綾乃は強いと聞いている。それこそ聖よりも強いのだろう。足を引っ張りまくってミスを連発すれば、まず敵より味方からターゲットにされてしまう。

それを恐れたのだが、却下されてしまった。その理由ももっともだったのだが。

「シルバーブリッツはさ、常に一つの高校から六人以上いないといけないんだ。だから登録数は最低で六人。うちの高校でシルバーブリッツは俺と月波、鳴本、都竹、百合――――里宮な。これで五人。あと一人足りないんだ。だから、さ」

申し訳ないように苦笑いを浮かべる勝に何だか疑問を覚えた。

「でも何でそれが僕なんですか？　この高校――――いや僕の同級生ならまだ候補がいるはずです。そんな中で僕でなくてもいいはずなんだ。それなのに何の理由があって僕になったんですか？」

聖の言い分ももっともだ。才能の欠片も見られなかった聖を使うよりも、他にもっとましな才能を持つ一年生がいるかもしれないのに、なぜ聖に拘るのだろう。

「大河先生が頼んだからだ。絶対に聖がほしい。ってな」

「大兄ぃが……あの人は、僕を守るだとか味方だとか言って、なんでこんなところに突き落とすんだか。訳が解らなくなってきた」

大胡教師の行動の意味が解らなくなってきた。理由が不特定なのが理由だ。大胡教師は聖に何を求めているのか。本当の理由とは何なのか。

「それとあいつも頼んでたな。緋之だけはここに加えてほしくない。って」
「え？」

それは誰なのかは解らなかった。だが急に希望がわいた。そんな天使はどこにいるのだと思い、是非ともその天使の名前を聞いて感謝したいと心から思う。

「それは誰なんですか？」
「んあ？　月波だけど」

再び絶望の谷へ落とされる。しかもその他には奈落の底に繋がっている。テンションが急激に下がる。
綾乃の名がトラウマへとなっていた。聞いただけで落胆するまでになると、相当なものだ。

「絶対に足手まといになるからだ……やっぱり足手まといになったら殺されるんだ」

絶望を口にするたびにテンションが下がる。その場に蹲り、頭を抱えていた。いつから自分はこんなヘタレキャラになったのだろう。いや仕方が無い。「クズ」と呼ばれて戦場へ放りこまれたのだ。聖にとっては当然になっていた。
だが勝はそんな聖を見て不思議そうな顔をしていた。

「違うぞ緋之。月波はそんな緋之を邪見にしていなかった。むしろ――――絶対に戦いに参加させたくない。危ない目にはあってほしくはない。そんな顔で俺に相談してきたな。この二週間で初めてみたよ。月波のあんな顔」
「え？」

意外な言葉だった。あの綾乃が聖を戦いから遠ざけたとでも言うのか。
聖を危険な目にあわせた張本人が。

「冗談、でしょう？」
「いや本当だって。昨日お前も見たろ？　そんなことじゃない。って言った時の月波の顔」

昨日のことというのは、この図書委員会の全員がグルで聖を殺そうとしている。と聖が勘違いしたことだった。
その時聖の考えを真っ先に全力で否定したのが綾乃だった。見た事が無い顔だった。悲しそうで、寂しそうで、虚しそうで。初めて女の子らしい顔を見た。

「緋之がシルバーブリッツに入る事が決まった時からかな。月波の段階（スペック）が急上昇したんだ。もう主戦力に近いくらいにな。あいつにとってはとっても重要なことだったらしいな」

やはり信じられない。綾乃にとって聖が大切な存在であるなんて、絶対に。この三日間に「クズ」と呼ばれて「蹴り殺すわよ」が返事の綾乃が、聖をそこまで想っているなどとは。

「詳しい事は本人に聞いてみるといい」
「彼女にそんなこと聞けると思ってるんですか？」
「ごめん。俺でもできない」

綾乃の修羅に似た視線に睨まれれば大胡教師でも動けなくなるだろう。そんな綾乃に「どうして聖を大切に想っているの？」と聞く事こそ死を意味する。聖を「クズ」と呼ぶ以上、聖を話題に出すだ

けで地雷を踏むようなものだ。それなのにまるで恋話をふっかけるかのようなことはするべきではない。地雷だけでは済まない。確実に。

「悪いけど、こういうことだから。緋之はシルバーブリッツに参加してもらうことになっちまった。でも安心しろよ。お前は俺達が全力で守ってやるから」

勝手に話を進められた挙句に強制的に戦闘員にされてしまった。こうして魔術もろくに使えない聖は、シルバーブリッツへの道を歩み始めたのだ。

だがこれによって運命が大きく揺さぶられてしまった。その結果はまだ誰にも知る由も無い。

吉と出るか凶と出るか。まだ、まだ、まだ――――――

SILVER BLITZ

色々なことがあった。

本当に色々ありすぎて未だに頭が混乱している。平和を求めていたのに、いつの間にかこんな波乱な生活になってしまった。武道を嗜んで鍛えることを喜びとし、誰かを守れればいいと思っていた。なのに手にしたのは非現実的で非科学的で現代の技術ではどうやっても証明できないような力。魔術。シルバーブリッツ。

まだ完全に――――――いやまったく使いこなしていないのに、聖

も完全に戦闘員として登録されてしまったのだ。これで誰かを守れるのなら。と思っても今の聖の立場はどうやっても守られる立場なのだ。魔術を使いこなせない聖は足手まといのほか他ならない。絶対に味方にしたくないランキングの上位に入るだろう。なのに勝は快く聖の参戦を受け入れてくれた。人員不足だというのにこんな非戦闘員に近い聖を受け入れる事に何の迷いもない。

そんな勝に疑問を覚えた。もしかしたら本当は邪魔だと思っているのかもしてない。

けれど聖は勝を嫌いにはなれなかった。嘘を言っているようには思えなかったのだ。言っている事に絶大な説得力があり、信じたくなるような先輩。理想とする上司。

きっと勝なら聖でもうまくやれるような場を与えてくれるのではいか。

その日の無敵武道部の朝練習を終わらせる。顧問の大胡教師は来ていなかった。

雪歩を中心とする先輩達が聖を心配して気遣ってくれた。それが嬉しくてたまらなかった。今日は何かいいことがありそうだ。とシルバーブリッツのことを忘れて朝練習に励んだ。

元気を補充して教室へと向かう。今なら綾乃に何を言われても平気な気がした。

だが、現実は違った。

教室に入ると、雰囲気が変な事に気付いた。

原因はすぐに解った。いつもなら馬鹿をやって騒ぎ、皆に笑われて自身も楽しそうに笑っている隼人が大人しく着席し、苦い顔をしていた。そして一番の原因は綾乃だった。毎日この時間になると勉強を教えてもらうためにクラスの男女が綾乃に集るのだが、誰一人

として綾乃に近づこうとしなかった。まるで見えない壁に遮られているかのようだった。
だが聖はその壁を越えた。席に座っている綾乃の右に立つ。
「おはよう月波さん。昨日は有難う」
笑顔で話しかける。しかしここから違った。二日前なら舌打ちか睨んで黙らせるかするのだが、それがなかった。ただじっと聖を見上げていた。
教室の同級生は綾乃に近づく聖に気付かないふりをしていた。だが視線だけは二人に向けていた。
「どうしたの、いつもなら舌打ちするのに。今日は大人しいんだね」
「……あんたはそう思うの？」
「え？」
綾乃は威圧感を込めた雰囲気、つまり殺気が丸出しだった。いつものものとは違う。研ぎ澄まされた刃のような、人さえ殺しそうな殺気だ。
すると綾乃は右腕を上げた。来るか。と聖は身構えるが、それは思い違いだった。右腕は正面の黒板に向けられる。指が黒板の右端にある、マグネットで留められたプリントを指していた。この距離からなら肉眼で読める。
『図書委員会二年生、里宮百合子。一年生、月波綾乃・都竹ちさ・鳴本隼人・緋之聖は放課後に図書室に集合せよ』
また呼ばれた。会議だろうか。
いやただの会議なら綾乃がここまで大人しくしているはずがない。理由は綾乃がプリントに向けられた指を少し下げたことにあった。

プリントの下に委員長の名前がった。

『図書委員会委員長二年生、小泉勝――――――ＳＢ』

それだけで解った。周りはその意味を理解していないだろうが、今の聖にとっては解る言葉だった。

「お呼びがかかったのよ、足手まといクズ」

同時に『足手まとい』の称号をもらった。

小泉勝の名前の横にあるＳＢという文字。

それこそＳＩＬＶＥＲ　ＢＬＩＴＺ――――シルバーブリッツが始まると伝えているのだった。

月が似合う少女　？（後書き）

ついに始まる魔術戦争。
前回とは違う規模と迫力に、聖は思わず驚愕してしまう。
それこそ聖が在学する高校、神明高校が誇る力なのだから。

月が似合う少女　？（前書き）

暗闇で感じる殺気こそ、奴等シルバーブリッツのものだ。驚くべき人選で戸惑うも、その人数でやるしかないのだ。
聖の戦いがやっと幕を開ける。

月が似合う少女　？

つまりこうだ。放課後に戦争があるからＨＲが終わったらにすぐに来なさい。

簡単だったが、事態が簡単に済む話しではない。あのはしゃぐのが好きな隼人でさえ緊張した面持ちで一日を過ごしたのだから。だがその点は聖も同じだった。朝一限目からトラウマの光景が脳内にフラッシュバックして仕方が無い。そして意識熔暗（ＣＦＯ）を発動した時の激しい破壊衝動。自分を抑えられないほどの興奮と、相手を傷付けた時の嬉々とした高揚感。そしてその後の自己嫌悪。

そしてまた戦争が始まる。嫌な気分の隅に、また敵を傷付けられるという狂喜があったが、気付かないふりをする。

放課後、ＨＲが終わったら担任である大胡教師から「図書委員は必ずこの後に図書室に行くように」と注意があった。大胡教師は聖を見なかった。

鞄に私物を詰めると聖は周りを見た。綾乃はもう席を立ち、聖を一瞥して教室を出た。最後に隼人を見た。隼人はゆっくりと立ち上がり、聖の視線に気付いた。

「……おかしいよな」

「何が？」

隼人が呟くように言う。聖は聞き返した。

「普通はな、こんな早く次の戦いがあるなんておかしいんだ。必ず二週間以下の休みがある。月に二三回あるって聞いたけど、まさか四日目でこれだよ。どんだけ血を見たいんだかな」

自嘲気味に言った。不安そうだ。やはり隼人も怖いのだ。

「鳴本、大丈夫か？」

歩み寄って隼人の肩を掴む。隼人は動かなかった。動けないのだ。戦う勇気と覚悟がないのか。いや普通は無理なのだ。戦争時代ではないのに、普通の高校一年生にいきなり赤紙を突き付けられたようなものだ。覚悟なんて決まらないだろう。

だが隼人は頑張っている。必死に踏ん張り、事実に向き合っている。

「変だよな。本来ならお前を励ますのに……お前よりも魔術使えるのに、なんで俺がビビってんだろうな。恥ずかしいな、俺」

「そんなことあるか。鳴本は必死に頑張ってるんだろ？　立派だよ」

「……そんなこと言ってくれるの、お前だけだ」

隼人も隼人なりに悩んでたらしい。やはり普通の男子高校生なのだ。聖ただ一人が悩んでいるのではない。ならば共に助け合えるかもしれない。

「なぁ鳴本」

友人になりたい。いや、もっと良い仲に。

「今日の戦いが終わったらでいいから考えてくれないか？」

「え、何をだ」

「生きて帰れたら、僕の相棒（パートナー）になってほしい」

苦楽を一人で超えてはいけない。そこに誰かいてほしい。自分と歳も近い少年がいいと思った。

隼人は明るくて面白い。一緒にいて楽しい。なのでこの魔術戦争、シルバーブリッツで共に戦い、背を任せ合える相棒がいれば勇気が出る。

その意味を込めて提案したのだが、隼人は逆にげっそりとした顔で聖を見た。

「それ、何の死亡フラグだ？」

沈黙。

隼人はもしかしたら相棒（パートナー）は不必要なのかもしれない。

今の話は忘れることにした。この空気が読めない阿呆は放っておいてさっさと図書室にでも行くか。と鞄を担いで教室を出た。

「ちょ、ちょっと待てって緋之！　冗談だって！　悪かったって！」

背後で阿呆が何か叫んでいた。だが聖は歩みを止めない。

「戻ってきてくれよお！」

結局この阿呆――――隼人も鞄を担いで教室を飛び出して、聖を追い掛けた。

SILVER　BLITZ

図書室は途轍もない緊張感で溢れていた。まるで幾戦もの戦場を生き抜いてきた精鋭の戦士が、今新たな戦場に向けて武器を背負って移動しているかのようだ。
いや間違ってはいない。今から戦争に行くのは合っている。
図書室の入口には再び『整理中につき関係者以外は立ち入り禁止』の札が提げてある。なので部外者の介入はない。すでに図書室には六人の生徒と一人の教師が揃っていた。
中心にある丸テーブルには七人が座っている。奥から勝と百合子、時計回りに大胡教師、ちさ、綾乃、聖、隼人だ。しかし隼人はなぜか泣いていた。グスングスンと鼻を鳴らしている。先程の聖の仕打ちのせいだ。
少しやり過ぎたかな。と聖は反省するが、顔には出さなかった。そんな空気ではない。

「今日の相手は――――東所根高校だったね」

大胡教師が勝に確認をとる。勝は首肯した。

「そうです。去年の今頃にやり合いました。結果はこっちの圧勝で終わっています」
「ならいい。けど今年は去年みたいにはいかないかもしれない。解ってるね？」
「勿論です。作戦もありますので、勝機は十分にあります」

勝が断言する。勝が言うと説得力あるな。と聖は関心していた。
大胡教師が首肯したので許可降りたということだ。
そしてここから戦争が始まるのだ。

「皆。まさかこんな短期でシルバーブリッツが行われるなんて俺も初めてだけど――――――兎に角この戦い、俺に預けてくれ。まあい

つも通り人選は俺がするし、選ばれた奴は従ってくれればいいっていつものことなんだけどな」

勝が立ち上がって言う。百合子が差し出した一冊の本を受け取り、丸テーブルの中心に置いた。

「今から人選を発表する。尚、これはすでに大胡先生の許可を受けているので理由が無い限り否定はできない。覚えておいてくれ」

こういう説明は初めての聖に説明されているのだ。実際、勝は常に聖を見ている。その視線に秘めたる本質は何かまでは見抜けなかった。

「今日は四人で行く。相手は多分多勢を構えるだろうが、それが逆に墓穴掘ってるってことを教えてやる」

大胡教師と百合子が笑う。一年生は、聖とちさは苦笑いを浮かべるしかできなかった。それ以外、つまり綾乃は黙り、隼人はまだ泣いていた。

「まず一人目。要は俺だ。シルバーブリッツは相手の要を戦闘不能にしちまえば終わるからな。この時点で何通りの戦術が組めるんだが、相手はまたあの手で組んで来るから、俺が要になることが一番効率がいい。そんで二人目、月波。お前は攻撃に必須だからな。三人目は鳴本。理由は途中で話す」

「……了解」

「ひっ、そ、そんなぁ」

綾乃は相変わらず無表情で頷く。隼人に至ってはさらに怯えていた。涙は止まったが、今度は震えていた。

そして最後の一人。まず自分はない。と聖は思っていた。戦力外な聖がいても邪魔なだけだし、弾避けにもならないだろう。ここは勝と同じ場数を踏んだ百合子か、隼人よりも段階(スペック)が上なちさが妥当というところだ。

なのに。勝は何を考えてこんな人選にしたのだろう。大胡教師は何の根拠があってそれを受諾したのだろう。数秒後、聖は我が耳を疑った。

「最後、緋之な」

「はい？」

満面な笑みでそれに答えた。いや聞き返した。

有得ないおとが起きた。きっと聞き間違いだろう。最近とても疲れていたから。だからこれは是非とも聞き間違いであってほしいところなのだが――――

「いや最後。お前って言ってるんだよ緋之」

勝も満面の笑みでそれに応じた。死の宣告とはこのことだ。

ちさは「頑張って！」と両手を胸の前で握ってエールを送り、百合子は少し驚いて「わぁーお」と楽しそうに笑っていた。

「やったなこれで生きて帰れたら相棒になれるな！」

いつの間にか震えが止まっていた隼人が急にやる気を出した。

「頑張れよ」

大胡教師はただ一言。それだけだった。

くっ。と何とも言えない感情を押し殺そうとした。そして最後に

恐ろしいことを思い出した。ここ二日間に悪罵をいつものように浴びせ続けた綾乃の存在。何やら隣から異様な空気が漂って来ることから、相当頭に来ているだろう。と思っていた。

「あ、あの……」

油が指されていないブリキ人形のように、ギギギとぎこちない感じで綾乃を見る。

そして直後に失敗だったと悟った。

「あ？」

腕を組んで沈黙していた綾乃が少し口を開いたかと思えば出て来た言葉が「あ？」だった。まるで睡眠を邪魔された虎のような機嫌の悪さ。聖は兎のようにビクッと跳ねそうになった。

「あ、いや、あの――――邪魔しないようにするから」

「……ふん」

勝の言っていた拒否権は無いということでメンバー参加を拒否できない。なので邪魔しないということだけを約束して機嫌を直そうとしたのだが大失敗。さらに不機嫌を深めてしまった。

男子として情けないとは思ったが戦力になれないのは事実だ。せめて邪魔にならないように離れているか気配を消して後ろから奇襲しかできないだろう。しかし奇襲も一度が限界だ。そこまで接近するにはリスクが高すぎる。周囲全体に攻撃できる魔術を放たれてしまえば聖は一溜りもないだろう。

「都竹や里宮は今回外す理由は、今回の作戦には不向きだからだ。慎重性を高めたいのでこのメンバーで行く。ただし月波は派手にぶ

っ放して良しとする。鳴本と緋之は生き残れば良し。それじゃ行こうか」

丸テーブルの中心に置かれた本を開く。そのページには写真があった。正確に言うとページ全体が挿絵なのだ。夕方が終わる頃の森林。聖が戦った場所に似て――――いやここだ。聖はここで灰色ローブのシルバーブリッツに追いかけまわされて殺されそうになった。

その写真を見て勝が聖に説明を加える。

「緋之、ポケットにリストバンドあるだろ。出して左腕に填めるんだ」

確かに聖の紺のブレザーのポケットには赤いリストバンドがある。見ると全員同じ場所に入れてあるようで、右側の腰の位置にあるポケットだった。

綾乃と隼人が赤いリストバンドを填めたことを確認すると、自分もリストバンドを取り出して左腕に填めた。最後に勝が填める。

「では大河先生。行ってきます」

「ああ。無事に生きて帰ってきてくれな」

大胡教師はあまり元気とは言えない顔でそれに答えた。

「大胡先生」

聖が大胡教師に声をかける。大胡教師も気付いていた。やはり大人気なかったかな。と反省して苦笑いを浮かべた。

「大丈夫。俺がいなくても勝がお前を導いてくれる。だから、生き

て帰って来てくれ。これは俺の心からの願いだ」

いつもの大胡教師に戻っていた。昨日のようにピリピリとした表情はどこにもなく、弟を心配するような兄のような、いつもと変わらない優しい大胡教師。聖が安心して心を開いている兄。

「うん。行って来るよ」

力強く頷く。出発前にいつもの大胡教師の顔を見れた事が嬉しかった。勇気が湧いた。シルバーブリッツとも素手で戦えそうな気がする。

それを見届けた大胡教師が勝に「皆を頼む」と言う。勝は首肯してそれに答えた。

「では皆、構えてくれ」

聖も一度やったことがある。昨日勝に魔術の基礎を教わる時に本の中に入った時と一緒だ。赤いリストバンドを本の上に翳すだけ。しかし今回はその後にもう一つだけ追加されたことがあった。

「リストバンドをした手を突きだして、本の上で突き合わせるんだ。四人の拳を打ち鳴らす。それが契約なんだ。これから四人がシルバーブリッツとして戦いますっていうな」

「解りました」

赤いリストバンドをした左腕を見る。そして拳を握った。

後は勝の合図でそれを突きだす。

「さて、今日も勝つぞ！」

叫びと共に勝の左腕が動く。他の三人がそれに合わせた。
ガツンと四つの左拳が暗闇の森林の挿絵ページの上で打ち鳴らされる。
すると景色が一変した。視界が歪曲して螺旋を描く。
聖は三度目の体が引きずり込まれる感覚を体感した。

SILVER BLITZ

高台の上にいた。いや正確に言えば丘のような場所の上なのだが。
見覚えがある。最初に聖が降り立った場所だ。暗闇の森林をよく見渡せる場所だった。
暗闇の森林に足を踏み入れた聖。三日前と変わらず薄暗い所だ。そして空気が冷たい。聖にとってはトラウマな場所だ。だが心持は三日前とは明らかに違う。目的を持った戦いは聖の士気を強く鼓舞した。
暗闇の森林は盆地のようなところだ。今いる丘は岩の上にあった。大きな岩だった。幅約二十メートル程、高さ約二十五メートル程。聖を入れて四人が立つには十分にスペースがある場所だった。と、聖の後ろから勝が歩み寄って来た。「大丈夫か」と問う。やはりトラウマを気にかけているのだ。聖は苦笑いを浮かべて「大丈夫です」と答えた。
「俺達は毎回ここに飛ばされる。ここで戦闘をスタートさせるんだ」

森林を見下ろして、次に辺りを見渡した。
聖は今気付いたのだが、この暗闇の森林は盆地のようなステージだったのだ。今いる岩のような高台がいくつかあり、それを低い岩が塀のように並んで森林を囲んでいる。そして背後を見ると、そこは闇だった。果てしない闇が続いていた。まるで闇の中に島として浮いているような所で気味が悪かった。
すると勝が胸元のポケットからカードを引き抜いた。シルバーブリッツとして戦う際にはこのカードを核として珠にしなければならない。

「うん。今日も良いカードだ」

引きぬける上限は十枚。そこから五枚選んで腕輪に填めるのだ。勝の選択は早い。全てが手慣れていた。赤いリストバンドを左腕の手首ごと掴んで回す。すると赤いリストバンドは瞬時に腕輪に変形しているのだ。そこに今選んだ五枚のカードを珠にして入れる。一枚一枚縦横に一回裂くと珠になるのでそれを五回繰り返す。
すると残った五枚のカードはその場で砕け散った。風に乗って霧散する。
見ると綾乃も隼人もすでに選び終えたようで、手元から砕け散ったカードが粉になって零れていた。

「引けるカードは自分の経験だとか使いやすい、使い慣れているカードが優先されて回って来る場合が多い。大体八十パーセントってところか。引いてみるといい」

聖が今使いこなしている、または気に入っているカードとは何なのか不明で不安で仕方無かったが、まずは引いてみないことには始まらない。Yシャツの胸ポケットに硬質な何かが入っていることを確認する。摘んでみると一センチ程の厚さだった。

手が汗ばんでいる。それから一気に引き抜いた。
展開してみて、早速絶望する。

「何だよこれ……」
「え、ちょ、何これ」

十枚のカードを広げて呟くと、隼人も覗きこんで感想を述べた。
二人の顔色が変わった事で綾乃もそれを確認する。

「……クズばっかね」

まぁ仰る通りなのですが。

「んと、何だ。俺もこういうの初めて見たから……どうにもコメントし辛いな」

勝が苦笑する。
最後に聖が本気で泣きそうになった。
当然だろう。この手札の悪さを見て絶望しない者はいない。
バラバラなのだ。属性が六に割れていて、しかもその半分の五枚を闘属性『アーツ』が占めていた。練習ではろくに使えもしなかった『アーツ』が「使ってくれ」とでも言っているように五枚も現れた。
その他は練習で少しだけ使えた基礎のカードだった。

「と、兎に角組もうか」

勝の提案で我に帰る。組み合わせはろくに出来ないので、仕方が無いので『アーツ』全てを腕輪に入れた。戦力にはなれないことは解っている。だがそれ以外何もできないのだ。まだ段階(スペック)が第一にも

満たないのにいきなり魔術を使っても何もできない。

「それじゃ、始めようか」

暗闇の森林を前にして、準備が整った後輩を確認した勝が言う。

「て言うか、もう始まってるでしょ。相手はもう動いてる」

綾乃が岩から身を乗り出して言う。ハハハと勝は苦笑いを浮かべながら体を解す。隼人も手足を回して準備運動をしていた。聖も最低限のことをしておこうと脚を広げる。

「月波。好きにぶっ放していいぞ。あそこにやってくれ」

早速勝の指示が飛ぶ。指示した場所は森林の中央だった。

これから綾乃が何をするのか興味があった聖は、綾乃を背中を凝視した。一体あの華奢な少女に何が出来るのか。そう思っていたがそれは偏見だった。人は見掛けによらない。過小評価はしてはいけないものだ。

「……了解」

綾乃の腕輪にある中央の珠が光る。あの光には見覚えがあった。確か聖が保健室に運ばれて、見舞いに来てくれた時に見せてくれた魔術。光属性『レイ・バースト』だった。光属性の基礎は『ライト』で聖が練習で使った時には線香花火程度にしか出せなかったのだが、その真価を発揮できる術者が使うと、破壊力は絶大になると勝が語る。

右手を暗闇の森林の中心に向ける。そしてそれを放った。

光属性基礎『ライト』を変化させた『レイ』。そしてそれを二つ進化させた『レイ・バースト』だ。
つまり光線だった。ビームと言ってもいい。ただその太さは綾乃の身長の二倍は超していた。そんなものが高速で目的地の森林中央部へ命中した。
ステージの中心に巨大なクレーターを残す。木々を焼き払い、半径百メートルまであった障害物全てを破壊した。その余波は木々を難なく薙ぎ倒す。また飛び散った炎が木に燃え移り、沢山の光源を作った。

「よし、こんなもんだろ」

勝は満足そうに頷く。
聖が唖然とし、頬を少し火傷した隼人は頬を擦っていた。
綾乃はそっぽを向いていた。

「それじゃ始めようか」

そんな三人を見て笑い、本日二回目の開始を提案した。

「去年はこんな威力の魔術出せる奴なんていなかったからな。あちらさんも驚いてるだろ」

なんだか凄く楽しそうだ。

「緋之、ＭＰは覚えているな？」
「はい」

ＭＰとはそのまま、マジックポイントのことだ。誰でも解りやすいようにゲームのように呼んでいた。　高校によって呼び方が異な

るようだ。マナだとか、ＴＰだとか。
この高校でいうＭＰはまず第一段階になると四百ＭＰが与えられ、一段階ずつ上がると毎回五十ＭＰ上がる事になっている。今のところ上限が何ＭＰまで上がるのかは見つかっていない。

「ちなみに月波、今どんくらいＭＰ使った？」
「五十ＭＰ……」
「あれだけの威力だもんな。けど今から節約して使えよ？　スパートはラストで良いから」
「解った」

頷いて後ろの二人を見た。綾乃に比べれば聖はとても足手まといだ。隼人もそれなりに使えるらしいが綾乃には及ばないらしい。
なので綾乃の視線は痛かった。

「それじゃ俺は行くから。緋之と鳴本は月波から離れるなよ？　月波。いくら二人が使えないからって後ろから殺したり囮にして見放さないように」
「――――――チッ！」

変な音が聞こえた。

「あの馬鹿は事故だったってことじゃ、駄目？」
「おぅい！」

隼人を指差して何気なく危ない事を言う。なぜ聖でないのかは解らかったが。

「駄目だ。鳴本は出来る限り月波の援護と緋之を守れ。緋之はとりあえず生き抜くことを考えろ。で戦えるなら戦っていいぞ――――

――皆、生き残ったら大河先生に夕飯集ろうな！」

勝は爽やかに笑んで岩から飛び降りた。勝なら一人でも生きて帰れそうだ。

だが聖は人の心配をしている余裕はない。まず自分の身を心配して生き抜かなければならないのだ。

こんな無茶苦茶な世界で生き延びるためには相当な覚悟が必要となるのだが、聖にはまだそれがなかった。聖よりも段階だけなら隼人が上なのに、隼人ですら恐怖を抱いて戦場に立っているのだ。

勝が行ってしまったことにより、三人はその場に残された。あまり交流がないので話題もない。作戦を立てようにも聖よりも二人は戦力が上なのだ。出しゃばっては邪魔になりかねない。

と、その沈黙を珍しく綾乃が破った。とても不機嫌そうな声で――――いや実際に不機嫌なのだが、仕方ないと溜息を吐いて背後の聖と隼人を睨んだ。

「……馬鹿クズコンビ。小泉の命令だから仕方ないけど、私の邪魔したら次は本気で消しにかかるわよ。肝に銘じておく事ね」

冷たい言い様だった。だが言い返せない。

「じゃ、行くわよ。クズもせいぜい一人くらいは倒すのね」

そう言うと、綾乃も岩から飛び降りた。急斜面だったが滑って降りる事が出来る。緩やかなカーブを選んでゆっくり降りるのだ。

「気にすんなよ。やばくなったら俺もフォローしてやっから。――――俺に余裕があればの話だがな」

聖の肩を叩いて隼人も飛び降りる。

聖はどうしようもないので、二人に続いて飛び降りる。隼人も綾乃と同じように緩やかなカーブを見つけて滑っていた。すでに綾乃は三分の一を滑っている。

隼人は聖が途中で転ばないか心配で、常に背後に気を配っていた。転ぶと巻き込まれかねないし、だが受け止めてやるつもりだった。その予定だった。

「あ？」

必要が無かった。すぐに背後に気配を感じる。耳にカツカツと異音がする。まるで石と石を叩いているような硬質な音だった。音源はすぐに解った。

現代の牛若丸を思わせるような移動方法。すでに滑り終えて上を見上げている綾乃が唖然としていた。

「先に行く」

聖だった。聖は急斜面を滑っているのではない。文字通り飛び降りていた。ただ数回に分けて跳んでいるのだ。最初に降りた場所は岩の高台の上だった。岩というからには斜面に隆起している突起もあるし、突起と言う程ではないが盛り上がっている部分もあった。

それを蹴っていた。落下の速度を緩め、かつ確実に迅速に降りる。隼人が半分に差し掛かる頃には三分の位置までいて、大きく盛り上がっている部分に両足を付けると今までよりも大きく跳んだ。

「こっちの方が速いと思うんだけど。月波さんはどう思う？」

五メートルを超える距離から跳んだ。空中で一回回転し、綾乃のすぐ隣に着地する。地面に足を付けてもぶれず、着地した衝撃を膝を曲げて、足の裏から効率よく分散する。

綾乃は唖然としたまま何ともなさそうな顔をしている聖を見ている。するとやっと隼人が降りて来た。

「お前は化物かよ！　あんな高い位置から一気に飛び降りるなんてよぉ」

「え？　あの方が速くないか？　なんで鳴本はやらないんだ？」

「お前しかできねぇよ！　最初っからあの方法で跳び下りたのかよ怖くねぇのかよ」

「……全然？」

足への負担もないようで、平然としている聖の顔を見て二人は呆れた。聖は訳が解らなそうにしていた。

だが突然綾乃と隼人の表情が引き締まった。聖もそれを察する。

「すでにおいでなすったようね。――――私の一発を喰らってもまだ噛みついてくるなんて、少し生意気な連中ね。陳腐な分際でよくやるわ」

悪罵しても綾乃の顔は崩れない。ただ淡々としているだけだ。凛としているわけでもない。義務的なものとでも思っている訳でもなさそうだ。慣れている。それが一番しっくりくる。

「囲まれたのか？」

一方隼人は不安そうに慌てていた。それでもこちらの位置を察しさせまいと声を小さくしている。今更な事でもう遅いのだが。

「落ち着きなさい馬鹿。もう何したって無駄なのよ。敵の位置や数が解らない以上、無駄撃ちしてでも突破するか……」

相手の情報が未確定な以上、下手に動いてはいけない。勝からそう教わったのだが、綾乃はその決まり事を平気で破った。
絶対的な自信と破壊力。その二つを綾乃は兼ね備えている。ＭＰを無駄にしてでもこの状況を打破する気だった。隼人も腹を括ったようで、腕輪をしている左腕のシャツを捲り上げた。
すると聖が前に出た綾乃と隼人の肩を掴み、自分へ引き寄せた。二人は驚いてされるままにされていたが、気付いた綾乃が嫌そうに唸る。

「何すんのよクズ。速くしないとあっちから撃たれるのよ？　そしたらあんたまで死ぬの。嫌ならとっととその手を離して下がるか逃げなさい。邪魔なのよ！」
「そ、そうだぜ緋之！　ここは月波の言う通りだ。俺達に任せて下がっとけって」

隼人も聖の奇怪な行動に驚いて、肩を掴んでいる聖の手に手を乗せた。綾乃は聖の手に爪を立ててガリガリと引っ掻いている。聖の手に少し血が滲む。
しかし聖は手を離すどころかもっと力を強めた。「痛っ」と綾乃が呻く。隼人は顔を顰めた。
そんな聖を咎めるべく、綾乃は今度は顔面を殴ってでも下がらせようと拳を握った時だった。

「落ち付けよ二人共。無茶に撃っても無駄なだけだ」

ちょっと前まで優しい顔でキョトンとしていた聖とは思えない様な声が耳元でした。隼人は眼を剥き、綾乃は驚いて握った拳を止めてしまった。

「合計……三十って所か。この後ろの岩を覗いて全方位に展開、

その壁は薄いけど一人倒したところで他がカバーできるようになってる。距離は約四十メートル。扇型に開いてるから逃げても捕まってしまう。ここで迎え撃たないとな」

また二人は唖然としていた。今までこんなことは無かった。相手の数と位置を割り出すなんて高性能レーダーでも体内に搭載しているのか。

「緋之、お前……敵の数と位置が見えるのか？」

「気配だけだけどね。でもこれだけしか解らない……いや、全員魔術師、シルバーブリッツなんだろ。これから僕では到底敵わないんだろうな。だから二人で守ってくれるんだろ？」

「あ、当たり前だ」

聖の問いに隼人が力強く頷く。

「ふ、ふん…」

綾乃は鼻を鳴らしてそっぽを向いた。同意したのだろう。

「全方位に扇型で展開ね――――じゃ、穴開けてあげるから、馬鹿クズコンビはそこから逃げなさい。ここは私がどうにかするから。言っとくけど残るとは言わせないわよ。ていうか傍にいられると本当に邪魔。流れ弾で死んでも知らないわ……よっ」

綾乃の左腕の腕輪が光る。ふたたび『レイ・バースト』を放つのだ。左手の掌から光の弾が出現し、一回転したと思ったら目にも止まらぬ速さで左方向に飛んだ。それは地面を焼かない光線だった。細い糸、レーザーに思える。

細いレーザーは目測でも五十メートル程はあった。岩から二十度

までレーザーが薙いだ。綾乃は少し腕を動かしただけだったのだが、五十メートル先の位置では数メートルの被害が出ていた。これなら一人どころではなく五人は吹っ飛んだだろう。

「行きなさい」

これくらい何でもない。そんな顔をしている綾乃は言った。

「じゃ、任せたぜ」

「ごめん」

隼人と聖は綾乃が開いた道から脱出を試みる。同時に暗闇から一斉に動く気配があった。だが綾乃は今と同じようなレーザーを伸ばして行き先を塞いだ。気配が止まる。まるで逃亡中に先周りしていた警察官と鉢合わせしたかのように。

気配が一斉に綾乃に向く。それでも五人くらいはレーザーを潜りぬけていた。でもそれくらいならあの二人でもなんとかできるだろう。

綾乃は止まった獰猛な気配を全身に感じていた。いや、殺気だろう。殺気なら簡単に読み取れる。

そして暗闇に向かって言い放つ。

「で、これだけの人数でいいわけ？　もっと人数増やしてもいいのに」

ザワ……と草木が揺れる。

「一体どれだけの大馬鹿が私の相手になるのかしらね」

月が似合う少女　？（後書き）

目の前が紅い。血が目にかかったのか。いや違う。目より上は怪我をしていないはずだ。緊張と興奮が入り混じっていたのに今はとても冷静になっている。

でも許せない。あいつらだけは、絶対に許してやらない。

月が似合う少女　？（前書き）

闇夜というのは姿と影を消してしまう。それに紛れて相手も遠くからこちらを見ているのだ。気に入らない。そんな卑怯な輩に仲間達を傷付けられるのはたまらなく腹が立った。
ならばこちらもそれに乗じて攻撃を行うまでだ。

月が似合う少女　？

やれるかどうかはまだ解らない。だがやるしかない。
この暗闇を走るのは二回目だった。あの時は必死に――――いや今も必死なのだが、走っていた。命を落とすかもしれないという不安は計り知れないものだ。体に何か所も火傷を負い、泥塗れになりながらも逃げ回った。反撃に出るが失敗に終わる。その後は完全に追い詰められた。
もしかすると今回もそうなるかもしれない。隼人が倒れれば聖に立ち向かう術が限られてしまう。隼人がいてもそこまで立ち向かえる戦力にはならないのかもしれないのだろうが、これでやるしかないのだ。

「止まれ！」

先導するために先を走っていた隼人が急ブレーキをかけ、聖に叫ぶ。聖はそれに従って土を靴で削り飛ばしながらも止まった。すると隼人が聖の後ろに立つ。
隼人が立つ瞬間、背後に灯りが見えた。火球だった。あの時のトラウマが思い出され、全身に鳥肌が立つ。だが隼人がすでに動いていた。シャツを捲っているので腕輪が光ると目立つ。右から二番目が光っていた。

「ロック！」

地属性の基本の一つ、『ロック』だ。聖が『ロック』を発動すると制服の裾から砂利と砂が大量に零れ出たものだ。
だが隼人の『ロック』は違った。発動した瞬間に右足で強く地面を踏みつけた。すると隼人の目の前に高さ二メートルを超す大きな

岩が地面から競り上がった。生えたといってもいい。
物凄い勢いで競り上がったそれは簡単に火球を打ち消した。
「そんくらいなら打ち消せるんだよ！　第四段階（スペック）舐めんな！」
打ち消した際に散る火花が隼人を照らす。珍しく頼もしい隼人に礼を言おうとするが、また後方から光が見えた。
「左だ、鳴本！」
「あいよっと！」
火球がまた迫る。今度は左足で地面を踏んだ。『ロック』が発動されて分厚い岩が競り上がる。
「今だな。逃げるぜ、緋之」
『ロック』が消える前に少しでも距離を開かないといけない。防壁を上げたせいで僅かなタイムロスが出たのだ。これを取り戻さなければならない。
だが相手はまた火球を撃って来るだろう。しかも聖が読み取っていた追手の人数は複数いた。追撃と追尾に分かれられればあっという間に追い付かれてしまう。これをどうするのか隼人に聞こうとするが、それは無駄な心配だった。
「あらよっと」
左腕の腕輪の珠が光る。再び『ロック』が発動されたのだろう。
しかし今回は先程の競り上がる大きな岩ではなかった。数回に分けられて発動されたそれは細かく地面から競り上がった。まるで氷柱が逆に生えて来たかのようだ。また発動範囲も広く、一歩一歩広

がるごとに後ろに伸びた。後方の広くを岩針で埋め尽くした。

「これで時間は稼げるだろ」

「……すごいな。これも同じ『ロック』なのか？」

「おうよ。元々魔術は使用者のイメージを元に現れるからな。そのイメージがちゃんとしたものなら現れる。今の飛んできた『ファイア』もイメージで飛ばすことが可能になった。だがこちとら頑丈で大きな岩をイメージしたんでな。ＭＰもそれなりに削られたけど、まだまだいけるぜ」

足止めを喰らっているのか、後方からの追撃は途絶え始めていた。聖の感じている人の気配も遠くなっていて、しかしこの暗闇の森林では距離が解らない。情報が制限されて終いには閉ざされてしまうのだ。

周りに何かヒントとなるものはないかと見渡す。するとヒントはすぐに見つかった。

「はは……月波の奴、ド派手に飛ばしてやがんなぁ」

後ろを振り向いて隼人が苦笑いを浮かべた。聖もつられて振り返る。

「ハ、ハハ……」

光の柱だった。闇を照らす閃光。太い柱が雲を貫き、さらにそこから何本もの光の鞭が出現して地上に降り注ぐ。攻防一体となった物凄い攻撃だった。

「悔しいけどよ、月波は俺の二倍以上の段階（スペック）だからよ。俺にゃできねぇ攻撃ができんだよな。俺が真似したらすぐにＭＰが尽きちまう

よ」

隼人と綾乃はほぼ同じ時期にシルバーブリッツとなったのだが、そこは才能の差なのだろうか、綾乃は隼人より二倍の速さで段階（スペック）を上げてしまった。このまま二年生になれば最高ランクと確認されている第二十段階まで上り詰めてしまうのではないか。と勝は語っていた。確かに次期主力は綾乃で確定なのだろう。高校にとっても有難い話しだ。

「――――さて、ここらでもういいだろ。一旦休もうぜ」

後ろに追手が迫っていないかもう一度確認して隼人は太い樹の幹に背中を預けた。聖もそれに倣う。

二人は全速力で追手から逃げていた。五分以上は逃げ続けただろう。流石に隼人は体力に底が見えていた。魔術を使いながら走ったのだ。もしかしたら使う度に体力を消耗するのかもしれない。

一方聖はまだ十分は走れた。実はそこまで全速力ではなかった。隼人の速度に合わせていたのだ。本気で走ればとっくに姿が見えない距離までいただろう。

「あ？　緋之、休まねぇの？」

そのことを怪訝に思った隼人が聖に問う。隼人は座り込んで肩で息をしているのに聖はそこまで疲れた表情はないようで、あまり息を切らしていなかった。辺りを警戒しているように見渡している。

「ああ。そこまで疲れてないから」

「マジかよ。俺なんてもうクタクタだぜ？　さっきのジャンプと言い、なんかお前人間離れしてるよな」

「そう？　でも鳴本は魔術を使いながら走ったんだ。疲れて当然か

もよ。お疲れさま」

ハハハと再び苦笑いを浮かべて隼人がやっと顔を上げた。

「でもお前って本当に人間かよって思うとこあるよな。よく人の気配なんて気付けるもんだよ。しかも人数と距離まで解ってやんの。すげぇよ」

「そうか？　僕にとっては普通だったんだが……」

体力からしてすでに人間ではない。隼人は内心でそう思っていた。実は最初からおかしいと思っていた。初めてで実戦に出されて勝ってしまった。圧勝だった。シルバーブリッツの中ではもっとも使われないとされる『アーツ』を使いならして敵を倒した。報告ではそうあった。正直目を疑った。

でもそばにいて解った。聖はこういう実戦に慣れているだけなのだ。戦い慣れている。どこから攻められても対応できるように仕込まれている。

さらに所属している無敵武道部で実力を磨いた。同じ人間同士ならばまともに戦えるのだろうが、この世界では魔術が蔓延るシルバーブリッツなのだ。非科学的な技が飛び交う場所で接近格闘戦は最も不向きとされていた。だが聖はその常識を覆した。

聖はこの先何かをする。それを見てみたい。それが隼人の素直な気持ち。

このまま戦えばいずれ――――

「鳴本、上だ！」

ハッとした時にはもう遅い。聖のことに気を取られ過ぎていた。隼人の頭上に五十センチほどの氷の塊が迫っていた。追手の気配はまだない。なのにピンポイントで隼人の頭上に落下してきたのだ。

これも相手の魔術によるものだろう。いつの間にか発信機でも付けられたのか。
とにかく相手の魔術は的確だった。積極的に魔術で防御をする隼人を潰せば聖を倒すのは容易であると気付いたのだ。

「くっそ、間にあわ――――」

あれが隼人の頭部を直撃すればただでは済まないだろう。頭を割って大怪我をしかねない。仕方なく両腕を怪我する覚悟で、頭上で両腕をクロスする。
くるべく衝撃を待ちうけようとしたが、頬に風を感じただけだった。

「動くなよ！」

頭上で声がする。聖の声だと解った時に視線だけを上に向けた。
聖は大きく跳んでいた。そして隼人の背後の巨木に足を付け、隼人の頭上まで一気に飛び上がる。
巨木を蹴った時の勢いを殺さず体を回転させる。隼人が頬に感じた風は空気を斬る聖の足からくるものだった。
聖は空中で見事なサマーソルトキックを決めていた。氷の塊を金属バッドで叩いたガラスのように容易く砕く。通常の人間が跳躍できる高さを遥かに超えたところでサマーソルトキックを決めるとここまで美しいものなのだな。と隼人は関心していた。
だがすぐに我に返った。次撃の二発、先程の大きさの氷塊が聖の頭上に迫っていたのだ。聖は勢いを使い果たしてしまっているので動けない。ならば。

「いくぜ緋之、受け取れ！」

隼人のアシストは完璧だった。『ロック』で地面から競り上がらせたのは幅が一メートルほどはありそうな四角形の柱だった。しかも所々に凹凸があり、掴みやすそうな形をしている。競り上がった柱は次撃の内一個を直撃して粉々に玉砕する。しかし一個取り逃がした。

それは問題なかった。二個の内一個を破壊した瞬間に競り上がる勢いがピタッと止まったのだ。すると柱が僅かに傾いた。地盤が緩んでいるのではないし、根元に亀裂が入ったのではない。聖が掴みやすい凹凸を掴んだのだ。

「あげてくれ！」

「行って来い！」

聖の合図で隼人がもう一度足を踏む。発生が中断されていた柱が再び競り上がり始めた。傾いたことにより確実に次の一個まで辿り着く事が出来た。後は凹凸から手を離した聖が氷の塊に踵を落とすだけだ。

やはり人間離れしているな。と隼人は呆れていた。

崩れる岩の柱を足場にして地面に降り立った聖は綺麗に隼人の隣に着地した。

「鳴本。早くここを離れよう。襲撃を受けたと言う事はこの位置はばれている」

聖が提案する。しかし隼人はそれに賛同しなかった。

「いや、もう無駄だろうな」

珍しく冷静な隼人に、これは焦りから中途半端な判断で言っているものではないと察した。隼人は静かに辺りを見渡す。月光が木々

の葉で遮られ奥が殆ど闇で塗り潰された世界。恐怖といってもいい。

「緋之、奴さん方の気配はあるか？」

「……ないな」

「やっぱり、遠距離攻撃か。相手の中に念属性がいていいと判断するべきだろうな」

「念属性？」

「うちでいう百合子先輩の属性だ。超能力って感じでさ。主に支援系が得意なんだけど攻撃力も防御力も馬鹿に出来ない。万能タイプってところだ。ただ欠点は発動するのにイメージが大変らしくてな。発動が遅いらしい。イメージに慣れていればショートカットが可能らしいけどな。――――で、今の遠距離攻撃は念属性がいたからだ。超能力で俺達の居場所を探りだしたんだろうぜ。千里眼みたいで気持ち悪ぃけどよ。あ、百合子先輩は女子の着替え覗くために念属性にしたって――――あ、今の内緒な」

何だか聞いてはいけないことを聞いてしまったような気がするが気のせいだろう。

隼人は周りを今まで以上に警戒し始めた。察知タイプがいると解ってしまった以上、戦況は不利極まりない。逃げようにも逃げられない。隼人のＭＰはすでに半分が消し飛んでいた。もしかしたら三分の一もないかもしれない。

それでもやらないといけないのだ。

しかしそんな聖に変化があった。追い詰められれば追い詰められるほどにトラウマの断片がフツフツと蘇るのだ。着実に聖の心に浸透してゆっくりと支配していき、埋め尽くしていく。気持ちが悪い。

だが今は一人ではない。隼人がいてくれるお陰で怪我をすることなくここまでやってこれたのだ。その点に関しては感謝しているつもりだ。ただデメリットがあった。反撃ができないということだ。聖一人なら察知されても回避できる自信はあった。だが隼人が傍に

いる以上は一人で逃げる訳にはいかない。聖の逃げ足の速度に追いつける保障がないからだ。身体を鍛えている聖の方が体力があるだろう。一方隼人は体力もなさそうでＭＰも残り少なく攻撃もまともにできない、即ち邪魔――――――長期戦に持ち込まれれば持ち込まれる程不利になるだけなのだ。

なので早く相手を蹴散らさなければならない。その方法を警戒しながら考えているのだが、一向に思い付きそうになかった。まずはこちらの位置を把握できる念属性の使い手から倒さなくてはならない。

「くっそう。本当念属性は厄介だな。百合子先輩がいれば心強かったんだけどよ、敵対するとここまで苦戦するなんてな。思ってもなかったぜ」

百合子とは共闘したことがない聖にとってどこまで頼もしいのかは解らないが、ここまで苦戦を強いられるのだ。もし百合子と一緒にシルバーブリッツに来られるのならば一度その恩恵を受けたいものだ。

と、そこで何かが引っ掛かった。念属性の千里眼のことだ。

「百合子先輩からその千里眼みたいなの、聞いてないか？」

「え？」

「例えばほら。千里眼を使って見えるのは人の姿なのか。それとも気配なのか」

「そりゃ……百合子先輩がまだ好んで念属性使ってんだから姿見えるに決まってんだろ」

「気配は解るのか？」

「いや、姿だけだって。やっと見られた時の感動は忘れられないって。勿論女子更衣室。自分も女子なんだから直接行けってんだ」

「そうか――――なら、使えるかも」

聖の組み立てた作戦に、光が見えた。

SILVER BLITZ

「あれ、あいつら動かなくなった」

面白そうに笑う東所根高校の男子。東所根高校は男子高であり、制服は学ランだ。襟首に学年のバッジをつけている。今呟いたのは二年生だった。

その場にいるのは綾乃の攻撃から逃れ、聖と隼人を追い詰めている五人だった。最初に隼人が受け止めた火球を放つ一年生が二人。氷の塊を放った三年生が二人。そしてその位置を念属性の千里眼で察知し、伝えていた二年生が一人。

「え、どんな感じなんスか」

「見せてくださいよ」

『ファイア』の火球を放つ一年生が念属性を使う二年生に近づいた。

「おお、今見せてやるぜ」

念属性の二年生が意識を僅かに二人に向ける。するとイメージが

直接送られるのだ。千里眼を通して見ている物を直接見る事が出来る。するとその光景を見た二人が爆笑し始めた。

「プ、なんスかこれ」
「だっせぇな。あの岩野郎が一人でチビを守ってやがる」
「それだけじゃねぇだろ」

すると氷の塊を放っていた水属性の一人が口を開いた。

「チビがビビって蹲ってやがる」
「ギャハハハハハ」

闇に下品極まりない哄笑が響いた。
東所根男子高校は生徒の評価があまり良くない。不良の集まりだとか、いつも喧嘩をして周りに迷惑をかけているだとか。そんな高校なのだ。
そして千里眼で見ている光景は驚くべき有様だった。
聖がその場に蹲っている。シャツを頭まで被って地面に額を付けているのだ。それを必死に攻撃させまいと隼人が『ロック』を何回も繰り出して氷塊を砕いた。
一方的だった。
これが聖が思い付いた作戦なのだろうか。

「まぁいいや。お前ら、もうあの岩野郎のＭＰは少ねぇだろうからよ。片しとけ」
「うぃーっす」

すると念属性以外の四人が動いた。ＭＰが少なくそろそろ無防備になるであろう隼人と足手まといな聖にとどめを刺しに行ったのだ。どうやら念属性はこの五人のリーダー格のような存在であり、司令

塔のようなものなのだ。
　そんな司令塔を疑いもせずむしろ楽しそうに四人は歩き出す。常に場所は千里眼を通して伝える様にしてあり、場所の移動があればリアルタイムで更新できるようになっている。
　四人が闇に消え、草や枯れ枝を踏む足音が聞こえなくなった頃だろうか。

「それにしても去年とは比べて弱くなったもんだな。――――これなら楽勝じゃねぇの？　あいつら狩ったら次はあの一年生の女でも食いに行くかなぁ」

　ぐへへ。とだらしなく顔を歪ませる。この念属性の使い手の二年生はそこまで顔が整っている訳ではない。どちらかと言うとガマ蛙に近い顔だ。これが歪むとはてしなく気色が悪い。性格と容姿、揃って女子に嫌われるタイプだろう。
　そんなガマ蛙を見ていると、どこか腹が立った。自分はこんな奴に踊らされていたのか。

「お、あともうちょっとであの二人に接触するな。速くやっちまってくれよ？　そうでねぇとあの女食えなくなっちまうかもしれないからよぉ」

　いやらしく笑うガマ蛙。
　だがもうそれもここまでだ。

「フ、フゲ、フゲゲゲ――――ゲッ！？」

　人間とは思えない笑い声が突然呻きに変わった。

「いい加減にしとけよ。僕達を舐めるのも大概にしろ」

ガマ蛙の後頭部に硬質な何かが直撃し、その場に叩き伏せた。それが踵によるものだと気付いたのは五秒後だった。

「お、お前は……！」

聖だった。聖が奇襲をかけたのだ。四人が念属性のガマ蛙から離れる瞬間を狙っていた。

「そ、そんな。お前は確かにあっちにいたはずじゃ」

「姿は見えてもそれが本質だと気付かないんじゃ宝の持ち腐れだな。気配まで解らないのでは万能とは程遠いらしい」

なぜかは解らないが憤りを覚えていた。このガマ蛙が笑うごとに静かな泉に汚らわしい汚物を捨てられるような怒り。水面に広がる汚物。そして波紋。小さかった波紋はやがて大きな波へと変化する。今まさにそんな気分なのだ。

「これ以上、僕の仲間を攻撃させない」

仲間と初めて言えた。そう認識していなかったのだがどこかでそう認めていたのかもしれない。

そんな聖の顔は般若の如く怒気をばら撒いていた。地面とキスをして顔面を泥まみれにしたガマ蛙を見下ろしてこのまま踏み潰してやろうかと思えた。

「ひ、ひっ」

魔術が使えるなら反撃をすればいいものの、このガマ蛙は反撃さえも頭にないようで、泥を掴んで制服を汚しながら後退っていく。

天敵に睨まれた時のような本能的な恐怖で思考が麻痺しているのだろう。
無様だな。こんな醜態をさらす奴に踊らされ、綾乃まで手をかけようとしているガマ蛙をどう処分してやろうと考えようとしたがやめておいた。
作戦を実行するのに、ここで時間を使っている猶予はない。
後退るガマ蛙の二年生に歩み寄る。二歩で詰められた。

「こ、こんなところで終われるか！」

するとやっと反撃という行動が思考に浮かんだのだろう。
だがもう遅い。隼人に念属性の攻撃パターンは教わってある。攻撃の術発動までかなり長い時間を使うので兎に角逃げるか避けるかの選択を強いられ、捕まえるのは一苦労させられるらしい。そして術が発動すればかなりの破壊力があるらしく、絶対に発動させてはいけないらしい。
綾乃の『レイ・バースト』とどちらが強いかと聞いたら、百合子の念属性の攻撃の方が強いのだがそれは発動させられたらの話しであり、瞬時に光線を放てる綾乃の方が恐ろしいらしい。
そしてこの転がっているガマ蛙もまた攻撃術を発動させようとさらに聖から距離を開こうと両足で地面を抉って後退る。二メートルの距離が開く。それでも聖が追ってこないことを馬鹿だと思いほくそ笑みながらさらに速度を開く。
聖の記憶には隼人からの情報がある。決して術を発動させないために逃がしてはいけないと覚えていた。念属性の攻撃術は強いということも。逃げられれば最後だということも。
目の前で全身を泥色に変色させようとしていたガマ蛙も聖にとってはカス同然だったが術を発動させれば厄介極まりない。なのに聖は追おうとはしなかった。

「馬鹿めっ。このまま術が完成すればお前は消える！　お、俺が逃げ切れれば勝ちだ！」

勝利を確信したガマ蛙の顔は泥に塗れ、そんな気持ちの悪い顔が酷く歪むと気分を害する。

だが一方で聖も確信を持って言った。

「そのまま逃げ切れれば、だがな」

「え？」

ガマ蛙の表情が凍りつく。背中にドンと衝撃があったのだ。硬質でゴツゴツしたそれは頭でも感じることができる。髪越しに細かい何かを触る。

一本の巨木だった。一直線に後退したガマ蛙は背後の巨木に気付かずに思い切り突っ込んでしまったのだ。聖はそれに気付いており、あえて放置した。

「そ、そんな……」

慌てて巨木から外れて逃れようとし、立ち上がって走ろうとする。発動しようとしていた術は完成途中で集中が切れてしまったので無効となった。それでも構わずに逃げようとする。体制を整えれば術が使えるのだ。その後で先程向かわせた四人諸共隼人を吹き飛ばしてしまえばいい。

一歩を踏み出そうとする。だがその一歩を踏むことはできなかった。

「ぐげっ！？」

その一歩を踏み出そうとした瞬間、天と地が逆転した。転倒した

のだと理解するのに数秒を要した。
なぜ転倒した理由を理解する間はない。視界の端に移った少年の足が目の前にあった。足払いをされて再び地面とキスをする羽目になる。

「どこに行こうというのだね？」

聞いた事がある台詞だ。それを真顔で言う少年を「マジかよ」とひきそうになった。しかも声まで変わっている。地味に似ていた。
だがそんなユーモアはここまでだ。聖はガマ蛙の眼前に立つと、左腕に腕輪があることを確認してそれを思い切り踏み付けた。

「いっ！」

骨まで砕かれるかと思いきや、腕はそこまで痛くなかった。その代わりに腕輪から数々の珠が零れ落ちる。

「これが無ければ、あんたも僕と同じだな」
「何？」
「僕もそこまで魔術が使えるわけじゃないんだよ」
「なんて事だよ。俺はそんなカスに踊らされていたってのか」
「つまりそのカスに負けたあんたは、どうしようもないそれ以下のカスだってことが証明されたな」
「くっ」

良かったな。と笑う聖を睨んでガマ蛙は聞いた。

「お前、どうやってここまで来た？　俺の千里眼は確かにお前ともう一人を見ていたはずだ。あそこにいるお前はどうやってここまで来た？　魔術が使えないなら俺の千里眼のジャミングだってできな

いだろうに」
「あれは『ロック』さ。もう一人の奴に岩で僕の等身大の人形を作らせて、ブレザーを被せればそう見えただろ？　それを終えて僕は気配を消して闇に紛れて入れ換わる。あいつは人形の僕を一所懸命に守っていた。だからバレない。ほとんど暗かったから影が多いし解らなかったろ？　気配が追えれば僕にも気付いただろうに。本質を理解できずに魔術なんて、笑わせるよ」

転がった三つの珠を靴の裏で受け止め、グシャリと踏み潰した。

「言っただろう。僕達を舐めるな。と」

これでこのガマ蛙は消える。一人は何とか倒せた。あとは異常を察知した四人が戻って来るので、それを何とか一網打尽にしなければならない。何としてでも。

と、足元で低い笑い声が聞こえた。

「勝ち誇っている時に悪いが、なら急ぐべきじゃないのか？」
「……何だと？」
「俺達の方も舐めるなよ。第二陣がもうすぐ来る。そうすればお前達は終わりだ」
「どういうことだ？」

ただの負け惜しみとは思えない。確信がある目だった。

「シルバーブリッツは図書委員会でメンバーが構成される。だが俺達東所根は校長もあれな奴でなぁ。権力のために図書委員会の登録人数を五十人にしたんだよぉ！　さっきあのお前達三人に向かったのは三十人。残りの二十人は第二波として送られることになってる。俺一人を倒したところでいい気になってんじゃねぇよ！」

衝撃的なことだった。シルバーブリッツは権力さえも動かすのだ。生徒や高校だけに影響を齎すのではない。大人にも幸福と快感を齎すのだ。それは薬物的な興奮にもなりかねない。中毒性な快感なのだ。

その快感を味わうべく汚い大人がこの戦争に協力をする。よく考えれば解る事だった。

「あれれ？　お前そんなところで何してんだ？」

身体が消えかかっているガマ蛙が汚く笑った。

「あの野郎と女、やべぇんじゃねぇの？」

「――――このっ！！」

気色の悪い顔を踏みつけてやろうかと足を振り上げた時には、すでにガマ蛙の姿は消えていた。

一人残された聖は闇に沈みそうになっていた。まだ増援がいるとは思っていなかった。このままではＭＰが尽きかけている隼人だけではない。綾乃まで危機に瀕している。

この増援を知っているのは聖だけなのだ。大変なことだ。すぐに伝えなければならない。だがその手段がない。携帯電話を使おうと思った。圏外だった。それ以前に二人のアドレスも電話番号も知らない。

今から走れば隼人は五分。綾乃は十分で到着できる。選択が強いられる。

――――いや、最後に一択が残っていた。あまりにも無謀で成功率が皆無に近い。

第二の増援に直接向かい、単騎でそれを殲滅すること。

隼人にも綾乃にも触れさせずに減らせるだけ減らす。どうやれば

シルバーブリッツをこの世界から離脱させられるか、その実験を証明させてみせたのだ。腕輪を狙い、左腕の骨ごと破壊すれば何とか半分は減らせるだろう。確かに聖は数日前、一人の炎属性のシルバーブリッツと対面して成す術も無く逃げ纏った。奇襲に成功して肩腕を奪うも反撃されて失敗する。この結果があるのに二十人もの相手をするのにはあまりにも無謀すぎる。骨さえも残らずに死に果てるのだろう。

とりあえず生き残れ。勝はそう言った。隼人と共に逃げるも隼人を壁にしても生きろ。そう付け足した。生き抜く事が大事。ここで命を使うこともない。

少し冷静さを欠いていたらしい。ここで聖という連絡手段を失えば隼人も綾乃も危ないのだ。

ならばこれからどうするか。

簡単だった。綾乃は隼人の二倍近くのＭＰを所有している。ならば隼人よりもＭＰの消費は遅い。ここはもうすでに限界であろう隼人の所へ向かうべきだ。恐らく第二増援は綾乃へと向かうだろう。先程からド派手なほどに光の柱を出現させて東所根男子高校の軍勢を苦しめているのだ。ならばそこに増援を送り突破するのが定石。今消してもそこまで形成が傾かない隼人を手にかけても得策にはならない。だがそこで隼人と協力して増援を少しでも撃破する。これで成功率はいくらか増すだろう。

そうと決まれば逸早く隼人の元へ向かうべきだ。もうすでにガマ蛙が放った四人は隼人のすぐそばにいるのだろうが千里眼を通した情報連絡が途絶えているのに気付き、こちらに向かって来るはず。闇に紛れて気配を消し、木の枝を跳んで行けば遭遇せずには済む。

聖は巨木に素早く登ると、聖が乗っても折れないであろう太い枝を選んで跳んだ。

やられた。
激しく毒づいた。裏の裏をかかれた。甘かった。
現実は聖の予想を激しく裏切った。木の枝を跳んで進み五分もしない間に現場に到着。そこには隼人の『ロック』で激しく地面から隆起した岩の数々がとても激しかったであろう激戦を物語る。
違和感があった。隼人の元へ向かう時、ガマ蛙が放った四人を見かけなかったのだ。気配である程度解る。だが四人の気配はなかった。どれだけ進んでも人の姿がない。おかしいと思った。
そして違和感が続いたまま現場に到着した。直後に絶望した。

「くそっ――――何で！」

木の枝から飛び降りて地面から飛び出した岩を掻い潜り、隼人の姿を探す。無事でいてほしい。
だがそこには誰もいなかった。影もなければ気配もない。

つまり増援は綾乃に向かったのではない。
隼人を狙って、消したのだ。
その時だった。聖の心を蝕んでいたトラウマがとうとう姿を現し、精神にも影響を及ぼした。
一人。孤独。これは数日前の戦いと同じ。
少しだけ目の前が紅くなった。

月が似合う少女　？（後書き）

卑劣なやりかただった。
許したくなかった。
だから、僕は――――――！

月が似合う少女　？（前書き）

酷く怒りを覚えた。久しぶりに拳が震えた。目の前の少女が消されそうになる。この少女についてあまりいい思い出は無い。だが少年は、怒りを覚えたのだ。だから前に出た。

月が似合う少女　？

この感情は簡単に言い表せるものではない。そう確信していた。怒り、憤り、憤怒。これに似ている。そのくせに興奮はせずただ深く落ち着いていた。例えるならば広い空の上から醜いものを見下ろしている感じ。広すぎる空で惨めな下界を見つめ、汚く争っている愚か者をほくそ笑みながら見ている。

ふつふつと思い浮かぶトラウマの数々は聖の心を浸食して、恐怖を超越してその感情を抱かせていた。

ただ汚く笑う輩を見下ろして、これからこいつらをどう殺してやろうか。それだけを考えていた。

聖は違和感を覚えた。当然だ。木の枝の上を跳びながら隼人を狙う四人の気配を追っていたのだ。なのにその四人の気配はない。四人に千里眼で情報を送っていたガマ蛙に似た東所根男子高校の念属性使いの二年生は潰した。これでガマ蛙から送られる視覚的情報は途絶え、当然何かあったのだろうと思って戻って来ると思っていた。

同時にガマ蛙が口にした第二の増援も気になる。どうやら東所根男子高校は校長が腐っているらしく、シルバーブリッツは図書委員会が参加できると知ったのだろう。登録上限を排除、普通では考えられない人数を図書委員会にしたらしい。その数五十人。まず三十人で様子見を兼ねて相手の主力と思しき生徒に集る。三十人という人数を蹴散らすのはやはり時間がかかるし消耗と共に疲弊もする。そこで第二の増援を投下。消耗しかけた主力とそれをサポートしそうな生徒を潰す。後は狩りの時間だ。某有名なゲームの有名なキャッチコピー『一狩り行こうぜ』を思わせるような爽快感でも味わうのだろう。

ターゲットが大きければ大きい程達成感が大きくなる。現段階での最高ターゲットは光属性の『レイ・バースト』で最初の三十人からガマ蛙小隊を引いた二十五人を蹴散らしていた。ド派手にやらかしていいと勝は言っていた。オーダー通りに初っ端からぶっ放して目立ち、弱い存在である聖と隼人を逃がしたのだ。つまり「自分は最高に強いから片っ端から掛かって来い」と宣伝しているようなものだ。で、見事に甘い蜜の在りかを突き止めた第二の援軍がそこに群がる。それが聖の予想。ならばＭＰが尽きかけだが隼人と合流して少しでも綾乃の援護、または第二の援軍を減らす役割を提案するまでだ。奇襲ならまだ成功率は高い。

聖は隼人の元に急ぐ。そこで先程の違和感を覚えたのだ。先行して隼人を袋叩きにするであろう四人の姿がないのだ。それどころか気配もない。まるで無機物になったかのよう。熱が無く生物でもない何かに変化したのか。いや理由は見当たらない。向かうはＭＰがもう空に近い隼人。追うはＭＰどころか魔術すらまともに使えない聖。一体何を恐れるというのか。四人もいれは逆にこちらが危ない。隠れて息をひそめる必要すらない。

なのにガマ蛙小隊の四人はどこにもいない。もうすぐ隼人が『ロック』で岩を盛大に競り上げた場所に出る。

が、そこで違和感がさらに膨れ上がった。

「鳴本……？」

隼人の気配が、無いのだ。

まさか。と思った。最悪な事態。もうすでに先行した四人が隼人を手にかけた。その予想が脳裏を過ると激しい怒りがこみ上げて来た。奥歯が砕けそうになるほど噛み締められ、もう聖は音を立てずに移動することを止めていた。木の枝から飛び降りて地面に着地。着地した時の衝撃を和らげることなく疾走をする。筋肉の筋が悲鳴を上げるがそんなこと意識になかった。

もし先行した四人が隼人を亡き者にしていたらどうしてくれよう。例え四人が一斉に魔術を駆使して聖を迎え撃ったとしても勢いを止めるつもりは無い。普段は絶対にしないように、祖母からも言い聞かせられた殺人をしでかすかもしれない。一人一人、確実に殺してやる。

「鳴本！」

暗闇を抜けて躍り出たのは隼人がまるで龍のように突き出させた岩の数々が目立つ場所、木々は岩によって薙ぎ倒され辺りには焼けた痕跡と凍った痕跡があった。

隠れることなく岩を掻い潜って奥に進む。必死だった。とにかく必死に隼人の気配を見つけようとした。だが隅々まで探しても隼人の姿は無かった。

と、丁度戦場の中心辺りに足を踏み入れた時だった。聖の考えた最悪を遥かに上回る最悪の事態が判明した。

「嘘、だろ……？」

茫然としてその場に立ち尽くした。隼人がこの場にいない訳が解った。

そこには無数の足跡があった。隼人と先行した四人、合計五人だけでここまで足跡を付けられるものだろうか。違う、もっとだ。この場には五人以上の人間がいた。

隅々まで続くそれは、則するに二十人分の足跡があった。

聖は毒づく間もなく、それが第二の増援であるものだと理解した。聖の予想は外れた。ガマ蛙の言う第二の増援は綾乃へ向かったのではない。隼人を狩りに来たのだ。前菜でも貪るように。

なのでここには人の気配がないのだ。食後のテーブルのように、ただ貪った跡があるだけだった。

「――――っ！！」

感情が爆発しそうだった。

隼人を救えなかった無力感からくる自己嫌悪。そして敵勢力の卑劣さ。確かに戦術としては有効だ。だがそれに権力者の権力が行使され、卑怯な手を使ったとするならば話は別問題だ。

許せなかった。いや許す気など毛頭ない。力の限り隼人を葬った第二の援軍を追い掛け殲滅する。

しかし第二の援軍は続いて綾乃を喰らうだろう。その前に、最低でもその最中にでも追い付かなくてはならない。絶対にさせない。これ以上の犠牲なんて出させる気は無かった。

SILVER BLITZ

ここで冒頭に戻る。

この光景を目にして、今まで爆発寸前だった怒りが頂点に達した。しかしそれは爆発を通り越して、深い何かを目覚めさせた。今まで聖の中で燻っていた原始的な破壊衝動。それを渾身の力で封じていた鎖を力の限り、ゆっくりと軋ませて問い放とうとしているような。

聖は今、綾乃が戦っていた場所――――岩の高台から降りた所にいた。正確に言えばその近くにある巨木の枝の上。辺りを岩の高台ほどではないが一望できる場所だ。そこで見下ろしていたゴミの海。それは東所根男子高校が放った第二の援軍だ。あれから聖は全力で

移動して十分でここに到達した。だが現実は厳しかった。間に合わなかった。聖はまた間に合わなかったのだ。隼人だけではない。綾乃まで見殺しにしてしまった。東所根男子高校の男子共は勝利に酷く陶酔していた。二度の狩りに成功したのだ。気分が昂ぶって絶叫しだす者もいる。あまりのあっけなさに汚く哄笑しだす者もいる。地面を踏み鳴らし指を点に向けてクルクルと踊る者までいた。反吐が出る。どいつもこいつも人に値しない低俗共ばかりだ。総勢三十人。あれから綾乃は二十五人の内、十九人を消したことになる。残りの六人もすぐに狩れたのだろうが、そこで第二の増援があったのだ。そこには隼人を消した四人もいた。消耗していてはそれを討つのは困難を極めた。やがてＭＰも底を尽き、圧し殺された。質よりも量を選んだ戦法は現段階では最高の攻撃力を誇った綾乃を封じてしまった。

もう成す術がない。聖は木の上でそう思っていた。

刹那、別のことに気付いた。絶望に近い感情を抱かせていた聖に、ほんの少しだけの希望を持たせるものだった。

陶酔して歓喜する三十人の中で明らかに異質な二人を見つけた。何かがおかしい。例えるなら就職面接の際に全員がスーツで来るように言われていたのに一人だけ袴姿でその希望した会社に現れたような、変に目立つ二人だった。

よく見るとその二人は倒れていた。ピクリとも動かない。少し嫌な予感がする。聖は周りの馬鹿共がはしゃぎ走りまわっていてそこから離れるのを待った。数人が邪魔で倒れている二人の顔が隠れていて見えないのだ。案の定すぐに邪魔だった数人はその場を離れた。聖が邪魔がいなくなってやっと見えた二人の顔をみた瞬間、電撃が走ったように震えた。見覚えがある二人だったからだ。内一人は助けられなくてもうすでに亡き者だと思っていた少年だ。

「鳴本…！」

声が擦れた。隼人は第二の援軍に消されたのではなく、攫われたのだ。さらに注視すると隼人の左腕にはまだ珠があった。つまりまだ生きていて魔術も辛うじて使える状態。暗闇の森林に存在できる状態にあた。そして隼人の隣に倒れているのは少女だった。驚いた。だが数秒の後に冷静になって考えた。当然だという結論に辿り着く。

「月波さん……」

綾乃もまたＭＰが尽きたのだろう。こちらも注視する。左腕にはまだ珠があった。隼人と同じ状態にある。だがそれは同時に危険な状態であるということだ。相手に簡単に殺されてしまう。もう身を守る術がないのだ。魔術もなければＭＰもない。武術の心得も無いだろうし、まず体力も残っていないだろう。

隼人は全身に暴行された痕があった。やはり囲まれて袋叩きにされたのだろう。一方綾乃は泥に塗れているだけで目立った外傷はないようだ。それもそうだろう。綾乃は普段そこまで顔を大人しく見せる方ではない。だがクラスの男子は揃って言うのだ。綾乃は美少女の類に入るだろうと。高校でも高ランクの美しさを誇る。スタイルも良く華奢である。胸部にそこまでの豊かさはないようだが平均くらいはあるだろうとそういう如何わしい部類を極めた所謂変態は言っていた。

そんな美少女を傷付けてどうするというのか。唯でさえも華が無い男子高校では滅多に近寄れない少女が、それも美少女であるならば欲望が働いてしまう。高校生なら当たり前のことだろう。

実際に聖の耳に届いていた汚い言葉の数々。それを聞いただけで聖の髪の毛は逆立とうとしていた。

すると、宴に変化があった。今まで騒いでいたクズ共がいきなり纏りを見せて倒れている隼人と綾乃を囲んだのだ。聖もそれを見た。

隼人と綾乃は立ち上がっていた。体力も残っていないだろう。もうすでに気力だけで立ち上がったのだ。隼人は足をガクガクと震え

させながら、しかし口元には強気な笑みを浮かべていた。一方綾乃は肩で息を切らしてやっとの思いで立ち上がった。泥が綺麗だった黒髪から滴り落ちる。頬も汚れて、当然ながら制服も泥まみれだった。震えてはいなかったが、限界が近いのか目に力が無い。

「よぉ、あいつ……緋之は、逃げ切ったと…はぁ…思うか？」
「知らない、わよ……はっ、それよりも、この状況をどうにかすることを……少しは考えなさい」

三十人に囲まれながらも二人はまだ戦う気だ。そこまでＭＰが残っていないのにだ。
するとその会話が全体に聞こえたのだろう。その場で盛大な哄笑が響いた。

「ぎゃはははははははは」
「ぐへー、腹痛ぇ」
「たった二人で何しようってんだよお」

口々に発される馬鹿にされた様な言葉。だが正論だ。消耗しきった二人ではこの人数に太刀打ちは出来ない。一人も倒すことはできないだろう。
だが隼人はその口の強気な笑みを崩す事はなかった。

「ふん。俺達はいいんだよ。今回はあいつが生き残る事が重要なんだ。あいつが生き残れば俺達の勝ちだ」

あいつのこととは勿論聖のことだ。
すると三十人の中から四人の少年が隼人の前に出た。どうやらガマ蛙小隊の四人だ。

「あいつってよぉ、お前を置き去りにして俺らのタイチョーブッ殺した奴のことかよ」
「あ？　な、なんだ……緋之の奴、ちゃんと、仕事したんだ。やるじゃん…」
「まぁうちのガマ蛙野郎は雑魚だったからな。簡単に殺せるさ。けどよ、いいのかよお前は。見殺しにされそうになったんだぜ？　もしかしたらあのチビ、お前を置いてとっとと逃げちまうかもしれなかったんだぜ？」
「それが、どうしたってんだ」
「よくそんなのに命なんざ預けられたな。馬鹿じゃねぇの？」
「はあ？」
「お前もお前だよ。あんな奴よく信じられるよな。普通逃げるぜ？　解りきったことだから俺達はそういうの信じねぇ。だから強い。お前らとの違いだな。あのチビが逃げて勝ちとか訳解らねぇが、その代わりお前達は負けた。これが事実だ」

氷属性の二年生が隼人に詰め寄る。手を伸ばせば届く位置まで歩いてきた。隼人が一発でも『ロック』を発動すれば倒せる。綾乃も同じだ。だが二人は魔術が使えなかった。ＭＰがないのだ。

「違ぇよ」
「あ？」

それでも隼人の笑みは崩れない。それどころか確信を持った笑みでそれに反した。

「俺達はこんなところで終わりゃしねぇよ。まだまだこれからだ。お前ぇ達はこれから俺達を倒して緋之を追うんだろうけどよ、そうはさせねぇ。何人か道連れにしてあいつの負担を軽くすりゃよ、まだ生き残れる可能性はあるだろ」

「ちょっと、何で私まであのクズのために動かないといけないの。ふざけないで」
「でも結局は戦うことになる。結果は同じだ」
「馬鹿はこれだから。私は死なないわよ。死ぬんだったら一人で勝手に果てなさい」

漫才のようなやり取りがしばらく続く。二人を囲んでいた東所根男子高校の三十人はこれを静かに聞いていたが、綾乃の吐き捨てる様な言葉を聞いた直後に爆笑した。別に綾乃の突っ込みに受けたというわけではないだろう。どちらかというと嘲笑だった。

「おいおいおいおいおいおいおいおい！　馬鹿かお前ぇらは！　だからなんでそこまですんだよ」
「あいつは、緋之はこの先きっと何か仕出かす。それに期待してんだよ。ワクワクしてんだよ。俺がその先を見てみたいからな。ここで死ぬ訳にはいかないんだ」
「だから、それがおかしいんだ、ろ！」

隼人が力を振り絞って叫ぶも、接近した氷属性の二年生に足を蹴られ、そのまま力無くその場に倒れる。顔面から泥に突っ込んだ。隼人は呻き声を上げ、口に大量に吸いこんでしまった泥を咽ながら吐きだす。だがもう立ち上がれなかった。

「ほら、お前はどうするんだよ」

次は綾乃に近づく。隼人の二の舞にはなるまいと構えるも、そのガードは隙だらけだ。

「別にあのクズがどうなろうと知らないわよ。……けど生きてるならそれに越した事はないわね。普段からクズだったけど、この前

はやる事はやったことだし。期待されてるわね。私はしてないけど」

フと不敵な笑みを浮かべる。それが気に食わなかったらしいのか、氷属性の二年生は綾乃のガードの隙間を狙って蹴りを放つ。ドボッと鈍い音がする。綾乃は悲鳴こそあげなかったものの口元から涎と胃液が混ざったものを垂らしてその場に座り込む。

「うぜぇんだよ、そういうの」

「んっ」

前髪を掴まれて泥の中に叩き込まれる。呼吸が詰まりそうになって急いで上半身を起こそうとするが、後頭部を踏まれてうまく起き上がれない。

「いつまで持つか賭けるか？　そういうくだらねぇ友情ゴッコ。マジくだらねぇ」

両腕を使って全力で後頭部に置かれている足を上げようとするが体力がもう限界にきていた。このままでは再び泥に沈む事になる。窒息してしまうことを避けるため、首を縮めて額の下に右腕を敷いた。これで窒息は免れる。

だが後頭部を踏む力は強くなるばかりだ。このままでは口だけが沈んで泥で呼吸を奪われるか、酷くて首の骨が折れてしまう。呻いて何とか抗うもそこは男女の力の差だ。最初から勝てる筈が無かった。

「なぁおい。聞いてんのかよ」

「聞いてるわよ。あんたの昔話なんて聞きたくないんだけど、こんな近距離なんだから仕様が無いじゃない」

「あ？　俺の昔話だあ？」

「あんた、昔友情ゴッコしてたんでしょ？　それも俺達は永遠の親友だ。って感じ。だけど裏切られた。どうせくっだらない理由なんでしょうね。だからそこの馬鹿の馬鹿らしい台詞に昔のあんたの羞恥がトラウマとなって蘇った。自己嫌悪なんて恥ずかしいものね。子供みたいに誤魔化したいから周りに当たる。典型的なタイプね。それじゃ周りからすぐに察されちゃうわよ？　それとも察されたいのかしら？　悲劇の主人公ですからどうか同情してください。って。……馬鹿じゃないの？」

隼人とはまた別な勝ち気な笑み。逆に相手の核心を突いた。すると今まで綾乃を踏んでいた二年生が急に足を離した。

「やっぱり図星だったのね」

「殺す」

二年生の左腕の腕輪が光る。青い珠、氷属性の『アイス』だ。

ここまでか。と綾乃は覚悟を決めてくるであろう激痛に備えた。多分ここで自分は終わる。なぜならこの世界での死というものは、現実世界での――――――

「ご、ぐふ！」

嫌な思いが胸を締め付ける。これでお別れだと後悔を飲み込もうとした時だった。

頭上で悲鳴が聞こえた。隼人のものではない。勿論自分のものではない。だとすると誰なのか。

左目で少し上を見上げる。そこには今にも綾乃を殺そうと『アイス』を繰り出そうとしていた二年生が、白眼を剥いて硬直していた。まるで生気が無い。一体どうしたというのかと観察していると、グラリと体制を崩してその場に倒れた。泥に沈んでピクリとも動かな

い。綾乃も隼人も唖然としてそれを見ていた。腕輪が破壊されていた。先端が鋭利な石が貫通し、全ての珠を破壊している。
そして我に帰り始めた東所根男子高校の軍勢が騒ぎ始めた。それは倒れた二年生を見て騒いでいるのではない。倒された二年生の左腕に突き刺さっている石が飛んできた方向だった。隼人も綾乃もすぐにそれに気付いた。石を飛ばして、わざわざそこに現れたのは誰なのか。

「ひ、緋之……」

聖だった。
薄暗い闇の中にひっそりと立っている。全体が黒く染まり、まるで闇の化身のようだ。石を投げたモーションからまだ戻っていないらしく、右腕をあげたままだった。
隼人が驚いて呻くように呟いた。あのまま逃げればよかったものを、聖は戻ってきてしまったのだ。そして綾乃をピンチから救った。助けられた綾乃も唖然とした表情で聖を見た。

「ひ…じり……？」

そっと呟かれる彼の名。聖は綾乃だけの声に反応し、ゆっくりとそちらを見た。隼人はすぐそばにいる綾乃が聖の名を初めて呼んだ事に気付いていない。
綾乃は黙ってこちらを見る聖をただ見つめているだけだった。いや正確に言えば何かを思い出していた。その光景はこの現状ととても酷似している。鮮明にとは言えないが、目の前の少年が頭部から血を流して表情を一変させたこと。最初は虚ろな目をしていたが数秒後には双眸が鋭くなり、まるで獲物を狩るハンターのような表情になる。辺りはもう暗くなり闇が夕日を浸食し始めた頃。一帯は少年が倒した数人の大人が横たわり、そこに立つのは少年と少女だけ

だった。とても怖かったことを覚えている。それまでの経緯と事情、大人に囲まれる少女。大人に頭部を金属で殴られて頭部から出血する少年。そして何より少年が反撃に出て、現代の子供を超越した、しかし原始的な攻撃をしたことが怖かった。顔面を頭部の出血と返り血でグシャグシャにして振り翳した拳で一心不乱に大人を殴る。蹴る。叩きつける。

少年は全ての大人が倒れたことに気付き、次に少女に気がついた。少女にまで暴力を振るおうとしているのではない。無表情だったが少女を見ていた。瞳からは猟奇的な光は消えている。しかし少女は震え、少年を拒絶した。これ以上の接近を許さないように睨みつけ、涙を流しながら唸る。力無くペタンと尻もちをついてしまうものの、手近にあった小石や砂利を握って少年に投げつけた。少年は最初、少女がなぜ自分に小石や砂利を投げてくるのか解らなかった。言葉にならない唸りで威圧的な睨みを発するのか。もう少女を傷付けようとする大人はいない。大人は少年が倒した。なので少女は喜ぶと思った。なのに少女は泣くばかりで少年を寄せ付けない。

少年がそれに気付いたのは一際大きな石が額の左側に当たった時だった。どろりとした生暖かい水が額から頬に伝わった。頬から落ちたのは血だと気付いた。それを追うように下を見た。

「あ……」

先日降った雨による水溜りが、まだそこにあった。水面に移ったのは最早人ではない何か。化物に近い。顔の形は人間だ。だが肌の色がどす黒い赤に上塗りされていた。最初に頭を割られて流れた血塗りの化粧が渇いて付着し、それが滅茶苦茶に倒した大人の返り血で上塗りされて顔面を満遍なく同じ色にする。そして今流れ出る血が、新しく綺麗な赤となってラインが入った。

「ああ、これ……」

これでは少女が怖がる訳だ。と上着の腕で顔面を擦る。後で母に叱られると思ったが仕方が無い。複数の傷が摩擦されるごとに酷く痛んだが、これ以上少女を泣かせるわけにもいかず、さらに嫌われたくないと思って一所懸命に血を拭った。

なのに。なのに少女は泣きやまなかった。

少女が本当に怖がっていたものは、少女の口から発される。少年はそれに酷く衝撃を受けた。

「殺した……の？」

人を殺してはいけない。祖母にいつも言われていること。

人を傷つけてはいけない。しかし何かを、人を守る為なら仕方なくなら、最低限はよし。

人として、常識として染み込まされたそれはいつまでも少年の心にあった。拳を振るう最中もそれを忘れなかった。だが先程まではそんなこと頭に無かった。激しく憤っていた。破壊衝動に呑まれていた。

足元に転がる大人を見る。胸の上から心臓あたりに手を当てて音を感じればいい。耳で口元から呼吸音を聞けばいい。それだけで済むのに少年はそこから動けなかった。怖かった。もし死んでいたらどうしよう。少年は本気で大人たちを殴っていた。どれだけ抵抗されて痛めつけられようと倍にして殴り返した。

人殺しの罪は大きい。祖母に聞かされていた。怖い。自分は本当に人を殺してしまったのか。怖い。人を躊躇なく殴り、死に追いやるまでにしてしまった自分が途轍もなく怖い。

「あああ……」

心音が嫌という程に耳に響く。警鐘の様に早鳴る。まさか、そん

な。信じられない。
身体が震えだす。
「あああああ……」
その場から逃げだしたかった。なのに足が動かない。どれだけ力を入れようと一ミリたりとも動かない。パニック状態になりだした。
少女は少年の顔を忘れる事が出来なかった。それからのことも。忘れる事は無かった。
自己嫌悪の末にした決心。今がその決心を見せる時だというのに。綾乃はなぜ今その場に倒れているのだろう。だらしない。また自己嫌悪した。
あの時の少年――――――聖は、また暴走しようとしているのだから。

「んだテメェ……」
綾乃を殺そうとしていた二年生が消え、それが切欠で我に返った一人が聖に詰め寄った。全身泥の斑点ができて樹の下にいることにって闇と同化しようとしていた聖はその少年を見た。二年生だった。
「ノコノコ帰ってきたみてぇだがよ。よくも俺のダチを消しやがって。やってくれたなガキ」
汚く唾を振り撒く二年生を前に、聖は視点を上にして虚ろな目で顔を見ていた。
あの時と同じだ。綾乃の記憶に刻まれた出来事。あの時の少年も、今の聖と同じ虚ろな眼をしていた。そこから急に目付きが変わり、

残虐とも言える暴力が始まるのだ。止めないと。綾乃が腕に力を入れる。

だが、もう遅かった。

「覚悟できるんだろぐがっ！？」

二年生の声が途中で潰れた。それが聖によるものだと気付くのに数秒を要した。

「あ…う、が……」

二年生の首に聖の拳がめり込んでいた。容赦ない一撃だった。そのまま呼吸器官まで潰してしまいそうな破壊力。そして速度。気付けなかった。二年生は無力にもその場に倒れた。そして頭部が泥に沈む。聖の右足が持ち上げられ、思い切り降ろされたのだ。泥の下の硬い地面や砂利があるのにも関わらず、まるで粘土に沈むように踏みつけられた。

遅かった。

虚ろだった瞳がいつの間にか切れ長に伸ばされ、いつもの聖とは違う一面を見せた。

聖は動かなくなった二年生の左腕を強く踏む。腕輪が破壊され、珠も粉々に砕けた。

この状態になるのは三度目だった。

そう、意識熔暗（CFO）が呼び出されたのだ。

月が似合う少女　？（後書き）

違う。断じてそんなことはない。あの少年が信じている自分はそんな綺麗なものじゃないのに。なのに少年は信じてくれた。嬉しかった。本当に命をかけて信じてくれたのだ。だからそれに応えたく、今は拳を振るおう。そう思った。

月が似合う少女　？？（前書き）

彼らを踏みにじる奴らは許せない。だから少年は感情を爆発させた。爆発させたと言っても大声を出したり感情に任せて暴力を振るうのではない。怒りを深く呑んで己が力として、力に変えて相手を殲滅するのだ。結局は同じことなのだが、少年にとっては明らかに違う事だった。

月が似合う少女　？？

不意打ちとは言え、たった三秒で二年生の男子は倒れた。当然だ。喉に鋭い拳を一発見舞い呼吸器官を潰して意識の殆どをショックで奪い、最後に倒れた後に後頭部を思い切り踏んで意識を全て奪い取った。

これは誰も予想していなかったようで、敵勢力である東所根男子高校の二十九人と、聖の味方勢力である隼人と綾乃も唖然として聖を見ていた。聖は倒れている二年生の男子から足を離すと、前方に立っている東所根男子高校の生徒を見渡した。最後に倒れている隼人と綾乃を見る。動じていない顔だった。

するとまだ動けた二年生の男子が声を上げた。逸早く我に返って聖をどうにかしなければならない。そう思ったのだろう。

「何してる一年！　やっちまえ！」

ほぼヒステリックに似ている叫び。本能的に恐怖感を覚え、一刻も早くここから逃げたいなどの願望から一年生を犠牲にしようとしているのだ。もしくは多勢に無勢で聖を押し殺して生き残るか。そのために一年生で少しでも体力を削っておきたいのだろう。一方その二年生の男子の目の前にいた一年生五人がハッとして二年生を見る。本気で言っているのかと疑いたくなったのだろう。なぜならその一年生達はさらに恐怖を覚え、身体が動かなかったのだから。なのでそんな化物に突撃命令を出した先輩を信じられない様な眼で見たのだ。気持ちは解らなくもないが、二年生も本気だ。「お前達がやらないならまずお前達を俺が殺してやる」といった目で後輩を睨んでいた。どちらにしろ死亡が決定しているようなものだ。

「う…うあ……」

「やっちまえって言ってんだろ！」

そこで他の二年生も命令に加わった。この連中、後輩や弱者にだけは強気でいられた。そこだけは一丁前なのだが、先輩や強者を前にするとその強気が瞬時に崩壊してしまう。そこにプライドなどは無い。

とにかく今が楽しければいい。そういう後先を考えず、顧みない生活をしているのでこうなってしまう。今まで雑魚だのチビだのと罵倒し実力を過小評価してきた東所根男子高校のシルバーブリッツ軍勢は、急に強くなって一瞬で二年生を屠った聖を見た瞬間に、自信と余裕が消え失せた。例えるなら強盗に成功して高級な宝石などを我が物とした陶酔感に酔いしれたのだが実は包囲されていることに気付かず、気付いた時にはそこには警察官ではなく警察の中の特殊部隊に囲まれていたような感じ。警察官ならどうになかるものの、さらにその中の精鋭が相手ならばまず絶望を覚えるだろう。今まさにそんな感情を抱いているのだ。自分達とは違って魔術を使わずに相手を倒した実力。接近戦ではまず勝てないと悟った。

一年生はどうしようもなかった。ついには思考が混乱して五人で囲めば何とかなると至ったのだろうか、一斉に走りだす。すぐに聖を囲むと左腕の腕輪を向けた。隼人が「危ない！」と叫ぶ。綾乃が助けようと身を起そうとする。しかし聖の左腕を見てハッとした。

聖の左腕が、光っている。詳しく言うと左腕ではなく左腕に填められている腕輪の珠だ。一切の属性の魔術が使えない聖が初めて魔術を使おうとしている。いや初めてではない。綾乃がその初めてを見た。そしてその初めての状況と今の戦況は酷似している。追い詰められて絶体絶命の最中、聖の真価は発揮されるのだ。あの時も、今も。

聖が発動したのは、引いたカードの半分を占めていたカード。『アーツ』だった。破いて珠にすると灰色になる。いくつもある属性魔術の中で唯一の物理的な攻撃を得意とする。どの属性の基礎的な

魔術も満足に使えなかった聖が、現在の図書委員長の勝でさえも実際に見た事が無いと言われる希少な魔術『アーツ』を使おうとしているのだ。『アーツ』から発される光は左腕に集めた。

左腕を前に差し出す。だがそれは聖を囲んでいる一年生五人に向けられたものではなかった。ゆっくりと拳を握り、右に移動させる。そしてその手を開きながらゆっくりと左にスライドさせた。何事かと見ていた一年生達が驚いた。その掌から何かが出現して伸びたのだ。細い棒のようなもので、左に引かれるようにスライドする動きに反して伸び続けるそれを右手で掴み、一気に引き抜いた。

薄い茶色をした木刀だった。柄の端に紅い紐飾りがつけられている。変哲もない木刀を無造作に構える。木刀の切っ先が地面に触れる。全身の力を抜いている事が解る。非常に落ち着いているが瞳だけは輝きを失っていなかった。聖を囲む五人を見て警戒しているのではなく、目の前の隼人と綾乃を見ていた。

刹那、それにも構わずに一年生五人が一斉に魔術を放った。それぞれ異なる属性の魔術。炎、水、草、電、岩の魔術が聖にほぼ同時に襲い掛かった。接近されて射程が二十センチもない距離で放たれれば例え綾乃でも身の安全の保証はできない。

なのに信じられないことが起きた。聖の姿が消えた。その場から上半身が霞んで消え、撃ち放たれた魔術が今まで聖がいた場所で同時衝突を起して威力を相殺されて打ち消される。すると相殺されたエネルギーが辺り一面に逃げるように広がって、その一帯を土煙を舞い上げた。外側から内側への視界が奪われることになる。外側へゆっくりと広がる土煙ならまだ薄いが、内側は濃霧のようにその場に留まり、聖を襲った五人は互いの姿を辛うじて見える影という視覚情報、または声がする方向でしか確認できない状態にあった。それしか認識できないのだ。嗅覚と味覚は思い切り吸ってしまった土煙によって土の匂い、味で占められていて一時的にとは言え、使い物にならない。冷えた土が炎や電の熱エネルギーによって少しだけ温められて生温かい空気を作り出している。これ以上土煙を吸わな

いように上着の裾などで口元を押さえているため声もあまり通りが悪い。聴覚は土煙の外側から聞こえる先輩達の怒号でほぼ潰されている。

その時だった。

「ぐげっ！」

潰された蛙のような悲鳴が土煙の中で上がった。途端に一年生達の恐怖が膨れ上がった。

「下村！　だ、だだ大丈夫か！？」
「お、俺は大丈夫だ！　山中はいるのか！」
「俺は何ともねぇ！　斎藤は！」
「何ともない！　谷田、お前は！？」

煙の中で互いの呼び合う声がする。聞こえ辛いがそれしか手段がない以上、聖も条件は同じなのだから迷わずこの手段で連絡を取り合う。しかし最後の一年生である谷田の声はいつまで待ってもしなかった。

まるであの有名な人喰い鮫の映画を見ているようで、心臓が破裂しそうに鳴っていた。まるで悲鳴だ。

「た、谷田ぁ！」
「返事しろ、谷田！」
「くっそう、谷田がやられた！」
「あの野郎、姿隠さずに出て来ぐぎゃあ！」

再び悲鳴が上がる。まだ土煙は薄まる様子はない。

「だ、誰がやられた！？」

「あの声は山中だ！」
「あ、ああ、ああああああああああ」
ついに恐怖で精神を潰されたのだろう。一人が絶叫を上げた。
「お、落ち付け岩倉！」
「もう駄目だあ。俺達は殺されるう。奴に食い殺されるあぎゃああああああああ」
最初に声をかけた少年、岩倉が絶叫と共に悲鳴を上げた。止むと何もなかったように土煙の中は静まり返っている。相変わらず騒いでいるのは土煙の外側だ。二年生と一部の一年生が土煙をどうするか叫びながら相談している。その案の中で固まりそうなのは「土煙の中を集中的にぶっ放す」だ。聖と一年生五人共々吹き飛ばすつもりらしい。
残った下村と斎藤はたまらないといった表情でそれを聞くと、
「とにかく巻き添えはごめんだ！　下村、一旦ここから出るぞ」
「お、おう」
聖は放っておいて土煙から脱出しようと決めた。方向感覚は狂っているがどこからでも全力で走ればすぐに土煙から脱出はできるだろう。
二人は合流はしないものの、ただそこから逃れるために走った。土煙から出てしまえばこっちのものだ。出たら先輩達と一緒に一斉射撃に専念すればいい。完璧だ。そう思っていた。
だが、意識熔暗（CFO）の状態にある聖が狙った獲物をそう簡単に逃がしてくれるとは考えなかったので、二人は一瞬だけ聖への警戒を忘れてしまったのだ。自身の激しい呼吸音と心音で辺りの音を掻き消された。数秒前なら気付けただろう音が片方に近寄っていた。

「あぶっ！」
「さ……斎藤！？」
斎藤が微かに悲鳴を上げたのを下村は聞き逃さなかった。
「や、やめ――――あああああああああああ！」
何かが折れる音が立て続けに聞こえた。下村はもう逃げる意思を失っていた。恐怖で思考が停止。膝が震えて前に歩く事が出来ない。辺りでは一斉射撃が行われる合図が行われようとしている。このままでは自分も巻き込まれてしまう。なのに足が思うように動かない。
その時だった。背中に硬い感触が当たった。脳にビリっと電気が走る。喉が詰まった。
刹那、「撃てぇっ」と土煙の向こうで声がして、多数の熱量が迫った。

SILVER BLITZ

隼人と綾乃は茫然としていた。土煙に向かって東所根男子高校生が一斉に魔術を放ったのだ。下手な鉄砲数撃ちゃ当たるとは言うが、撃ち過ぎだろう。十センチも隙間もなく、さらに絶え間なく放たれた魔術達の射出は二十秒ほど続いた。
あまりの威力で土煙など一瞬で払われた。そうして隼人と綾乃の

茫然としている理由が敵総力にも理解できるものとなる。綾乃までが茫然とするのだ。それなりの理由がなければそうならない。
しかしこれは度が過ぎている。絶え間なく射出された魔術もそうだが、

「ば、化物……か？」

と、誰かが呟く。
土煙が晴れた中心では、あれだけの総攻撃を受けてもそこに立っている聖がいたのだから。

「緋、之……？」

この現状を嘘だと疑いたくなった隼人が、目の前の聖を呼び掛ける。だが返事はない。
聖の足元には光となって散る粒子が大量に溢れていた。これが何を意味するのか。それは魔術の総攻撃を受けて死亡した一年生だった。
聖は向かって来た一年生五人を土煙の中で亡き者としたのではない。土煙を前にして成す術を無くした敵総力が土煙への一斉攻撃を予想して、一年生全員を動けないように木刀で両足を打ったのだ。骨が折れなくても筋が酷く痛めれば、関節を捩ってくじければ動けなくなる。捻挫と同じだ。動けなくするだけならそこまで時間もかからない。それに気配の消し方も解らない素人を相手にするなど簡単なこと。逆に気配の消し方など無意識の内に出来たし、感覚をほぼ麻痺させてくれる土煙が聖に味方をしていた。一人一人倒して動けなくすることにより残った一年生は混乱してパニックに陥っていく。その慌てようと言えばまったく笑いたくなるものだったが、気分がそれを許さない。東所根男子高校の残総勢力を決して許す気は無かった。己が全てで蹂躙するまで溢れる力の暴走は止まらない。

動けなくなった一年生をこれ以上の力でねじ伏せるまでもない。一斉射撃の直前に最後の一人を確保して大量の気配の前に差し出した。おまけに背中に掌底を打って肺の中の空気を全て出させ、一時的にだが動けなくした。抵抗されても面倒だ。

一斉射撃は最後の一人が全て防ぎきってくれた。耳元で小さく悲鳴が聞こえる。だがそんなことはまったくもって気にならない。聖が今感じている怒りを鎮めるにはまだまだ物足りない。その他倒れている四人にも直撃したようで、勿論腕輪も粉々になっただろう。一斉射撃が終わった頃には盾にしていた下村という少年は光となってボロボロと崩れ始めていたので地面に捨てた。辺りを一瞥すると同じように四人も光となって崩れ始めていた。

仲間を消してしまった影響で敵総力も動揺を隠せないでいた。今までの余裕はとっくに消え失せている。人質にするはずだった隼人と綾乃の存在など忘れるほどにだ。

「……終わりか？」

腹にゴリゴリと響く様な低い声。小さく呟いたはずだろうに、嫌に耳に入って響いた。

聖は敵総力が簡単に動けないのを見ていると、痺れを切らして行動に出た。手にしていた木刀を手放した。無造作に放り捨てたのだ。カランと小石にぶつかって小さく音を立てて転がるそれに気を取られた。その木刀がもしかしたら爆発するのではないか。そんなことを危惧していたのだが、まったくそんなことは起こらなかった。それどころか光となって散り、聖の左腕の腕輪の珠に吸収された。その光を目で追っていると――――

「遅い」

悲鳴を上げる間もなかった。一番前にいる大男の顔面に聖の右足

の膝がめり込んでいた。俊敏力が半端ない。五メートル以上はあろうという距離を一瞬で詰め、百九十センチはあろう高さを軽々と跳んだ。

「め、ブフ」

変な悲鳴を上げて大男は体制を崩す。聖は最後まで膝を離さず、地面に後頭部を強く打ち付ける。勢いで跳ねてその後ろにいた男に飛びかかる。それは一年生に聖への特攻命令を出した二年生だった。

「う、うわ、うわ！」

二年生は慌てて腕輪を聖に向けようとする。しかし聖の方が断然速かった。その左腕ごと蹴り上げる。照準がずれて火球が上空に撃ち上がる。湿っている木の葉を掠ったが引火はしなかった。何が起こったのか一瞬理解できなかった二年生の腹に聖の蹴りが入る。くの字に折れ曲がった上半身に右腕の肘がアッパーのように顎を穿った。口腔を激しく切り、歯が砕けて刺さったのだろう、激しく口から血を吹きだした。倒れた所で腕輪を踏み潰す。

総勢三十人の敵勢力の中からすでに八人が消えた。残り二十二人。今倒した一人を踏み潰した時にはすでに聖の近くには誰もいなかった。正確には半径三メートルには、だ。二十二人が聖を囲んでいた。今さっきの五人の失敗で何も学ばなかったのか。いや学んでいた。聖が五人に囲まれている時、しゃがんで五人の同時射撃を衝突させて回避した。なので今度は下も上にも腕輪が向けられてどこに移動しようと攻撃が可能なのだ。また聖の俊敏力も見せつけられた。三メートルなんて一瞬で詰めて来くる。なので数人の仲間に向かって掛かられてもその仲間ごと攻撃する気なのだ。

しかし聖は取り囲まれても冷静でいた。いや目に生気がない。力無くそれらを見ていた。すると左腕の腕輪が灰色に光る。『アーツ』

を発動したのだ。先程と同じように左手の掌から何かが現れて右手で掴んで引き抜いた。西洋の剣だった。盾ではない。この状況で有効なのは盾だとは考えるものだろうが、結局は無駄になってしまうだろう。必ず隙が出来るし、一方を防いでも違う場所から攻撃を受けて防御が間に合わなくなる。だからと言ってなぜ西洋の剣なのだろうか。鞘を左手で持って抜剣すると、青白い刀身が姿を露わした。

「そんな……無茶だ緋之！　俺達のことはもう良いから逃げろって！　痛っ」

まだ身を起せない隼人が、絶体絶命の状態にある聖を助けようとする。しかし叫ぶだけで状態を起す余力がもう無い。

しかし綾乃は隼人を止める。小石を投げて綾乃の方に意識を向けさせた。

「馬鹿、ちょっと待ちなさい」

「何だよ痛ぇな！」

「静かにしなさいって言ってんのよ馬鹿。――――あのクズなら大丈夫よ。あの時と同じなら、この程度で終わる筈が無い」

綾乃は静かに断言する。隼人は信じられない顔で綾乃を見ていた。

聖は剣と鞘を構えたまま動かない。隼人が心配そうに見守る中、「撃てぇ！」と敵勢力の声と共に発射された魔術が聖を全方向から同時に、いや多少の時差はあったが、聖を襲おうとしていた。

しかしそこで聖は動いた。だが一体どこに？　逃げる場所はもうどこにもない。

なのに聖の足は強気だった。強く地面を蹴ると、素早いステップを踏んだ。何度も何度も細かく地面を踏み付ける。世界一のダンスパーティーでもこんなダンスは見られないだろう。フラメンコに似ているがそんな正しいステップはない。リズムすら統一されずに、

迫る魔術をライト代わりに二十二人が取り囲む小さな円をステージに踊る聖は美しく澄んでいて、どこか猛々しい。
小さなステージで踊る聖は、多方向から降り注ぐ雨のような魔術を紙一重で回避していた。奇跡のような光景を前に、皆唖然としている。一斉に放たれた魔術は聖を攻撃するどころか、再び逆に利用されていた。激しいと見られていたダンスは実はそこまで移動せずに行われ、向かって来る魔術を紙一重で回避することによって攻撃を放たれた方向にいる仲間に当てさせていたのだ。聖は死角だ。全員が聖を見ているのでその先にいる仲間など見ている余裕などない。そうして魔術が放たれてから死角が移動することにより初めて気付くのだ。放った魔術の軌道上には仲間がいて、互いに向けて魔術を放ってしまったことになる。つまり同士撃ちだ。そして『アーツ』で取り出した剣は鞘と共にダンスに取り入れていた。やはり紙人の回避でもどうしても回避できない魔術があるのだ。そういう時は剣で打ち消すか鞘で弾いていた。
一斉射撃は十秒程で止んだ。互いに互いを撃ってしまったことに気付いて急いで取りやめたのだ。それでも指令が遅れてしまい、何度も中を撃ってしまったことになる。
しかしそれよりも信じられないのは聖だ。あれだけの攻撃を浴びさせても傷一つ見当たらない。
東所根男子高校、そして綾乃と隼人も茫然としていた。

「……？」

もう終わりなのか？　そう言いた気な聖の瞳が敵勢力を見渡す。
聖の回避によって出た被害は、また新たに五人も出てしまった。同士撃ちを浴び過ぎて腕輪どころではなく瀕死の状態にあるのだ。それでもまだ十七人が動ける。そこで新たな指示が出た。撤退の指示だろう。
どうやら聖の動きはこのような広い広間で真価を発揮すると見た

のだろう。十七人は一斉に後退して後ろの森に駆け込んだ。撤退ではなく戦いのステージを変えたのだ。

「阿呆ね……」

綾乃が呟く。その通りだ。木々という障害物が増えたのは聖だけではない。それどころか急に暗闇に飛びこんだせいで視覚が確保できずにいるのだ。気配の消し方すら満足にできないような素人が気配丸出しで闇の中に飛びこんだ。まさに『頭隠して尻隠さず』のようだ。聖にとっては絶好な狩り場となるだろう。

聖は剣を手放す。すると剣は光となって左腕の腕輪に吸収される。またあのモーションで腕輪が灰色に光る。

今度は左手から取り出したのは、拳銃だった。闇の中に向けて数発発砲する。すると闇の中から三人の悲鳴が聞こえ、パリンと腕輪が砕けた音がした。剣だけではない。銃の扱いも慣れている。

倒れている隼人と綾乃の間を通り、二人を一瞥して闇の中に足を踏み入れた。

月が似合う少女　？？（後書き）

なぜ感情を爆発させてしまったのだろう。これによって力量の差は明らかとなった。たった三十人に囲まれた程度では少年は止まらない。

そこには少年の強い決意があったからこそ、だった。

月が似合う少女　？？（前書き）

人を容易く信じれる人間などいないと思っていた。何より自分は信用に足る人間ではないと思っていた。
しかしあの少年と少女は違った。信じてくれた。自分の中で何かが疼いた。
だから僕は――――――

月が似合う少女　??

木の枝の上で会話を聞く。仲間が何かを叫んでいた。

「ふん。俺達はいいんだよ。今回はあいつが生き残る事が重要なんだ。あいつが生き残れば俺達の勝ちだ」

何が勝ちだと言うのか。例え自分一人で逃げ切れたとしても、納得はできない。決してそれは勝利とは言えない。なのになぜあの少年は勝ち誇った顔でそんなことを高らかに言うのだろう。周りに嘲笑されてもなお強気でいられるのはなぜだろう。

「あいつってよぉ、お前を置き去りにして俺らのタイチョーブッ殺した奴のことかよ」

あのガマ蛙のことだろう。

「あ？　な、なんだ……緋之の奴、ちゃんと、仕事したんだ。やるじゃん…」

当然だ。隼人が信じてくれて、しっかりとその場で魔術を使い続けてくれたから。君のお陰でもあるんだ。

「まぁうちのガマ蛙野郎は雑魚だったからな。簡単に殺せるさ。けどよ、いいのかよお前は。見殺しにされそうになったんだぜ？　もしかしたらあのチビ、お前を置いてとっとと逃げちまうかもしれなかったんだぜ？」

そんな訳あるか。

「それが、どうしたってんだ」

君って奴は、なんでそこまで僕を信じてくれるんだ…？

「よくそんなのに命なんざ預けられたな。馬鹿じゃねぇの？」

「はあ？」

「お前もお前だよ。あんな奴よく信じられるよな。普通逃げるぜ？

解りきったことだから俺達はそういうの信じねぇ。だから強い。お前らとの違いだな。あのチビが逃げて勝ちとか訳解らねぇが、その代わりお前達は負けた。これが事実だ」

言い返せない。事実だ。聖がガマ蛙を消しに行ったので、代わりに隼人が第二の増援に捕まった。

信頼関係に亀裂が入る寸前だった。隼人は信じて戦ってくれたのに、最後には聖がそれに応えられなかった。聖がその場から逃れられたので、隼人が負けてしまったのだ。後で謝れば済む問題ではない。

あの男が言うとおり、負けなのだ。

なのに。

「違ぇよ」

隼人は即答した。聖は絶対に悔しそうに表情を歪めるだとか、後悔するだろうとか思っていた。しかし隼人は自信を持った顔で堂々と即、断言した。

「俺達はこんなところで終わりゃしねぇよ。まだまだこれからだ。お前ぇ達はこれから俺達を倒して緋之を追うんだろうけどよ、そうはさせねぇ。何人か道連れにしてあいつの負担を軽くすりゃよ、ま

だ生き残れる可能性はあるだろ」

こんな状況なのに隼人はまだ聖を気遣っていた。仲間だと思ってくれていた。しかもまだまだ終わらないと、自身の未来もまだあると言ったのだ。

「ちょっと、何で私まであのクズのために動かないといけないの。ふざけないで」

綾乃は少しだけ微笑すると、隼人を睨んだ。

「でも結局は戦うことになる。結果は同じだ」

「馬鹿はこれだから。私は死なないわよ。死ぬんだったら一人で勝手に果てなさい」

綾乃もまた、諦めていないのだ。まだまだ戦う。決して聖のためとは口にはしないものの、気持ちは隼人と同じだったのだろう。綾乃も強気な態度だった。何も保障がないのに、なぜそんなことが出来るのだ。

このやり取りが再び嘲笑の種となっても、二人は怒ったりはしない。まだこの戦況を引っ繰り返せる切り札を持っているように、笑っていた。そんなもの無いだろうに。

「あいつは、緋之はこの先きっと何か仕出かす。それに期待してんだよ。ワクワクしてんだよ。俺がその先を見てみたいからな。ここで死ぬ訳にはいかないんだ」

「……っ！」

喉が詰まりそうになる。息を呑んだ。目頭が自然と熱くなる。

しかし同時に罪悪感で押し潰されそうになった。あの時隼人に相

棒になってくれと頼んだのも、結局は苦しみから逃れるための手段でしかなかった。本当は逃げたかったのに。本当の自分は違う。こんなに信頼を受けていいはずがない。逃げようとした聖を信じる必要なんてどこにもないのに。あの少年は諦めなかった。

「別にあのクズがどうなろうと知らないわよ。……けど生きてるならそれに越した事はないわね。普段からクズだったけど、この前はやる事はやったことだし。期待されてるわね。私はしてないけど」

期待されているのか貶されているのかは不明だった。

だが綾乃はマイナスで物を言ってはいない。きっと聖を信じている。

するとここで隼人と綾乃が蹴り飛ばされて倒れた。綾乃は胃液を口から吹いて、そこに顔面を押しつけられようとされている。その光景を見て、聖は何かが弾けそうだった。木の枝を握る。自分では気づいてはいないものの、強靭な握力ですぐに枝は圧し折れた。音は立たなかったので気付かれてはいない。

――――僕は何を迷っていたのだろう。

自問する。自答はすぐには出せなかった。力を出すことの自己嫌悪は何度もしてきた。だが今、聖の力が求められているのではないだろうか。

もし求められているなら、それは――――――

「殺す」

ハッとして視線を戻す。後頭部を踏みつけられていた綾乃が顔を起した。そこには魔術を発動して綾乃を消そうとしている男がいた。

顔を上げた綾乃がこっちを見た。綾乃は木を見たのだろうが、その先の聖まで気付いていなかった。一瞬だけだが自然な表情を浮かべていた。

聖はずっと綾乃を見ていた。上を見上げた時、心臓が跳ねた。泥に塗れていたが、その表情はとても美しい。そんな綾乃と目が合った。なのに綾乃の前に立つ男は今にも魔術を使おうとしている。

止めなければ。絶対に、今度こそ守って見せる。

自己嫌悪が思考から弾き飛ばされる。全力で封じていた真価が鎖を千切って発揮されようとされている。今度はそれを受け入れた。聖には今、力がある。あの二人を守れる力が。祖母に教わった教えに従う。『自分の力を振るう時は、必ず守るモノを守る時に真価を発揮すべし』今がその時だ。

「守る」

呟く。小さい音だったが、そこには途轍もない力強さがあった。命の鼓動。それすら巻き込むような、力の本流をも味方に付けたかのような。

「僕は、必ず……」

無意識に左腕を前に出す。左腕の手首には腕輪があった。左手の中指は綾乃を消そうとしている男の頭部に向けられている。

「あの娘(こ)を……綾乃を」

左手の掌から何かが出る。それを右手で掴んだ。

「守るっ！！」

先端が鋭利な石だった。素早く抜き取って投擲した。狙いは男の左腕。腕輪を破壊する。そして第二として拳サイズの石を出す。さらに投擲して男の頭部に当てた。

「ご、ぐふ！」

悲鳴が二回聞こえる。攻撃はしっかりと二回当たっていた。腕輪を失い、頭部に攻撃を受けた男は体制を崩して泥の中に顔面を沈めた。

綾乃が唖然として男を見る。

無意識の内に『アーツ』を使った聖は木の枝から飛び降りた。倒れた仲間を見て東所根男子高校の軍勢はざわついている。しかし着地した時の音を聞き、一斉に注目を集めた。

闇の中に聖が立っている。腕輪の光は消えていた。

改めて綾乃を見た。驚いている。隼人も同じだ。聖は二人しか眼中になかった。聖がいない間に何かされなかったのか、怪我はないのか探った。もし少しでも怪我があればそれこそ聖の怒りの燃料となる。いやもうそんなものが無くても聖は憤怒していた。

絶対に許す気は毛頭無い。「許してくれ」と慈悲を求められても与える気など無い。

ただ、ただ殲滅するのみ。

「――――――――っ！！」

意識が昂ぶる。

視界に薄く紅色が掛かる。これが聖の本気。意識が熔暗する。しかし意思ははっきりしている。

守る。二人だけは、自分がどれだけ傷付こうが構わず守る。それだけだった。

そして一人の男を地面にねじ伏せた後で高らかに左腕を掲げ――

――……

SIVER　BLITZ

闇の中では悲鳴と銃声で占められていた。
聖の一方的な殲滅だ。気配を消して闇に紛れ、近距離から発砲する。今まで勝利に酔いしれていた少年達は恐怖でパニックになって逃げ纏う。戦う場所を変えて状態を整えようとしたところが裏目に出た。闇の中こそ聖の恰好の戦地だ。
どこまでも追い詰めていく聖。その頃、広場では隼人と綾乃が明るい所からそれを見ていた。一方的すぎる。隼人とは比べ物にならない程に強い。十人に減ってしまった今でも変わらずその数を減らし続けている。確かにこれからが期待できる人材だった。

「すげぇ…」

隼人は正直に感想を述べていた。
二十二人に囲まれても一歩も引かなかった所。そしてあの誰も使わずシルバーブリッツには不向きと言われていた唯一の物理攻撃魔術である『アーツ』を使いこなしている所。
実際に隼人も練習で『アーツ』を使ったことがあったが癖が強すぎて使いこなせなかった。何より『アーツ』は数ある属性の中でもイメージがしっかりしていないと形成出来ない魔術だった。隼人にはそれが足りないので、大雑把でも補正が効く地属性が一番合っているのだ。
しかし聖はそのイメージがしっかりとしているのだろう。武器の形成がしっかりしているので拳銃などを出してもしっかりと発砲で

きるのだ。
綾乃も無言で戦況を眺めていた。どこかもどかしそうだった。
と、その時だった。闇の森林から飛び出して広場に駆けだした二人がいた。視界が良い方を選んだのだ。それでも勝てるとは思っていない。その代わり一番有効な手段をとるつもりだった。その二人は隼人と綾乃の傍に駆け寄ると、途中で拾ったのだろう。先端が鋭利な木の枝、石を握って隼人と綾乃を抱えた。

「おいチビ！　出て来い！」
「それでこれを見ろ！」

チビとは聖を指している。もうすでに敵軍勢の人数は五人になっていた。怒涛の反撃だ。そこでたまらずに人質を思い出して急いで回収したのだ。
すると闇の奥で気配が動いた。物凄い怒気。綾乃と隼人の危機にすぐに反応した。闇の中から猛獣が姿を現すかと思った。綾乃を固定している男の腕が震えている。闇から姿を露わしたのは細かい傷などで全身をボロボロにした聖だった。闇の中で少し反撃の受けたのだろう。右足の傷が一番目立った。

「その二人に手を出すな……」

低く唸るような声。全身が傷ついている状態でも物凄い威圧感を出していた。威圧だけで気圧されそうになりながら二人は何とか踏ん張った。まだ勝機はある。その為に今は負けられない。

「これを見ろよ。ちょっとでも近づいてみろよ！　こいつらの喉、掻っ捌いてやるぜ」
「人質取っちまえばこっちの勝ちだな！　動くなよ？　動けばこいつらの命は――――」

あまりの出来事で発言が止まった。聖が突撃したのだ。そのままの速度で。かなり距離があるが聖なら三秒とかからず詰められる。

「こ、この野郎！」

咄嗟に鋭利な武器を隼人と綾乃に振り下ろす。体力に余裕がないためあまり動けない綾乃と隼人は来るであろう痛みに備えたが、視界が暗くなり、直後に紅くなったことに驚いた。

綾乃の双眸が限界まで見開かれる。

「あ、あんた……何やって……」

聖は距離を詰めた直後、隼人に向けられた枝は右腕で、綾乃に振り下ろされた石は左肩で受けたのだ。　切り裂き、突き刺さる武器は聖の身体から鮮血を吹きださせた。

「決めたんだ。二人は傷付けさせない。守るって――――んっ」

聖の鮮血が眼つぶしとなり一瞬怯んだ相手の二人を突き飛ばし、腕輪を蹴って潰した。直後に綾乃と隼人を人質にとっていた二人は光となって散った。

「緋之！　おい、しっかりしろ！」

隼人が叫ぶ。聖も流石に疲労が蓄積したのだろう。そこに出血と傷だ。二か所の傷は深く、激しい出血を促していた。それはつまり通常よりも体力の消費が激しくなってしまうということになる。歩くだけでも体力は通常の何十倍も消費してしまうのだ。これ以上はあまり持たないだろう。

しかし聖は、まだ諦めていなかった。それどころかまだ戦える瞳をしている。

「あ、あんたは……私達のことなんて守らなくていいのに、何でわざわざ跳び込んでくるのよ！」

綾乃の叱責が聞こえる。聖の耳元でガンガン響いていた。

「ぐ、く……」

傷の激痛で何もしていないのに体力が減る。聖はすでに意識熔暗（CFO）を解いていた。激痛が意識を呼び覚まし、綾乃の大声でさらに鮮明になる。

途端に両足がガクガクと震えだし、ついにはその場に座ってしまった。

「おい！」

「クズ！」

体力がそろそろ回復に辿り着いた綾乃と隼人が、少ない体力と痛い身体に鞭打って両手を伸ばせる限り伸ばす。やがてくる重さに備え、思い切り力を入れた。主に隼人が力を入れたため綾乃はそこまで重さを感じなかった。いや元々聖は部活やトレーニングなどで余計な脂肪を絞っている。着痩せしてもないのに腕や足は細く、しかし実に筋肉質だった。それでもあまり体重はないようだ。

今まで暴れてこれた理由は鍛え抜かれた身体の恩恵だ。しかしもう限界だ。受け止めた時に眼前に聖の

傷が迫り、思わず顔が引き攣ってしまった。聖はもう休まなければならない。いや応急処置を済ませてから絶対安静にさせて一刻も現実の世界に戻る必要がある。綾乃はもう一桁まで減ってしまった自

分のＭＰを確認してこれから何が出来るか考えた。それは隼人も同じだ。
だが見つからない。この状況を引っ繰り返せる何かが。何も無い。その先にあるのは絶望。
そばにいる聖は項垂れて二人に身体を任せている。意識ははっきりしているものの肩で大きく息をしている。呼吸回数が速い。そこまで専門なことは解らないが、このままでは危険な状態だということだけは二人でも嫌という程解っている。

「このクズ！　……何で戻ってくんのよ」

どうしようもない怒りが綾乃の胸に込み上げた。原因は二つ。あまりにも愚考といえる行為で敵陣に乗り込んだ聖。そして最後に聖を傷付いて限界な状態にさせてしまった自分に。配分は考えていた。だがこんなことになるとは思わなかった。

「月な…んと…る本……を、今度こそ……守りっ」

聖は息絶え絶えで何とか答える。月波さんと鳴本を今度こそ守りたかった。そう言いたかったのだろう。それで聖はあえて敵陣に飛びこんだ。第一と第二が合わさった敵の軍勢を一網打尽にするために。
土壇場だったがやっとまともに魔術を、『アーツ』が使えるようになったのにこんな体たらくを晒してしまった。少し恥ずかしいし、悔しくもある。
隼人は聖だけでなく自分もそこまでできないことを悔しがり唸っている。
綾乃ももう何もできない。一桁しか残っていない僅かなＭＰでは一人も倒せないだろうし、綾乃の使用して消費する最低コストの魔術は少なくとも二桁からだ。一桁では何もできない。悔しい。聖を

支える手に力が入り、彼のYシャツを強く握りしめていた。
残りはたったの三人。今の二人を一瞬で消したことでさらに恐怖を与えたか、それとも人質をとっても構わずに突っ込んでくる勢いを恐れたのか、三人は今までよりも慎重になり、中々闇の中から出てこようとはしなかった。

「残り三人……おい月波、俺はもうMP無えよ。だから例え一人でも相手に出来ねぇだろうな。そっちは？」
「同じよ。———チッ、こんなことならMP交換のカードも腕輪に入れるんだった」

MPは交換できる。互いが接触して交換の意が同じならば交換は成立する。交換ではなく一方的な譲渡も可能で、それは光属性の魔術だった。膨大な火力を有する魔術は大量のMPを使用する。綾乃にとっては補給が必要となる。
この場合は『アーツ』を使用した聖から強制的にでもMPを抽出して補給するのが最善だが、今日に限って綾乃はそれを入れることを忘れていた。多分今回味方は自分の傍にはいない。孤立した戦いが続くのだろうと予想したのだ。それは的中し、序盤から聖と隼人を逃がす為に第一の軍勢を自分に引き付けた。
聖が使用する『アーツ』はMPの消費があまり見られない珍しい魔術だ。唯一の打撃系の魔術でもあってそれが当然なのだろう。
綾乃が後悔している時だった。聖達がそこから全く動かないことで警戒を解き始めた残りの三人が動きだした。綾乃と隼人が機敏に反応する。闇の中で何かが動いている気配が手に取るように解る。

「やべぇ、気付かれた」
「まずいわね。もうあんたと私、何もできないじゃない」
「せめて緋之だけは守りたかったんだがな……ここまでみてぇだな」

最後に隼人が苦笑いを浮かべる。綾乃は呆れて溜息を吐いた。
東所根の最後の三人が闇の中から姿を現す。三人とも身長が百七十は超えている。隼人よりも高い身長で体つきも良さそうだ。筋骨隆々というわけでもないが、隼人と喧嘩すれば、隼人が十秒で倒されることが解るくらいの男が三人並んでいる。
もう終わりかな。勝は何をしているんだと思いながら、笑いながら近づいて来る三人を眺めた。

「くへへ、もうそのチビは使い物にならねぇらしいな。お前ぇらよりもボロ雑巾じゃねぇか」
「馬鹿な奴だったよな。確かに三十人の殆どが倒されて残りが俺達だけになっちまったし。そこは頑張ったんだろうが、まぁ無駄だったよな」
「俺達が手を出さなくても死ぬんじゃね？　このチビ」

反吐が出る笑い方で近づく三人を綾乃が睨む。聖を馬鹿にしたのに、綾乃が怒っていた。

「あんた達みたいな雑魚に見下される程、このクズは下衆でもないわよ。あんた達よりも少しはマシだわね」

強気に笑みながら挑発する。しかしそれはも通じなかった。冷やかしの種にされるだけだった。

「あ？　何こいつ。頑張ってチビ庇ってやがんの？」
「そりゃお前ホラ察してやれよ。この女、チビのこと好きなんだぜ？」
「かーっ、勿体無ぇ。よく見りゃ結構可愛いのによ、こんなチビのどこがいいんだよ。俺の方が百倍良いっての」

「おまっ、そりゃねぇわ」

月明かりだけが光源なのでよく解らないが、綾乃の顔は真っ赤になって震えていた。羞恥と怒りだ。力任せに殴ってやろうかと拳を握る。

しかし、腰の辺りで何かがシャツを引っ張っていた。それが聖の手だと解ると、握っていた拳よりも聖に意識が向いてしまう。

「月波、さん。ごめんね、僕なんかとじゃ、恥ずかしいよね……」

小声で聞こえる聖の声は敵三人には聞こえていない。綾乃は「は？」と小声で聞き返して、その後は黙っていた。いつの間にか肩を切らしていた呼吸は少しだけ落ち着いていた。

「月波さんと鳴本はもう動けないんだろ？　聞こえてた」

ずずっと上半身を動かして綾乃と隼人から離れようとするが、痛みでうまく起き上がれず、バランスを崩して前に倒れそうになる。綾乃が急いでそれを全身で受け止めた。綾乃が聖を抱きしめている体制になる。首辺りに聖の吐息が掛かる。耳に呼吸音が聞こえた。肩に感じる重みと温もり。全身に聖を感じていた。三人が「ヒュー！」と叫ぶ。しかし今、それはまったく気にならなかった。

「でも大丈夫。ちょっと待ってて」

小声でそれを告げ、綾乃が何の事かを聞こうとした。すると綾乃の耳元でギリッと歯軋りの音がする。　刹那、事は起きた。

「んがっ」

目の前で悲鳴がする。見ると聖の下半身が左足だけで持ち上がり、右足突き出されていた。それが三人の内の左の男の左腕に直撃し、腕輪を破壊していた。左腕は蹴りの威力で男の喉を深く突いていた。喉が詰まって男はその場に蹲る。そして光となって散り始めた。

聖はまだ動けたのだ。突き上げた右足を畳んで戻し、左足と共に震えながら両足でゆっくりと立ち上がった。残った二人が慌てて離れる。綾乃と隼人は驚いて聖を見上げた。動いたことにより傷口から再び鮮血が溢れ出る。綾乃が慌てて何かを言おうとするが、それよりも先に聖が口を開いた。

「僕が残りの二人を相手をするから。だから二人共そこで待ってて？」

左腕の腕輪が灰色に光る。出したのは再び剣だった。震える右手でそれを握り、抜剣する。鞘を逆手持ちにして構え、剣の切っ先を離れている二人に向ける。双眸はまだ光を失ってはいない。

「だが緋之！　お前これ以上は限界だろ！」

隼人が叫ぶ。敵勢に味方の情報を教えるのはご法度だが、多分二人共気付いているのだろう。今更そんなことを知られても仕方が無いし状況は何も変わらない。それどころかそれさえも利用してみようかと聖は内心でほくそ笑んだ。

「確かに一般的に言えば限界かもしれない。けどまだ身体は動くよ？　僕は動けるのならば動けるだけ動くよ。それって限界って言うの？」

限界なんて自分で決めるものだし、超えるものだろ？　と聖は強気で笑んだ。これで敵勢の二人は少なくとも混乱したはずだ。隼人

は確かに聖を限界だと言ったが、本当に聖が限界なのかは知らないのだ。実際に他人の体力なんて今どうあるかなんて把握することなどできない。

「――――心配ないよ。すぐ済む」

その瞬間、聖は己の体力全てを燃やした。エネルギー残量全てをエンジンに送り、エンジンの回転数を上げて瞬間的にだがリミッター寸前まで力を出す。マラソンなどのラストスパートと同じだ。今までふらついていた足取りが急に鋭くなる。指先まで力が行き渡り、揺れていた刀身がピンと伸ばされて鋭い動きとなる。

意識熔暗（CFO）とは違う。それ以上の何か。聖の潜在能力の全て。

ゆっくりとした歩みが一瞬で全速力に到達する。一閃。走ると同時に全力で剣を振り抜いた。二人は魔術を使おうとしたが間に合わなかった。

居合抜きとはまた違う剣術。振り抜いたモーションは、一回転だけに見えた。しかし実際には三回転していた。全力だったのだが傷の影響で三回転しか出来なかった。傷と疲労と消耗さえなければもっと回転できた。が、相手がただの不良に近い男だったので三回転だけで仕留められるのだ。

「――――――あ」

その時、聖が呟いた。

背後にいる二人の内一人は光となった。腕輪を何回も斬りつけて破壊した。しかしもう一人は光にならなかった。

「遠かったか……な」

カクンと両足が折れて膝から泥の中に突いた。今度こそ限界だっ

た。

「何だよ――――おい、一体何がどうなってんだ？」

隼人が解らなそうに呟く。実際綾乃にも何が起きたのはか解らなかった。

聖が限界で蹲り、残りの一人が剣を受けても消えていなかった。しかし動いていなかった。

「お前っ……何しやがった」

残りの一人が絞ったような声で聖に問う。顔は厳ついがその場から一歩も動いていなかった。

しかし聖は何も喋らない。俯いていた。

「おい緋之、大丈夫か？」

隼人もやっと動けるようになり、ゆっくりと起き上がる。綾乃もやっと起き上がった。

聖は十メートル程動いていたが、体力少ししか回復していない綾乃と隼人には遠くきつい距離だった。

「ひじ…緋之？」

綾乃が何か言いかけたが修正してしまい、珍しく『クズ』と呼ばなかった。聖の目の前に座る。近くで見た聖は、危険な状態だった。呼吸が浅い。やはり限界を超えて無理をしていた。

「の野郎……三人まとめて吹っ飛ばしてやるっ」

動けないが魔術は使える。男の腕輪が赤く光った。
しかし、その光は不発に終わった。

「はいそこまでー」

男の背後で声がした。同時に男の腕輪が凍りついた。

月が似合う少女　？？（後書き）

やっと戦いが終わる。長かったようで短かった日々。祖母に武術を教わるよりもハードな戦いだった。とても疲れた。
けれど、今までとは違うような感覚だった。
月がとても綺麗で、彼女はそれに重ねると、今までと違って見えた。
とても似合っていた。

月が似合う少女　？？（前書き）

戦いが終わった。やっと終わった。死に物狂いで戦い、結果はこちらの委員長が教えてくれた。
するとあの少女の態度が一変し……

月が似合う少女　？？

聞き覚えがある声が後ろで聞こえた。というかつい三十分程前に別れたはずの先輩の声だった。
綾乃はそれを聞いてムッとして、隼人は待ちわびた感じで涙した。

「こ、小泉すわぁん！！」

顔芸にも程がある。隼人がやっと現れた勝を見て叫んだ。勝はそれに笑って手を振る。
一方腕輪を凍らされて封じられた東所根男子高校の最後の一人は、表情まで凍りついていた。

「こ、小泉……だと……あの去年、神明高校の一年エースだっていう、小泉勝か！？」
「よく御存知で？　でももう遅い。そっちの委員長は先に潰しといたから。この新一年を倒した所で何も変わらない。負けっていう事実はね」
「そうか、お前は去年から得意だったな……ほとんどの高校の図書委員長が隠れているのに、それを見事に探し出して潰す。委員長キラーっていう異名だったな」
「それも当たり」

勝は面白そうに笑った。前方では綾乃が舌打ちしていた。と、やっと聖が動いた。

「小泉さんが、来てくれたの？」
「そうよ。……それよりもあまり喋らない方がいいんじゃない？もう危険な状態なんだから」

全身の力が流れる血と共に抜けて行くようだ。聖は手を伸ばして肩を支えてくれる綾乃に身を委ねていた。綾乃はそれを嫌がる事無く、むしろ自らそうするように誘導していたように見えた。

「ううん。それよりも一つ教えて？　委員長キラーって、何の事？」

「解ったから、それ聞いたらもう喋らないで。――――シルバーブリッツにおける勝利条件の一つに、各図書委員長の腕輪の破壊があるの。先に図書委員長の腕輪を破壊すれば勝ち。結局は今回私達が頑張る必要はない訳。けど必ず図書委員長が参加しなくてはならない。なんてルールは無いのよね。けど図書委員長が参加することによって特殊なルールが発動する場合もあるわ。私達の場合、消費MPが減ったりなんてね。今回はそれがあっちも、こっちにも無かったみたいだけど。けど委員長が戦いに参加することによって戦いが有利になる。それはもう証明済みだから。殆どの確立で各高校は委員長を参加させるみたいね」

中々複雑なルールだ。つまり図書委員長がシルバーブリッツの戦いに参加することによって確率で特殊効果が発揮される場合もあり、それが戦局を動かすキーにもなる。そういうことだ。

すると勝が聖の隣で膝を折って目線を合わせた。一年生三人が勝に注目する。

「けどその代わり図書委員長がやられちゃ負けになるし。だから図書委員長は誰もやりたがらないんだ。勝利の鍵を握っていると同時に敗北の鍵も握ってるし、一番最初に狙われるし。だから図書委員長は隠れるか、あの東所根男子高校は小さな一年くんが脅されて図書委員長をやってたよ。勿論岩の中に隠れてた。可哀相だったけど、まぁサクッと作業を済ませたけどね。護衛なんかがいるとそこに図書委員長がいるよ。って伝えてるみたいだし。周りに数人いても同

じことだ。でもまだ甘かったけどな。いかにもって場所に隠れるなんて裏の裏を突けば簡単に出て来る出て来る。俺にとっちゃ簡単だったよ。お前達三人が暴れてくれたお陰で俺は誰にも鉢合わせになること無く行動できたし」

ポンポンと三人の頭を軽く叩き、ニッと笑った。

「三人共生き残ったし、言う事無し文句無しの満点。よく出来ました」

やり遂げた。ついにやり遂げた。達成感が聖と隼人に込み上げる。自然と口元が歪み、少しだけ持ち上げた聖の拳に反応して力を弱くして隼人も己の拳をぶつけた。

これで後は後ろで動けないでいる二年生を消すか、時間が経過すれば現実世界に帰れる。勝ったのだ。　気持ちは満足で溢れ返る――――と思いきや、

「何がよく出来ました。よ。ふざけてんの？」

聖の肩がビクンと跳ね上がる。耳元でいきなり怒気が含まれる唸り声を上げられれば誰でもそうなるだろう。隼人は恐ろしそうに手足を使って後退る。被害を被ってもすぐに逃げられるようにするためだ。

勝は驚いたように綾乃を見下ろした。

「あのね。小泉が来なかったせいで私がどれだけ痛い目にあったと思ってるの？　このクズが土壇場で少しは使い物になったから助かったけど、クズ石のままだったら私達はここで終わってたのよ！？

ふざけるのもいい加減にしなさいよ。こんな何も保障が無い賭けに参加するのはもうご免よ。そんな雑魚見つけるのに三十分もかけ

ないで、もっと急いでこっちに来なさいよ！」

一通りの罵倒を終えて、勝が「ほうほう」と聞き流していることにも気付かずに、今度は聖に怒りの矛先を向けた。

「大体あんたもあんたよ馬鹿じゃないの？　あんなことするなんて本当にクズねクズの象徴ね。なんでこっち来るのよ。あっちの馬鹿があんたを逃がしたってムカつく程のドヤ顔で自慢してきたから安全かと思ったらあの暗い所からぬぅっと出て来るし幽霊じゃないのって最初は思ったけど足付いてるし！」

傷は避けているが綾乃の両手は聖の胸倉を掴んで揺らしながら怒鳴っている。聖が危険な状態だということを忘れているのか。

隼人が綾乃の剣幕に恐れを成してがくがくと震え、そばに移動してきた勝にしがみ付いている。勝は「はいはい」と隼人の背中を掴んで持ち上げた。

「あの怒り具合だと止みそうにないな。勝敗は決したからもう戻れるし緋之の安全は保障されたもんだ。こっちまで被害被らないように、ちょっと離れようか」

移動につては賛成だったので隼人は迷うことなく首を縦に振った。そのまま持ち上げられ、闇の中に消えた。

五分くらい淡々と説教を続け、聖の意識が朦朧としてきた頃だった。一通りの罵倒を終えた綾乃はふぅと一息付く。そしてやっと聖の胸倉を離した。

力無く倒れてくる聖を正面から受け止める。聖は「ん？」と胸元に当たる柔らかく暖かい物に触れて少し驚いていたが、リアクションをする体力がもう無い。綾乃の顔側面が頬に当たる。髪から甘い香りがした。肩が狭く、少女だなと今更だが理解した。

「でも兎に角、無事で良かった……」

あれ？　と疑問を覚える。いつもの棘のある物言いとは違う柔らかい声色。本当に心配していたかのように声が震えていた。綾乃の両手は聖の腰辺りに回されて強くシャツを握られていた。

「月波さん……？」

「……」

何かがおかしい。いつもの彼女ではないみたいだ。

突然抱きしめられる行為の一歩手前辺りまでされてしまっては、今まで意識していなかった何かが目覚めてしまうかのよう。いや違う。本来の認識で良かったのだ。周囲から信頼と尊敬をされて囲まれて、聖を「クズ」と呼ぶ彼女を、何か別の存在なのではないのかと誤認していた。本当は聖の周りにいる少女と同じなのだ。

顎に伝わる振動。身体が震えている。

「月波さん、泣いてる……の？」

「……煩い」

少しいつもの彼女に戻った。でもそれでもいいのではないかと思う。

結局は綾乃の考えていることは解らないが、今は聖を素直に心配してくれているのだ。理由は未だに解らないが。でもいつか教えてくれるのだろう。

なら今だけは、こうして彼女を落ち着かせてあげるのもいいじゃないか。と自分に言い聞かせた。

綾乃がすぐに落ち着いた。ゆっくりと身体を離すと、聖をその場にゆっくりと横倒せた。楽な姿勢を取る為だ。

「ごめん。少し取り乱した」
「い、いや。僕は大丈夫だから」
「――――こんなクズに気を使わせるのは心外だわ」

聖が苦笑いで返すと、綾乃はツンとそっぽを向いた。目が少し赤かった。泣いていたのだろうか。
と、ここで聖は思った。それを口にした。

「月波さん」
「何よ」
「月波さんの後ろ、丁度満月がある。」
「それが何よ」

クスッと笑い、素直に思った事を言った。

「月波さんと満月のツーショット。すごく似合ってる」

聖が見上げた綾乃の姿の後ろには、いつの間にか分厚い雲がそこから排された夜空だった。丁度綾乃の背後に満月がいる。いつも見ている月よりも大きく、美しく、淡い月光を放って戦時よりも明るかった。
大きな満月を背にした綾乃がとても綺麗だったので、素直にそう述べた。
綾乃はふと背後を振り返って月を見た。確かに満月だった。

「戦いが終わる合図ね。ここで戦いが終わると雲が無くなるのよ。そしてあの満月は勝者だけに見える。って小泉と百合子さんが言ってた」

綾乃は聖と同じ一年生だが一年生の中で最初に入ったメンバーなようなので、すでに二回来た事があるらしい。いや一度は聖も連れて来られているか。それなのに綾乃は前回一人で戦って勝っているのだ。弱小高校だったとは言え一人でここまで出来るものなのだろうかと一度は考えたがすぐに結論が出た。先程まで綾乃は一人で東所根の第一軍勢を一人で相手をしていたではないか。質ではなく量で押し切ろうとした作戦を一度は撃ち破ったのだ。聖も一人で突っ込んで行ったのだがこの様だ。

「勝った後に見る月は本当に綺麗なのは同意するけどね。戦ってる最中はそんな余裕なんて無いもの。――――ま、認めてあげるわよ」

「え？」

「あんたが使い物になるって、少しだけ認めてあげる。けどもうあんな無茶はやらかさないことね。今回でそんな様なんだから、次はこれだけじゃ済まないわよ？　今回当たった東所根は弱いからそれで済んだんだから。運が良かったわね」

ふん。と鼻を鳴らして前髪を額に押し上げる。聖も「そうする」と素直に綾乃の忠告を聞いた。

すると今まで綾乃の背後に位置していた満月が歪み始めた。聖が少し驚いて見ていると綾乃もそれに気がついた。

「大丈夫。もう終わるだけよ。ほら」

綾乃が指をさす方向を見た。そこには聖が動けなくして勝が魔術を使わせないようにしていた東所根の最後の男がいた場所だった。しかしその男はもういない。満月が聖達に見えたと言う事はもうその男は必要ないということになり、先にそこから消えたのだろう。

「意識が飛ぶけど逆らわないで。そのまま流れに身を任せなさい―

――次に目を覚ましたら保健室よ」

そういう流れになるのだろう。そう言えば聖が初めてこの世界から帰ってきた時も保健室にいた気がする。そんな事を思っている内に、急に物凄い眠気が襲ってきた。出血からではない。逆らえない眠気に少しだけ抗い、横を見る。聖の隣に座り、こちらを見て少しだけ安心した顔をしている綾乃が見えた。綾乃もまた眠気に襲われているようで、虚ろな瞳だった。

途中で意識があるか無いかの判別が解らなくなり、そこから意識が途絶えた。

SILBER BLITZ

言われた通りだった。瞳を開く前に鼻孔に侵入してきた薬品の匂いでここが保健室であることが解った。

その直後、顔に何かが近づく気配がした。何か細い物。それと笑いを必死に堪えているのだが時折吹いてしまうような息使い。多分これは――――

「んわっ！」

聖がその場でカッと双眸を見開くと、すぐ傍で悲鳴が聞こえた。声ですぐに解った。

「……鳴本、今何しようとしてた？」

隼人が聖に顔に何か細い物を近づけて笑おうとしていたことはもう解っている。そして隼人の右手に握られている物を見た。黒の水性ペンだった。

「んー、中々起きない緋之くんに落書きしようとしてたのよねー」

聖の視線に気付いて隠しそびれていたペンを背後に隠そうとすると、そのペンがひょいと手の中から消えた。取り上げられていた。隼人の背後にいつの間にか百合子が立っていた。

いや気付くとそこには図書委員の全員が揃っていて、聖が横になっていたベッドを囲んでいた。

「え？　へ？」

何で皆ここにいるのか解らずに、聖は一人一人を見た。

「緋之が一番重傷だったからな。傷は一瞬で治るんだけど意識が戻るのがちと遅くなっちまうらしいんだよな」

勝が笑って言う。

そう言えば身体の傷はどうなったのだろう。ゆっくりとベッドから身を起す。少しだけ眩暈がした。すると背中に誰かの腕が回っていた。

「緋之くん、大丈夫？」

ちさだった。ベッドの奥、つまり聖の頭側に座っていたこともあり、逸早く手を伸ばせたのだ。ちさは優しく「ゆっくりでいいよ。

力抜いてもいいからね」と言って身を起すのを手伝ってくれた。ゆっくりと上半身の全てを起き上がらせたことを確認し、ちさが離れた。聖はシャツの右腕を捲り、胸元は第三ボタンまで外すと左肩を出した。確かに傷が消えている。痛みもない。

「ったく、あんたは無茶し過ぎなのよ」

最後に隣のベッドに腰掛けている綾乃が言った。

「……終わったのか？」

腑に落ちない顔をして聖が皆に問う。

聖以外の五人はそれを聞くと、綾乃以外が笑顔で頷いた。

「今回は一年生が頑張ってくれたからな。特に緋之は初めてにしては上出来だった。土壇場で『アーツ』が使えるようになっちまったみたいだし。一番野郎共を倒したんじゃないか？」

勝がわしゃわしゃと聖の髪を撫でまわす。聖はまだ信じられない様な顔でされるがままになっていた。

保健室を見渡すと保険の先生がいないようで、今は六人しか保健室にいない。窓の外を見ようとしたがカーテンで遮られれいた。カーテンの下から少しだけ夕日が見えた。壁にかかっている時計を見ると、十八時を過ぎていた。

帰って来た。やっと帰って来たのだ。

と、聖が安堵した時だった。バンと音がして男性が転がるようにして保健室に入って来た。聖にとっては見慣れている男だった。

「大兄ぃ」

「悪い。校長に今回の報告をしたら遅くなった。いやまぁ喜んで笑

ってただけなんだけど、テンションが高くてな。あのおじさん」

走って来たのだろう。少々汗をかいたようで、ジャケットを脱ぐと机に放り投げた。皺が付いてしまうと思ったが、聖の知っている男――――大胡教師にとってはそんなことは問題ではなかったようだ。むしろ目の前でベッドに座っている聖の方が気になって仕方がない。そんな顔だ。

「聖。よく頑張ったな。本当に、良くやったよお前。生きて帰って来るだけで良かったのに、あんなに素手で殴り倒すんだもん。心配しちまったけど、『アーツ』が使えるようになったしな。嬉しくてたまらないよ。本当」

どうやらいつもの大胡教師に戻ってくれたようだ。戦う前に見た大胡はきっと聖のことが心配でならなかったのだろう。少し怖かったが心配してくれていたのならば仕方がない。

大胡教師がやっと安心できたようで、綾乃の隣にどかりと座った。そしてそれを見計らったかのように勝の双眸が妖しく光る。隼人はそれに気付き、共感して共に双眸を光らせた。

「それはそれと先生。今回の報酬は？」

手をワキワキと動かしてアピールする。そう言えば勝が戦う前に言ってた『この戦いが終わったら先生に夕飯集りに行こうぜ』的なことを言っていたような。

それは当たっていたようで、大胡教師もそれが何の事だか把握していた。むふふと笑みを浮かべると、鞄の中から茶色い封筒を出した。

「校長が毎回のことながら軍資金を出してくれた。『いつも有難う』

だってさ。何も遠慮することはない。お前達の頑張りによる結果で弾き出した物だ。思いきり食べてやれば校長も喜ぶさ」
「いようっし！」
「校長アザァースっ！」

どうやら軍資金というのは勝利の褒美らしい。勝利する毎に校長から褒美が貰え、いつもよりも豪華な夕飯に在りつけるのだ。すでに二回程味を知った隼人は興奮して校長に感謝の意を叫んだ。勝もそれなりに嬉しいようでガッツポーズを取る。

「聖、皆でこれから夕飯だ。動けるか？」
「え？」
「お前も来るんだよ。どこか痛いとこあるなら小泉におぶってもらえ」

勝を見ると「カモーン」としゃがんで背中を差し出している。保健室にいる皆が聖を見ていた。

「い、いや大丈夫だよ。自分で立てる」

ゆっくりと移動してちさの隣に立つ。そこに上履きがあったからだ。履いて少しよろけながらも立つと、ちさがブレザーを差し出してきた。手を伸ばして「有難う」と言うと、それだけではなく広げて肩を持ってくれた。「着せてあげるから後ろ向いて？」と優しく言ってくれる。断るのは悪いので、それに甘えさせてもらった。
ブレザーを着て再び礼を言う。ちさは優しく頷いてくれた。しかし視界の端に微かな殺気を感じた。

「つ……月波さん、どうかしたの？」
「……別に」

綾乃は不機嫌そうにそっぽを向いた。いつものことだが。
そうして全員で保健室を出た。大胡教師は靴を生徒側の下駄箱の傍に置いてきたというので、そのまま一緒に校舎を出た。

「皆、今回は何食べたい？」
「はい！　回らない寿司のカウンターで食べたいです」
「焼肉かな。腹減ったし、運動した後はこれに限る」
「相変わらず男子は遠慮無いな。て言うか鳴本はやりすぎだっての。少ししか寿司食べれないと思うぞ？」
「じゃ、回転寿司で」
「あくまでも寿司がいいのな。――――女子はなんか希望はあるか？」

隼人はブーブーとブーイングを飛ばす中、今度は女子三人に聞いた。

「でも今回は私とチサリンは何もしなかったしねぇ。男の子が頑張ったし、男の子に任せましょ」
「あ、私も同じです」

百合子とちさは控えめなようだ。

「私も頑張ったんですけど。……でも特に食べたい物無いし。男子に任せるわ」

綾乃は選択をパスした。本来ならここで多数決か選択肢が増えるところなのだが、女子三人が何でもいいと言ったため、今日の夕飯は回転寿司か焼肉になりそうだ。
と、そこで思い出したように聖を見る。

「聖は？　何食べたい？　何でも良いなんて言うなよ？　お前が一番頑張ったんだから。何でも言ってみろって。別に寿司や焼肉以外でもいいんだからな？」

おお、そうだった。と早まりかけていた隼人も聖を見る。勝も見ていた。いや、全員だった。六人全員が聖の意見を待っている。何となくどうしようかと迷っている時に意見を求められたため、少し口籠った。それでも皆待ってくれている。高校の門を潜り、一般道に出てから聖は立ち止まった。皆もつられて立ち止まる。聖は意を決して言った。

「や…焼肉が、食べたい」

お。と勝の顔が綻ぶ。隼人は仕方無いと諦めて、しかし焼肉には賛成した。

「よっし。じゃ今日は焼肉に決定な。確か駅前に新しい焼肉店がオープンしたし。そこに行ってみようか！」
「うっす！　アザース！」
「ゴチになりやーす！」

先程から勝と隼人のテンションが異常な程高い。聖は苦笑いしか浮かべられず、そんな聖に大胡教師が寄り掛かって来た。

「聖、初めてじゃないのか？」
「え、何が？」
「こうやって自分の本当に思っている事や意見を、真正面から人に言えたこと。俺や雪歩以外の誰かに正直に打ち明けたじゃないか。一体どうしたんだよ」

言われてみれば確かにそうだ。友人はいるが、遊びに行く場所など時間を、聖は全てを人任せにしていた。というよりも他人に合わせていた。そうすることによって調和を保っていた気になっていた。

しかし今は違った。皆が聖の本当の意見を求めていた。つい先程まで肩を並べて戦った仲間達。本当の仲間が聖にもできたのだ。ならば聖が無理をして合わせる必要はない。本心を述べなければ逆に失礼だと思ったのだ。

「僕にもやっと、本心を打ち明けられる仲間が出来た……ってことじゃ、駄目かな？」

これも本心から。決して嘘偽りはない。

そんな聖を見て大胡教師は笑顔を浮かべ、脇腹を小突いた。

「駄目じゃない。むしろ良い事だ。――――今日はいっぱい食べろよ」

「痛いって。――――うん。そうするよ」

SILVER BLITZ

夜道、二人は誰もいない道を歩いていた。勿論これは帰路である。二人が抜け駆けしたのではない。

校長からの軍資金の殆どを隼人と勝が平らげて、聖もそれに負けないくらいに肉にがっついた。それでも二人の胃袋には負けた。「だからお前はチビなんだよ」と調子に乗った隼人のタレの小皿にトングで焼き網の炭を取り、隼人が余所見をしている隙にタレに付けている肉に乗せてやった。案の定それに気付かない隼人はそれを思い切り口に運び、直後「苦えっぉえあああああぐあああ」と叫ぶ程喜んでいた。

何故かちさが爛々と輝く瞳で焼き網を見ていた。何故なのかは聞くのは危険だと思ったので止めておいた。

大胡教師はビールを何本も飲みほしていた。それほど喜んでいるのだろう。

隼人と勝が満足する頃に解散の流れになっていた。時刻は午後二十一時を回っている。普通の高校生ならば帰らなければならない時間だ。それに女子もいる。

帰る方向がたまたま聖と同じだった綾乃は、聖と並んで――――と言っても少し距離を開けて――――帰る事になったのだ。何より大胡教師が「こんな夜に女の子を一人で帰らせる気かぁ？」と酔っ払いながら迫って来たので、刺激したくなかったし、聖も綾乃を一人で暗い道を帰らせるのはあまり良い気分がしなかったから、一緒に途中まで帰ることにしたのだ。

大通りを抜けて少し狭い道になる。互いの距離が少し縮まるかと思ったが、綾乃が歩む速度を上げて前に出た。辺りはもう暗い。木々が風で揺れていた。月が出ていたが残念なことに少し雲が掛かっていた。

「傷は…」

「え？」

唐突に前から声がした。綾乃の声だった。

「傷はもう、大丈夫なの？」
「あ、うん。治ったし。傷跡も残ってないよ」
「そう」

そこで会話が途切れてしまう。
でもそれは少し勿体ない気がしたので、何か話題は無いかなと思って探す。しかし探すよりも先に反射的に言葉が出てしまった。

「何か、ごめん」
「……何が？」
「保健室で月波さん、僕を見ていつも以上に機嫌悪そうだったから。何かしちゃったのかなと思って。だから先に謝っておくよ。――――ごめん」

そう言うと、綾乃は立ち止まった。反射的に聖も立ち止まる。しかし綾乃は振り返らなかった。右手を頭に上に乗せ、少し強く掻いていた。
数秒黙っていたが、やっと綾乃は口を開いた。

「別に怒ってなんかいないわよ」
「え？」
「少し心配してただけよ。あんたのせいで今日の夕飯が食べられなくなっちゃうかと思ったし。それにちさもよ。あんたなんかに甘くしちゃって。あんたなんか何もしなくてもゾンビみたいに立つんでしょ。ならあんなに優しくしなくてもいいじゃない。見てるこっちが恥ずかしくなっちゃうでしょ」

ふん。と鼻を鳴らす。
しかし聖は意外そうな顔で綾乃を見ていた。

「心配……してくれてたの」
「――――っ！！」

勢い良く綾乃が振り向いた。顔は真っ赤だった。
あんなに視線だけで殺しそうな顔をしていたのに、実は心配してくれていたのだと言う。いつも「クズ」と罵倒するものだから「あそこでのたれ死ねばよかったのに」と言っているのではないかと思っていた。
だが違った。そんな綾乃が聖を心配してくれていたのだ。

「そっか」
「煩い黙れ蹴り殺すわよ」
「有難う。月波さん」
「……っ！！」

綾乃は唸ると、また前を向いて足早に道を歩いた。聖もそれについて行く。何だか面白くなってきた。
しかしそんな面白さは続かなかった。

「じゃ、私こっちだから」

聖ももうすぐ家が近いところまで来た。そこで綾乃は道を右折する。もう顔は赤くない。正直に言っているようなので、一刻も早くここから離れたいという嘘ではないのだろう。

「解った。――――月波さん。今日は有難う。色々と助かったよ」
「そう。私は疲れたわ。こんなクズに守られるなんて恥ずかしくてならないわ」
「あはは……ごめん」
「ふん」

それじゃ。と綾乃は小さく手を振った。聖は「お休み」と言った。返事は無かった。

「本当、馬鹿なんだから」

聖がもう傍にいないことを良い事に、再び罵倒した。が、その顔は決して嫌そうなものではなく――――むしろどこか嬉しそうだった。

「本当に、月が似合うよなぁ。月波さん」

たった四日間の間で途轍もない波乱に巻き込まれた。一般的で平和な日常は奪われたが、そこまで酷い現実ではないようだ。

何より聖は今、達成感と充実感に溢れていた。これは祖母に教わった技術を習得した時よりも、それにより自分が強くなったと思える場面よりも。

本当の仲間と共に歩み、戦い、勝利する。これがどんな勝利の美酒よりも美味だということを知った。

勝てば皆が喜んでくれる。だがそれは決して皆と合わせているのではない。自分もその輪の中に入って背中を預けている。今までにない喜びだ。

聖はもっと強くなりたいと望んだ。今日の戦いで自分の未熟さを知った。未熟だったから隼人と綾乃を危険な目に晒してしまい、自分も傷を負ってしまった。情けない。

もう四月は戦いは無いと言う。あと一週間と少しは訓練が出来る。無敵武道部と共に再び基礎からやり直せば、綾乃に少しでも近づけるだろう。

ならば明日からもっとトレーニングを重ねるとしよう。何だか急

にわくわくしてきた。

「僕も強くなるさ。きっと」

うん。と拳を握る。もう家は近い。

と、その時唐突に思いだした。月を見上げていたらそれが思い浮かんだのだ。

暗闇の森林で戦いが終わった後、二人きりになった時に見せた綾乃の優しい表情。あれは一体なんだったのだろう。

そして聞き間違いだろうが、一瞬だけ綾乃が聖を名前で呼んでいたような気がする。

本当に綾乃という少女は何者なのだろう。今一番の疑問だ。

ただ一つだけ解っているのは、綾乃は月が似合う女の子。それだけだった。

第一章『月が似合う少女』完

月が似合う少女　？？（後書き）

次章

『爆炎にモゆる少女』

爆炎に萌ゆる少女　？（前書き）

あれ、どうしてこうなったんだろう。気軽に話しかけたのに、なぜ今死にかけているんだろう。様々な思いが交錯する中、少年は炎の渦の中で必死に抵抗していた。
あの可愛らしい少女が、少年に向かって炎を放ってとても楽しげに笑っているのだから、これだけ焦るのは仕方ないと思うのだ。

爆炎に萌ゆる少女　？

え？　と呟いた。原因は簡単だった。
もう一度、え？　と呟いた。原因はこちらに向かって哄笑しながら歩いて来る。

「アハハハハハ！　なんで緋之くん逃げちゃうのぉ？　こっちに来て遊びましょうよお」

最初は軽い気持ちだった。何となく彼女の魔術が見たくなったから。それまで彼女は頑なに自分の魔術を見せたがらなかった。使う属性は炎属性だと聞いている。五月に入ってから彼女は第八段階（スペック）にランクを上げたらしい。つまり三回の進化か変化、新しく属性を追加できる状態にあるのだが、彼女は炎属性を強くし続けた。

「ちょ、ちょっと待って都竹さん。何でそんなに攻撃的に……って言うかキャラ変わり過ぎじゃない？」
「もう私のことはちさって呼んでって言ったでしょお？　それよりも綺麗だと思わない？　この炎。思わず呑み込まれちゃいそうで、うっとりしちゃう」

そう。聖を追い詰めている少女とは都竹ちさだった。ちさは隣のクラスの唯一の図書委員だった。綾乃と対照的な性格。そして男子の視線を釘付けにしそうなスタイル。趣味は読書という大人しい少女で、聖を心配して気遣ってくれた優しい女の子だったので、図書委員の女子の中では一番仲が良い。だが稀しくもたまに綾乃の視線が飛んできて痛い。
炎に追い詰められるのは久しぶりだった。確か一ヶ月前にもこんなことがあったような気がする。もしかしたら炎に嫌われているの

かもしれない。

「緋之くん、行くよぉぉお」

ちさの左腕が再び赤く光る。今まで聖を追い詰めていたのは炎属性の基礎『ファイア』を変化させた『フレア』だった。しかしちさは更にそれを変化させたのだ。第八段階（スペック）になった彼女は炎属性の魔術を三つ変化させていた。

ちさは隣のクラスの唯一の図書委員で、長い栗色の髪の優しい少女だった。先月本格的に戦場に出て疲弊した聖を気遣ってくれた。そんなちさがなぜ聖に笑いかけながら炎を放って来るのだろう。

そしてちさが新しく繰り出したのは『ファイア』の変化系、『ボム』だった。

彼女は高らかに笑うと、空間から出た丸い爆弾を聖に向かって投擲した。聖の悲鳴が虚しくも爆音に掻き消された。

「ああ……楽しい」

ウットリとしたちさが、満足そうに微笑んだ。

SILVER BLITZ

神明高校の一年生である緋之聖は朝がとても好きだった。特に爽やかな朝は清々しい気分になれるので平和というものを直に感じる

ことができる。あの戦場の空気はどこか嫌いだった。
聖は決まった時間に家を出る。それに伴い起床する時間も決まっている。午前六時に起床。身支度を済ませてキッチンに立つ。一通りの家事は教えられていたので迷わず手が動いた。
聖には親がいない。父も母もすでに他界していて、聖を教育したのは祖母だった。しかしその祖母も数か月前に他界した。聖は今度こそ一人になった。しかし聖の傍には祖母の教え子がいた。大河大胡と冬峰雪歩。大胡は高校の教員で聖の担任。雪歩は高校三年生で聖の入っている無敵武道部の部長。この二人が高校生となった聖の面倒をみてくれている。
しかしいつまでもこの二人に全て頼ってはいられない。聖は祖母から教わったことをフルで活用して何とか生活をしている。生活の資金は両親が残してくれた。保険やらもあるが、なぜか家には聖が大学まで行けて、その先数年まで生活できそうな資金があった。これを頼りに学費を払って生活の遣り繰りをしていた。だが無駄遣いはしたくないので朝昼晩と暇さえあれば全て自炊している日々。米は前日の就寝前に炊飯器に炊飯時刻を設定して予約をする。午前六時前には炊けているので、朝と昼に分けて食べる。
その日も朝食を軽めに作って充分満たないで家を出た。なぜならば部活の朝練習に出なければならないのだ。昼食の弁当を鞄に詰めて、小さく畳んだ制服と下着も入れる。登校は高校指定のジャージで行う。高校までランニングをしてアップを済ませるのだ。朝練習は基礎体力作りとそれぞれの技の練習。聖は主に蹴りを練習していた。足腰から強くしなければならない。
先月行われた戦争。シルバーブリッツという魔術師達の戦いに本格的に参加した聖は、最後で己の未熟さを痛感した。自身に傷を負わせて仲間を危険に晒した。それでは駄目なのだ。なので聖は四月下旬から更に練習に力を入れた。基礎体力作りは二倍の訓練を通常の時間で済ませている。負担も倍になってしまうが、もう慣れてしまった。強くなる。とにかく強くなる。今の聖を動かしているのは

その信念だった。
が、戦争はそれだけでは勝てない。やはり根本的なこともある。シルバーブリッツとは魔術師達が参加するのだ。なのに身体だけ鍛えていても勝てないだろう。彼らは殴る蹴るという物理的な打撃よりも遥かに高威力な攻撃、魔術を使用して来るのだから。そして今では聖もシルバーブリッツの一員だ。魔術の強化も忘れていなかった。シルバーブリッツとは各高校の図書委員会の委員がなれるものであり、魔術をしようできるのは図書委員に登録されてからだった。聖の通う神明高校も図書委員があり、図書委員計六名がシルバーブリッツとして登録されている。
聖は放課後図書室に現れ、書庫に入る。図書委員会、または教員しか入れないそこはシルバーブリッツが日常で魔術を練習するために設けられた場所だった。勿論表向きに書庫とあるので登録されていない、または廃棄予定の本、大きい本などの保管場所であるため本が山の様に積まれて埃っぽい。しかし聖は構わず奥に進む。テーブルに置いてある一冊の本を開いた。その本こそが魔術の練習場所となっている。
全ては強くなるために。聖は日々精進している。

その日は五月の中旬の始めの方だった。五月病が同級生の中で流行りだす寸前の中、聖はいつもと変わらぬ生活を送っていた。
朝練習を終えて更衣室で着替えを済ませて教室に向かう。一年生から三年生まで、校舎は生徒で溢れ返っていた。やはり普通の平和な生活だった。この光景は好きだ。教室に入って友人と挨拶を交わし、とある特定の少女に舌打ちされて苦笑いを浮かべる。大胡教師が来て一日が始まった。
こういった普通とは違う考えをするようになったのも、他校と裏で争い偏差値を勝ち取るための学内組織、シルバーブリッツの一員

となった自覚が出て来たのだろう。最初は驚いて戦いを否定して、信頼していた大胡教師を疑った。だが仲間と戦ってもぎ取った勝利の感覚が心地よかったので、今もシルバーブリッツとして行動を続けているのだ。

戦いに勝利すると偏差値が僅かに上がる。偏差値はシルバーブリッツの魔術戦力のことだと聞いた事があるが、勝てば勝つたびに自分達は強くなる。そういうことなのだろうか。

偏差値が上がる度に高校が豊かになる。そう大胡教師から聞かされていたが最初は解らなかったものの、ここ最近になってやっとその意味を理解し始めた。例えば小さな事ではあるが、学食のメニューが増えて、しかし値段が全て少しだけ安価になった。トイレがいつもより綺麗になった。いじめや贔屓などを見なくなった。小さい事だったが決して悪い事ではない。良い事だった。笑顔が絶えない高校。理想な素的な高校だ。

「だけど」

昼休み。聖は教室の窓際で厨即の弁当を食べていた。目の前には椅子をこちらに向けてパンを齧っている隼人。

「んあ？」

聖の呟きを耳にした隼人が、千切ったパンを頬張りながら反応した。

聖は憂鬱な顔で続ける。

「どれだけ僕達が頑張って高校が良くなったって、変わらないものもあるんだよなぁ……」

「んっく――――例えば？」

「ほら、もうすぐ来るよ」

教室の壁に掛かっている時計を指差す。それから「三、二、一」とカウントダウンを開始した。カウントダウン開始直後に教室の外からドドドと地鳴りのような音が聞こえた。

「ゼロ」

言うが早いか、刹那、教室のドアがガランと音を立てて開かれる。そこには数人の男子が立っていた。　いずれも見た事がある顔ぶれだ。神明高校に入学してから一ヶ月。聖もそれなりに友人を作った。どちらかと言えば明るい性格なのでよく笑う。そこが気に入られたのだろう。無敵武道部なんぞというネタ部活に所属していることも知っているが、最早ネタであるので皆理解してスルーしてくれている。今更ながらに良い友達を持ったものだと感心するのだが。

この男達は違った。どれだけ高校生活が良くなろうとも、この男達は絶対に変わらないと思う。

「緋之聖はいるかぁあああああ」

雄叫び。すでに今月になってから三度聞いた。聖が呆れて溜息を吐き、隼人が「成程」と納得して頷いた。

ドアから教室に入って来たのは隣のクラスの男子達。いや聖のクラス以外の男子が数人結成されたメンバーだった。彼らは運動部、その中でも格闘系の部活の一年生で聖も何度も顔を見ていた。

彼らは十二時半きっかりに教室に突撃して聖を呼びだす。勿論聖には微塵もその気はないのだが。

さて今回はどんなメンバーなのかな。と人数を数える。初期メンバーの剣道、柔道、空手道、ボクシング。そして珍しくスポーツ軍までいた。バスケットボール、サッカー野球と言った七人がそこに集結していた。

いきなりのことだったので昼食で賑わっていた教室はシンと静まり返っていた。全員が運動系部員と聖を見ている。今月になって三度目のことだったが虚を突かれてはどうしようもなく驚いて静まってしまう。

最初はもう驚きで皆動けずにいた。なぜなら彼らは一年生の中では一番の実力を持つ男子だった。一年生の中のエースと言ったところか。そんな彼らがいきなり教室に入って聖を呼びだすのだ。弁当のおかずを頬張っていた聖はどこか抜けた顔で彼らを見る。

彼らが押しかけて来た理由を聞いたが本当にくだらないもので、呆れたら襲い掛かって来た。なので撃退した。最初は剣道、柔道、空手道の三人だった。三人に囲まれては聖はどうしようもない。クラスの女子が大胡教師を呼びに行こうとしたが、その足は止まった。襲い掛かった直後に三人は倒れていた。土下座をしているように見える倒れ方だった。一体何をどうしたらこのような倒し方になるのだろう。傍で一緒に昼食のパンを齧っていた隼人がパチパチとローペースで拍手をしていた。

この時は事を隠密に済ませたので教員にはこのことを知られていないが、こうも何度も押しかけられてはいつかは教員にも知られてしまうだろう。そうすれば互いに部活禁止令が出てもおかしくない。

「また来たの？」

立ち上がり、七人に面向かう。さてとこの七人をどう料理してやろうかな。と構図を組み立てていた。

一方七人は教室に入り、聖に近づいた。聖はゆっくりと拳を軽く握る。いつでも襲い掛かられてもいいように両足から力を抜いた。

「一応もう一度理由を聞いておくよ。どうして僕に突っかかるのかな？」

これがもし前と同じ理由なら、もう完全にボッコボコにすると決めた。完膚なきまでに叩きのめす。二度とこんな変な考えが起きないように記憶そのものも奪ってやる。

すると格闘系の四人が口を揃えて言った。

「知れたこと！　なんでお前達みたいな訳の解らない部が、道場を週に三日も占領している！？　普通は俺達のような正規な格闘系の部活が使うのに、なんで俺達が週に一度、それも時間交代制で使わなきゃならんのだぁあああああ！！」

練習してきたのだろうか、三人は一糸たりとも乱れずに叫びきった。そんな暇があるならもっと強くなる為の訓練でもしてくればいいものを。

しかしこれはもう三度聞いた。なのですでに二度言ったことをもう一度いう事にした。それと共にこの集団には大変申し訳ないのだが強制的に退場してもらい、先程決意したことを実行に移すことにした。

「君達の先輩、つまりレギュラーは、常に優先的に練習できるだろ？」

「それがどうした」

「それと同じだよ。常に強い側が道場を使える。そう思わない？」

「こ、この野郎！」

まぁ当然と言えば当然だ。彼らのプライドを傷付けるような発言をしたのは認めるが、先に彼らが聖の昼食を妨害したのだ。もし裁かれてもこちらには証人がいるのでそこまで酷い事にはならないだろう。

なぜならこちらは一人であちらは七人。どちらも運動部である以上、多くで掛かれば喧嘩にしか見えない。それにここは教室だ。傍

には隼人がいて、しっかりと話しの内容を聞いている。
まずは武道の四人が聖に仕掛けた。ここまで言われては殴ってしまっても仕方がない。もうすでにお馴染みとなってしまった光景。これで三度目だった。

「ちぇぇいっ」

先陣を切って飛び出したのは剣道の男子。あーあ。と呆れながら聖は右手を横に伸ばした。掴んだのは自分のロッカーの扉だ。教室の後ろには個人個人のロッカーが備えられており、色々な物がそこに置けることになっている。
剣道の男子が手にしているのは竹刀だ。武器を持っているのに素手の相手に向かうとは普通の生徒から見ればあまりにも卑怯なことだったのだが。
スイと聖は開いたロッカーの後ろに移動した。聖の何気ない動きに気を張っていた剣道の男子は機敏に反応し、竹刀を思い切り振り降ろす。刹那、ゴツンと硬質な音がした。聖が逃げ込んだロッカーの扉に竹刀が叩き込まれたのだ。ロッカーは人数分あるためとても小さいのだが、聖は元々華奢で小柄なので身体を横にしてしゃがんでしまえば身体の殆どを扉で隠せてしまう。それと共に肩で扉を押さえて壊れないようにした。剣道の男子は驚いて竹刀に入れていた力を少しだけ緩めてしまった。隙を窺っていた聖にはそれが解っていたので、もう片方の空いている手でロッカーの中にしまっておいた分厚い辞書を握る。
グンと扉を押すと簡単に剣道の男子は引いた。しかしその一人だけ気にしていてはいけない。辞書を抜き取るとそこから転がり出た。剣道の男子の背後から空手道の男子が飛びだした。聖は転がり出ると共に辞書でその脛を思い切り叩いた。流石は弁慶の泣き所と言われたところだけはある。接近戦では二番目に厄介な空手道の男子を一発で跪かせた。次は柔道の男子。流れを読まれて投げられるのは

ご免なので常に床を這う。そうすれば急に投げらることはない。それなのに柔道の男子は近づいて来るのだ。それは自信過剰に加えて経験不足によるものだ。興奮と怒りによる感情のコントロールが出来ていないのだろう。聖は二度目の呆れの末、突っ込んでくる柔道の男子に向かって逆立ちのように右足を逆立てた。いきなり眼前に現れた聖の右足の裏が迫り、踵よりかは柔らかい脹脛の裏が顔面にめり込む。ダメージは然程ないものの重心が崩れたのだろう。その場でバランスを崩して前のめりに転んでしまい、さっきの空手道の男子と同じ体制で床に突っ伏してしまう。

そこでやっと驚きから我に返ったのだろう剣道の男子が聖に竹刀の切っ先を向けて思い切り突き出してきた。本気の突き。竹刀とは言え当たれば怪我になる。聖もここで少し本気になった。向かって背後から忍び寄るボクシングの男子にも気付いていた。ボクシングの男子は左手を握って右足で床を蹴り、鋭いストレートを放って来た。それぞれリーチが違うため、タイミングが合わせ辛い。なので数センチ後退して距離の調節を合わせ、タイミングを計って身体を捻った。

クラスの全員が「おお」と歓声を上げた。聖は二人同時に攻撃をしていた。身体を捻ると同時に左手に持つ辞書、床を蹴った右足を後ろに放つ。左足で重心を整えてそれぞれの攻撃が完成した。左手に持つ辞書は剣道の男子の背中に、右足の脹脛の裏はボクシングの男子の首に当たっていた。二人の攻撃は身体を横に捻ったことで紙一重で同時に回避する。それによって二人の距離がさらに縮まったので聖の射程内に入ったのだ。二人には怪我が無いように力の調節はしてある。

「お前っ……ボクシングにキックは反則……」

「僕は無敵武道部だ。そっちの反則はこっちの反則でもないし、フリーの格闘術にそこまで禁じ手はないんだ。それを理解してるから掛かって来たんじゃないの？」

元々はそちらから売ってきた喧嘩だ。喧嘩にルールなんてものはないだろうに。怪我をしないようにしてあげたのに酷い言われようだと呆る。

結局また倒してしまった。十秒もかからなかった。しかも四人共同じ格好で床に突っ伏している。

「緋之。お前も苦労してるんだな」

苦笑いを浮かべた隼人が同情して聖に言う。聖も苦笑いでそれに応えた。

しかし隼人は別なものにも気付いているようで、そこに親指を向けた。

「あれも、変わってないようだしな」

あれ。と言われたものを目で追っていくと――――

「……クズね」

不機嫌そうにこちらを見ている綾乃の姿があった。

「あ……確かに変わらないね。先月から」

変わらないのは、相変わらず四月から聖を「クズ」と呼び続ける綾乃だった。

聖の苦笑いが続く事になってしまう。そんな聖を見ていると、先程までの聖とは違って見えてしまうのだ。今までと同じように苦笑いを浮かべる聖の足元には四人の一年エースが転がっている。無茶苦茶な妙名の部活なのだが、とにかく強いことが解る。

「それで、君達は何の要件なの？」

スポーツ系の一年エース達が後退る。聖がさらにその距離を詰めた。

そう言えば二回目以降からスポーツ系も参加し始めたのだったと思いだす。そして二回目の時も同じ質問をした。もし同じ応えだったとしても仏の顔も三度までとあるように、今回は許してやってもよい。

だけど次は許さない。運動は出来る程度にボコボコにすると決めている。

「決まっている！　冬峰先輩をマネージャーに寄越せ！」

「前にも聞いた。って言うか何で僕に言うかな。雪歩姉ぇ……冬峰先輩に頼んだら？」

「恥ずかしいだろう！　だからお前に頼んでいる。冬峰先輩はお前だけにしか抱きつかないからな！」

高らかに言い放つも言っている内容は下心が丸見えの、思春期の男子が思っていそうな答えだ。だが周りの男子最後だけは同意していた。

冬峰雪歩とは神明高校の三年生であり無敵武道部の部長である。成績優秀スポーツ万能という文武両道の彼女は容姿は勿論性格も非の打ちどころが無い、神明高校で彼女にしたい女子、堂々の一位を記録している。男女関わらず誰にでも優しく教員にも気に入られている。

そんな雪歩は雪歩は小学生の頃から聖と共に武道を教わっていた。師は聖の祖母である。幼い頃からの付き合いなので雪歩は聖を弟の様に可愛がってくれた。しかし最近は弟いうよりも一人の男のように扱ってくるので、それなりに自分も成長しているのだろうと感じ

られる。
聖が武道で唯一勝てないのは大胡教師と、雪歩だった。
はぁ。と呆れて溜息を吐く。
なぜか背後から睨まれる殺気が強くなる。綾乃の殺気だった。
「だからお前から説得しろ！　冬峰先輩を俺達のマネージャーにして、いずれは彼女なんかに……」
「私が、どうかしたって？」
スポーツ三人組の動きが止まった。この状況では愛の告白とも取れる発言を本人のいない場所で叫んで訴えているのに、なぜか肝心の彼女は後ろにいた。
「雪歩ね……冬峰先輩」
「あ、また言い直す。大胡くんにも困ったものだね。折角可愛く呼んでもらってるのに。私は別に素の呼び方で構わないんだよ？」
雪歩は教室に入ると聖の前に立つ。
「で、この男の子達には怪我はさせて無いよね？」
「うん。でもちょっと痛い目にはあってもらったけどね」
「なら良し」
何が良しなのかはまったく解らないが、雪歩は周りを見て、最後にスポーツ三人組を見た。
「で、君達はさっき何て言ってたの？」
「い、いえ。何でもありません！」
流石にこれ以上は羞恥が平常心を保たせてはいられなかった。ス

ポーツ三人組は雪歩に「失礼します」とスポーツマンのように一礼して教室から飛び出した。そこはスポーツを嗜む者。礼儀は大事だと解っていただけ聖の足元で転がる四人よりかはマシなのだろう。

「ところで聖くん。今日は練習来るのかな？」
「え、あ。うん。ちょっとだけ」
「ちょっとだけって……また先週みたいに一時間だけやって早く上がっちゃうし。そんなに急いで何やってるの？」
「図書委員の仕事をね。書庫の片付けやらないと」
「聖くんまだ一年生なのに、何でそんなに働かせられてるの？　あ、また大胡くんにいじめられたの？」
「ち、違うよ雪歩ね……冬峰先輩」
「まーた言い直した。聖くんに先輩だなんて他人みたいに言われたくありません。はい、言い直し」
「ん……ゆ、雪歩姉ぇ」
「はいよく出来ました」

よしよしと聖の頭を撫でる雪歩。身長差はあまりない。と言うかもう聖の方が数センチ高いのに手を伸ばして無抵抗の聖の頭を撫でるのだ。
その瞬間、教室の中の男子プラスαは一丸となって殺気を帯びていた。男子の心中では雪歩に褒められながら頭ナデナデのコンボが羨まし過ぎて聖を今にも罵倒したい気分だった。一方プラスαは今にも別の意味で聖を蹴り殺したい一心で睨みつけていた。言うまでも無いが綾乃である。

「まぁいっか。じゃ聖くん。放課後、道場でね」
「うん。またね。雪歩姉ぇ」

一通り聖の頭を撫でまわした雪歩は、満足そうに手を振って教室

を後にした。聖も手を振って見送る。　それからこの状況をどうしようかと考え、

「隼人、この殺気どうしよう」
「あ？　殺されればいいんじゃねぇの？」

殺気を向けている男子の一人――――相棒の隼人に聞いてみた。するとどうだろう。予想通りの答えが帰って来た。満面の笑みで聖に中指を立てる。

「じゃ、月波さ――――」
「蹴り殺すわよクズ」

いつもよりも激しい顔で睨みつけて来る綾乃の顔は最早般若に近い。いや綺麗な顔なのだがオーラが発生してオーラが般若の仮面を作り出しているのだ。髪が逆立っているのは幻覚に違いない。

「死ねクズ」

綾乃は弁当の脇に置いてあった空の水筒を手に取ると、蹴っ飛ばして聖に当てようとした。しかし的は外れて倒れているボクシング部の一年生の尻に激突し、「ギャン」と呻く。

これは使えると思って空手の一年と柔道の一年の首根っこを掴むと同時に、教室の男子が綾乃が先陣を切った事によってそれに倣い、手当たりしだいに物を投げつけ始めた。

結局聖は無傷に終わり、盾にされた二人は全身がボロボロになって昼休みを終える事になった。

爆炎に萌ゆる少女　？（後書き）

少女は言う。炎が大好きなのだと。普通可愛らしい少女とは大人しいものだと思っていたが、もうそんな時代は終わったようだ。少女は炎を見て高らかに笑う。これが少女の悩み事だという。少年はどうにか力になりたくて、とある提案をするのだが……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1373w/

SILVER BLITZ

2011年12月12日23時45分発行